

## テイル文の意味的分析 ——動詞分類と事象構造の精密化へ向けて——

宮腰 幸一

### 要旨

本稿は日本語のテイル文を意味的に分析し、それを通して適切な動詞分類と事象構造を探究する。主な主張は大きく分けると次の三つであり、その二つ目には細かく分けると四つの提案が含まれている。(1) テイルとは、内在的に有界の事象を表す動詞に付き、その事象の成立点突破後の一局面の継続を非有界的に前景化する補助動詞である。(2) 事象／動詞は二つの観点から複合的に整理・分類され、各タイプは文字通り縦横に精密化された新しい事象構造によって明示的に表し分けられる。具体的には、事象／動詞は (a) <原因性>・<行為性>・<変化性>という三つの素性（と一つの下位素性）による動力学分類と、(b) <限界性>・<完結性>という二つの素性（といくつかの下位素性）によるアスペクト分類を複合的に組み合わせることによって細かく分類される。事象構造は、(c) 時間を横軸にとり、それに沿って縦に並んだ複数の層——<原因層>・<行為層>・<(不)変化層>——から成り立ち、(d) 各層は限界点／完結点を境界にしていくつかの局面——<初期相>・<活動相>・<変移相>・<結果相>など——に分割される。この並行事象構造によって、動力学情報は主に縦の次元で、基本的アスペクト情報は横の次元で、そして複合的アスペクト情報は縦と横の二次元で、すべて同時に表示される。(3) この事象／動詞の分類と構造記述に (1) で述べたテイルの定義を組み合わせると、動詞+テイル形が生み出す一見多様な意味解釈とその間に一貫して見られる本質的な共通点の両方が矛盾なく捉えられる。

### 1. はじめに

日本語のテイル文には非常に興味深い特徴がいくつかあり、これまで多くの研究がなされてきた。特に金田一 (1950/1976) 以降、金田一 (1955/1976)、鈴木 (1957/1976)、藤井 (1966/1976)、高橋 (1969/1976, 1976, 2003)、吉川 (1973/1976)、奥田 (布村) (1977, 1978, 1988)、Jacobsen (1979, 1982, 1992)、工藤 (1982, 1995)、矢澤 (1983, 1985, 2007)、仁田 (1982)、尾上 (1982)、森山 (1983, 1984, 1988)、寺村 (1984)、国広 (1985)、国立国語研究所 (1985)、竹沢 (1991)、Harasawa (1994)、吉川 (1995)、Matsumoto

(1996)、三原 (1997)、中村 (1997)、城田 (1998)、Ogihara (1998)、Shirai (1998, 2000)、Nara (1999)、佐藤 (1999, 2005)、金水 (2000)、井上 (2001)、岩本 (2002, 2006)、岩本・上原 (2003)、須田 (2003, 2007)、副島 (2007)、野村 (2007)、吉永 (2008) など、膨大な研究の蓄積がある。<sup>1</sup> 本稿はこうした研究成果に基づいて、テイル自体の意味・機能とテイルが付く動詞の事象構造について新たな提案をし、それによって動詞+テイル形が示す一見多様な振る舞いとその背後に潜む本質的な共通点の両方を記述・説明することを試みる。さらに、ここで導入される動詞分類や事象構造は、テイル文という個別言語の個別現象のためだけにアド・ホックに仮定されるわけではなく、他の日本語アスペクト表現を含む多くの言語現象を記述・説明する際にも重要な役割を果たすことも示す。

議論は次のように進められる。まず次節で簡単に先行研究を概観しながらテイル文の事例を用法別に整理し、説明されるべき経験的現象と解決されるべき理論的問題をまとめる。そこで明らかにされるように、テイル文が示す意味解釈上の多様性の謎を解くカギは、テイルそのものというよりはむしろそれが付く動詞の意味——厳密にはその動詞が表す事象の特性——にある。したがって続く3節では、まず事象・動詞を動力学とアスペクトという二つの観点から細かく整理・分類し、各動詞が表す事象を明示的に表し分けられる構造とその表記法を提案する。そうして分類・構造表示された動詞の事象構造をベースとし、その上にテイルの意味を重ね合わせると、結果として様々な意味解釈が生み出されること、そしてその一方でそれらの間には共通点があり、それがまさにテイル自身の意味・機能であることを4節で具体的に例証する。最後に5節で全体をまとめ、3節で提案される動詞分類や事象構造の必要性と重要性を示す更なる証拠となり得る現象を簡単に紹介しながら本研究の理論的含意と今後の研究の方向性について言及する。

## 2. 先行研究と課題

先行研究で明らかにされてきた主な事実には、(a) 日本語動詞にはテイルを付けられるもの（ほとんどすべての動詞）と付けられないもの（「ある」「いる」など少数）があること、(b) 動詞+テイル形は例文 (1) に示されているようにいくつかの一見全く違った意味に解釈され得ること、(c) その解釈はテイルの付く動詞のタイプによってかなりの程度決まること、そして (d) 動詞以外の文成分（特に内項や副詞）もある程度テイル文の解釈に影響を及ぼすこと、等がある。

- (1) a. 一郎は今プールで泳いでいる。 <動作進行>

- b. このパソコンは壊れている。 <結果残存>
- c. 花子は毎朝公園を走っている。 <反復／習慣>
- d. 二郎は一度イギリスに留学している。 <経験／パーフェクト>
- e. この道は市役所前で左に曲がっている。 <“単なる状態”>

先行研究は上述のように膨大にあるが、それらの記述的妥当性は次の五つの観点から評価することができる。(i)テイル形の意味解釈をどれだけ細かく分類しているか、(ii)それを単なる用法別の列挙で済まらずに、互いの関係を捉えながらどれだけ(テイル内部のレベルで)体系的に分析しているか、(iii)(シ)テイルと他のアスペクト形式(例えばスル)との対立を考慮に入れながら(アスペクト全体のレベルで)どれだけ体系的に分析しているか、(iv)テイルが付く動詞をどういう観点からどれだけ細かく分類しているか、(v)動詞以外の文成分がテイル形の解釈に及ぼす影響をどれだけ詳細に記述しているか。

例えば(i)に関しては、多くの研究の出発点となった金田一(1950/1976)では<動作進行>と<結果残存>の二つに、金田一(1955/1976)では<既然(=結果残存)>・<進行>・<反復進行>・<将然(「本を読もうとしている」のような用法)>・<単純状態>の五つに分類されている。高橋(1969/1976)も五分類だが、金田一(1955/1976)とは<将然>の代わりに<経験>を入れている点が異なる。藤井(1966/1976)は高橋の五分類に<持続(「今じっとしている」のような用法)>と<存在(「小説の中に表現されている人物」のような用法)>を加えて七つに分類している。

これらはいずれも単に用法を列挙しているだけだが、吉川(1973/1976)になると同じ五分類でも基本的用法(<動作進行>と<結果残存>)と派生的用法(<反復>・<経験>・<単なる状態>)が区別されるようになる。つまり上の基準で言えば、(ii)の点で一歩進んだと言える。それ以後の研究の多くは吉川とほぼ同じような分類をしている——そのため例文(1)では吉川の五分類に合わせて例を提示した——が、テイルの本質的意味が何かについては研究者の間で一致した意見があるわけではない。例えば工藤(1982, 1995)は<継続性>をテイルの中心的意味とみなし、基本的用法を<動作継続>と<結果継続>としてまとめているし、三原(1997)もテイルの中核的意味は<持続>であると仮定し、テイルの用法全体を<動作持続>・<結果持続>・<状態持続>・<効力持続>と統一的に捉えている。一方、寺村(1984)・城田(1998)・副島(2007)等は、テイルの本質的意味は<継続性／持続性>よりもむしろ<結果性>にあると主張している(この<結果性>とはどういう意味かについてはすぐ後で具体的に紹介・検討する)。

(iii)の観点から見ると、初期の研究は総じてあまり体系的ではないが、奥田(布村)(1977, 1978)以降、特に工藤(1982, 1995)・森山(1983, 1984, 1988)・金水(2000)・副

鳥 (2007) は (シ) テイルをスル等と対立させながらアスペクト体系の中に位置づける必要性と重要性を指摘している。

(iv) の点に関しても、金田一 (1950/1976) の四分類 (<状態>・<継続>・<瞬間>・<第四種>) 以降様々な提案がなされてきている。例えば鈴木 (1957/1976) は<動作性>・<状態性>・<動作状態性>という基準で動詞を大きく三つのタイプに分類しているし、高橋 (1969/1976) はまず<状態性>で動詞を二分し、非状態動詞を<継続>対<瞬間>という基準と<結果>対<非結果>という基準で四つに交差分類している。藤井 (1966/1976) や吉川 (1973/1976) に至っては、さらに細かく (それぞれ十前後のタイプに) 動詞を分類している。金田一 (編) (1976) 以降では、奥田 (布村) (1977, 1978) が金田一の注目した<継続>対<瞬間>の対立に対して<動作>対<変化>の対立の重要性を説き、その後工藤 (1982, 1995) がそれを発展させたより包括的な動詞分類——それも後ほど紹介・検討する——を提案している。森山 (1983, 1984, 1988) も奥田の洞察を基にしてはいるものの、それに独自の素性分析を加え、精密な動詞分類を提案している。吉永 (2008) は主として心理動詞に焦点を当てた研究だが、動詞分類に関するいくつか興味深い観察と指摘も見られる。

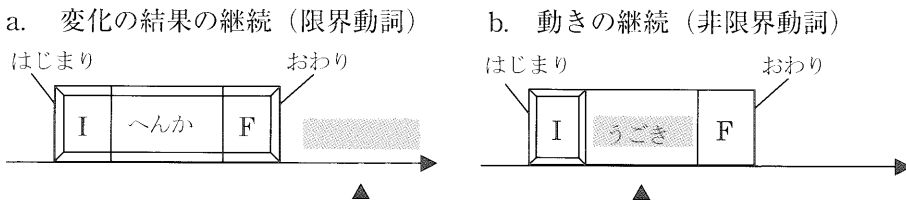
(v) の点に関しては、ここ数年は特に英語のアスペクト/スケール構造理論を採用した研究が見られるようになったが (岩本 2002, 2006、岩本・上原 2003)、伝統的な日本語学の枠組みで正面からこの問題に取り組んだ研究はあまり多くない。しかし矢澤 (1983, 1985, 2007) や森山 (1983, 1984, 1988) は例外的に早くから動詞以外の文成分の重要性を指摘していた。特に矢澤は副詞的修飾成分を非常に細かく分類し——その一部も後ほど紹介・検討する——、それがテイル形の解釈に及ぼす影響について詳しく論じている。

このように、これまで数多くの先行研究によってテイル自体やそれが付く動詞の特徴がかなり解明されてきている——そして本稿もそれに負うところが大きい——のだが、その一方、未だに意見の一致が見られない点や未解決の問題もいくつかある。そこでここでは、最新かつ体系的な研究の一つである副島 (2007) を中心に比較的新しい研究をいくつか取り上げ、それらを批判的に検討することによってどのような問題が残されているかを明らかにし、次節以降の議論につなげることにする。なお、冒頭で述べたように、本稿の主な目的はテイル文の意味的分析を通して適切な動詞分類と事象構造を探求することにあるので、テイル文の持つ多様な意味のうち特に動詞 (が内在的に表す事象) のタイプによって解釈が左右されるものに焦点を当てる。具体的には、<(ある種の)反復/習慣>と<経験/パーフェクト>は動詞の内在的意味とほとんど関係なく、ほぼすべての動詞+テイル形で成り立つので、本稿はそれら以外の用法を中心に論じる。

副島 (2007) は、テイルの意味を二つの基本的意味 (<動きの継続>・<変化の結

果の継続>)と三つの派生的意味(<ペルフェクト>・<反復・習慣>・<単なる状態>)に分け、それらに共通する不変的意味は<結果性>であると主張している。さらに、二つの基本的意味の違いを捉えるために、動詞を「限界動詞」と「非限界動詞」に分け、前者は「限界性の動作を表す動詞 (p.25)」で、「動詞が内包する限界とは、動詞が表す変化の達成点、すなわち変化という状況の成立点である (p.26)」と定義している。後者は「非限界性の動作を表す動詞 (p.25)」で、「状況の成立点にあたるのは動きの開始点である (p.26)」と仮定している。この分類によると、例えば (1a) の「泳ぐ」は非限界動詞、(1b) の「壊れる」は限界動詞となり、それらの事象の成立点はそれぞれ動作の開始点(泳ぎ始めた時点)と変化の達成点(壊れた時点)ということになる。上でふれた<結果性>とは、それぞれの事象が成立した結果の局面を指しており、テイル形はその局面の状態が継続していることを表す表現であるというのが副島(2007)(と副島が依拠している寺村(1984)・城田(1998))の主張のポイントである。<sup>2</sup>この点を副島は次のような図で表している。

(2) 副島(2007)によるテイル形の基本的意味の記述 (p.122;I:開始点:F:終了点)



例えば (1a) の「泳いでいる」は動きの継続、(1b) の「壊れている」は変化後の状態の継続を表しているが、どちらも事象の成立後の局面における状態の継続という点では同じであり、(2) の図ではその部分が網掛けの棒線で表示されている((1a)は(2b)に、(1b)は(2a)に対応している点に注意)。

この分析は大変興味深いものであり、次節以降で提示する本稿の分析にもその洞察の一部が取り入れられているが、このままでは説明できない現象がいくつかある。ここではそのうち五つを見ておこう。まず一つ目は、次のように限界動詞+テイル形が変化の結果ではなく途中の過程を表していると解釈できるケースである。

- (3) a. 一郎が居間の窓を閉めている。
- b. 二郎が庭の納屋を壊している。

「閉める」や「壊す」などは変化を表し、ある状態になった時点でその事象が達成されたと言えるような限界点があるので、副島の分類では「限界動詞」となる。しかし、(1b)とは異なり、(3)ではそれらのテイル形がいずれも変化の結果状態ではなくそ

ここに至る変化の過程（と主体の動作の継続過程）を表しているように思われる（＜反復／習慣＞や＜経験／パーフェクト＞の解釈も可能だが、上記の理由でそれらは当面除外しておく）。(2a) の図で言えば、「閉めている」のようなテイル形が表しているのは網掛けの部分ではなく「へんか」の部分、つまり事象成立点の後ではなく前の局面であると言えるし、「壊している」が表しているのも（ある意味では）やはり変化の結果ではなく過程であるように思われる（「ある意味」とはどのような意味かについては後述する）。

この点に関して、副島（2007）は次のような例文を挙げ、このようなケースでは「主体の動きそのものが注目され、＜非限界性＞と解釈される（p.227）」と述べている。

- (4) その時私がかびんをとどけていた。（副島 2007：227；注9）

確かに、主体の動きそのものに注目をシフトさせることは可能だし実際にそうすることもあるが、だからと言ってそれで動詞／事象が＜限界＞から＜非限界＞に必ず変わるわけではない。例えば、周知の通り日本語では「歩く」のような非限界動詞に二格の着点項を付けるとたいてい容認度が下がるものだが、(5b/b') に示したように「届ける」ではテイルがあろうとなかろうと下がらない。

- (5) a. ? 私は花子の家に歩いた。  
 a'. ? その時私は花子の家に歩いていた。  
 b. 私は花子の家にかびんを届けた。  
 b'. その時私は花子の家にかびんを届けていた。

さらに、森山（1983：18-19）も指摘しているように、動作主の行為のない変件事象を表す動詞——いわゆる「非対格動詞」——のテイル形でも (6) のように変化の結果というよりはむしろ過程を表すことがあり、この場合も主体の動きそのものに注目がシフトしていると言えるが、「色づく」や「暖まる」はあくまで主体がそれぞれある色や温度になった時に成立したと言える限界達成事象を表しているので、それらを「非限界動詞」とは言えないであろう。<sup>3</sup>

- (6) a. 公園の木々が少しずつ色づいている。  
 b. 部屋がだんだん暖まっている。

(3) の場合も、主体が客体に働きかけるだけで客体に何の変化もなければ「閉めている」や「壊している」とは言えない。つまり、これらの例は限界動詞のテイル形が変

化の結果だけでなく過程の局面も表し得ることを示していると言えるが、副島の分析ではこの点が捉えられていない。

二つ目の問題は、「叩く」や「踏む」のようなタイプの動詞の扱いについてである。副島(2007)の枠組みではそもそもこれらの動詞が限界・非限界のどちらのカテゴリーに属するのかがはっきりしないが、どちらにしても問題が残るように思われる。例えば、非限界動詞とみなしたら、それらのテイル形は動作進行の意味に解釈されると予測されるが、(7)に示されているように、「叩いている」と「踏んでいる」の意味はアスペクト的に異なるし、さらに「泳いでいる」のような典型的非限界動詞とも大きく異なる。

- (7) a. 一郎が二郎の肩を叩いている。  
b. 一郎が二郎の足を踏んでいる。

「叩いている」は、絶え間ない動作進行を意味する「泳いでいる」とは違い、たいてい一回一回終結する瞬時的行為の短い時間的スパンでの反復を表し、「踏んでいる」は(そのような短時間の行為反復の解釈も不可能ではないが、ふつうは)一度踏んでその状態を維持しているという意味で解釈される。逆に限界動詞とみなしたら、テイル形は変化の結果の継続を意味すると予測されるが、「叩いている」や「踏んでいる」が何の変化を表しているかは不明である。さらに言えば、そもそも副島(2007)ではテイル形の<反復>用法の整理・分類が十分細かくなされていない。副島が<反復>の例として挙げているのはほとんどすべて(1c)のようなある程度長期間にわたる行為の反復を表す文であり——したがって副島はこの用法を<反復・習慣>と呼んでいる——、(7a)のような短期的反復の例にはふれていない。両者の間には明白な違いがあるが、この問題には手が付けられていない。

副島(2007)にとっての三つ目の問題は、限界動詞+テイル形が<変化結果>を表しているが、単に<結果状態の継続>を表しているとは言えないケースである。次の例を考えてみよう。

- (8) a. 水が白く濁っている。  
b. 柿が赤く熟している。  
(9) a. 水がライトで白く光っている。  
b. 海が夕日で赤く輝いている。(矢澤 2007: 87; 一部改変)

矢澤(1983, 1985, 2007)が鋭く指摘しているように、(9)タイプの文における副詞的修飾関係(例えば(9a)なら「白く」と「光る」の関係)は(8)タイプの文のそれ

とは微妙に異なる。例えば (8a) では、水が濁って変色し、その変化事象が成立した後しばらく「水が白い」という状態が持続しており、限界動詞+テイル形「濁っている」はその局面を表している。これはある意味で典型的な変化事象であり、副島の図 (2a) に問題なく合致する。一方、(9) の例はいずれも「動詞 (句) が表す変化事象が成立した後にある状態がしばらく持続している」という意味には解釈できない。例えば、(9a) で「水が白い」という状態が継続し得るのは「ライトで水が光る」という出来事が続いている間と実質的にはほぼ同期であり、その出来事の終結とほぼ同時にその状態も終わる。つまり、「ライトで水が光る」という事象が終了した後しばらく「水が白い」という状態が続くわけではない。矢澤 (2007) はこの事実を指摘し、(9) の述部 (副詞+動詞) は「動作・作用の結果に現れる状態ではなく、動作・作用の最中に現れる状態を表す (p.87)」と分析し、そのような副詞と動詞の関係を「状況相修飾関係」と呼び、(8) のような典型的「結果相修飾関係」と区別している。

この観察・指摘は卓見であるのだが、それでは「光る」タイプの動詞はアスペクト的に「泳ぐ」等と全く同じ非限界動詞で、そのテイル形は単に動作進行を表していると言えるだろうか。つまり、単に「光っている」は「泳いでいる」と同じタイプ——非限界動詞+テイル形で動作進行を表すタイプ——と言って問題が解決するだろうか。答えは否である。なぜなら、「光る」は「泳ぐ」等とは違って明らかにモノの状態変化 (光っていない状態から光っている状態への変化) を表しているからである (この違いは後ほど 3.1 節で導入される <変化性> のテストでチェックできる)。では (9a) の「白く」はその変化事象のどの局面を表しているのだろうか。もし単に変化過程を表しているなら、上で見たケース (例えば (6) のように限界動詞+テイル形が変化過程を表しているケース) と同じタイプとみなすことができそうだが、これもそうはいかない。なぜなら、ライトが当たって水の色が透明から白に変わ (って見え) るプロセスはたいてい一瞬なので、その変化過程はほとんど認識できないし、仮にできたとしても完全に水が白く見える状態にあるのは変化する途中の局面ではなくあくまで変化の結果の局面だからである。したがって、(9) タイプの文は副島の二分類 ((2a) と (2b)) のどちらにも当てはまらないことになり、やはり未解決の問題として残ることになる。

四つ目の問題は、次のような興味深い振る舞いをする他動詞文に関するものである。

- (10) a. 一郎が花子を起こしている。  
 b. ??電話のベルが花子を起こしている。

これら二つの (広い意味での) 使役文には同じ動詞が使われているが、容認度には大きな差がある。そして不思議なことに、動詞がテイル形でなければ (b) タイプの文



もそれほど悪くはない。

- (10') a. 一郎が花子を起こした。  
 b. 電話のベルが花子を起こした。

副島の分類では「起こす」は限界動詞に分類されると思われるが、(あるいはテイルが付いて「起こしている」となると(4)のように<非限界>にシフトするのかもしれないが、いずれにしても)副島の分析では「なぜ同じ動詞でこれほど大きな容認度上の差がでるのか」、そして「なぜそれがテイル形の時だけなのか」という問いには答えられないように思われる。

最後に、そもそも日本語の動詞にはテイルを付けられないタイプ(例えば「ある」や「いる」)とそれに意味的に類似しているがテイルを付けられるタイプ(例えば「存在する」や「じっとする」)があるが、その理由も説明されていない。副島(2007)は、テイルは「動的な意味に状態性を付与する継続相であり、動詞に存在動詞を付加した文法形式である(p.193)」と述べているが、これだけでは状態動詞の「存在する」や「じっとする」等にテイルが付くことが説明できないし、副島流の<限界性>による線引きは「ある・いる・存在する・じっとする」をすべて全く同じタイプ(非限界動詞)に分類してしまうため、この問題の解決には役に立たない。

ここまで副島(2007)にとっての問題を五つ挙げてきたが、それらはほとんどの先行研究でも未解決の問題として残されているものである。例えば、副島(2007)と同じように体系的で示唆に富んだ研究である工藤(1995)でも、上で挙げた問題は副島とは少し違った形・程度で残されている。工藤は副島と同じように動詞を<限界性>の観点から大きく二つに分け、限界動詞を<動作>対<変化>という観点と<主体>対<客体>という観点から「主体動作・客体変化動詞」(例えば「開ける」)と「主体変化動詞」(例えば「開く」)に分類し、それに<能動>対<受動>というヴォイスの観点を加えて動詞とテイル形の意味解釈の対応関係を次のようにまとめている。

- (11) 工藤の記述的一般化(工藤 1995: 72; 表記法を一部改変)

| <u>動詞のタイプ</u>        | <u>テイル形の解釈(その際のヴォイス)</u> |
|----------------------|--------------------------|
| a. 限界動詞: 主体動作・客体変化動詞 | →動作継続(能動)／結果継続(受動)       |
| b. 限界動詞: 主体変化動詞      | →結果継続                    |
| c. 非限界動詞: 主体動作動詞     | →動作継続(能動・受動)             |

工藤の動詞分類は副島のものよりはるかに精密かつ包括的なので、テイル形の解釈に関しても正しく記述できる範囲はそれだけ広がっているが、それでも上で挙げた五

つの問題はどれも完全には解決されていない。例えば「壊す」は工藤の分類によると主体動作・客体変化動詞になり、(3b)「二郎が庭の納屋を壊している」ではそれが能動態で使われているので、そのテイル形の解釈は<動作継続>と予測される。確かにこの文は主体の動作の継続を表していると言えるが、それは同時に客体の変化の過程も表している。その証拠に、主体が客体に対してどんな動作をしようと、その動作の進展と並行して客体の形が漸進的に崩れていかなければ「壊している」とは言えない。工藤の分析ではこの側面が捉えられていない。限界動詞の受動態ならテイル形の解釈は結果継続という分析も十分ではない。例えば「納屋が壊されている」は多義的で、結果継続に加えて「今壊されている最中である」という主体の動作と客体の変化の並行的進行過程（そして焦点は客体変化の側）という読みもあるが、その側面の記述も抜けている。二つ目の問題も工藤は「たたく」と「踏む」を全く同じタイプ（非限界主体動作動詞）とみなしているので解決されていない。三つ目の問題——例文(8)対(9)の問題——に関しては、工藤は「光る」タイプを非限界（主体動作）動詞、「濁る」タイプを限界（主体変化）動詞と分類しているので両者の違いをある程度——矢澤と同じ程度——捉えられるが、上で指摘した「光る」タイプの動詞が持つ（そして「泳ぐ」タイプの動詞は持たない）変化の側面に関する問題は未解決のまま残されている。（広い意味での）使役文に関する四つ目の問題も、工藤は主語の属性によって動詞の分類を変えていない——従って主語が何であろうと「起こす」はおそらく主体動作・客体変化動詞と分類されることになる——ので説明できないと思われる。五つ目の問題も、工藤は「ある・いる」と「存在する」を全く同じタイプ（静態存在動詞）とみなしているので解決されていない。<sup>4</sup>

以上のように、先行研究のおかげでテイル形の意味・機能や統語的振る舞いについてたくさんのがわかってきたが、未だに解決されていない問題もいくつか残っている。そしてそれらの問題はほとんどすべて事象／動詞の分類やその意味的記述・分析がまだ十分精密でないことに起因していると思われる。そこで次節では、事象／動詞を二つの観点から複合的に整理・分類し、各動詞が表す事象を明示的に記述できる構造表記を提案する。

### 3. 事象／動詞の分類と構造：動力学／アスペクト分類と並行事象構造

本節では事象をまず動力学の観点から大きく六つのタイプに分類し（3.1節）、次にアスペクトの観点から五つのタイプに（そのうちのいくつかはさらに細かい下位タイプに）分類する（3.2節）。さらにその二つの観点からの分類を複合的に組み合わせることによって事象を13のタイプ（といくつかの下位タイプ）に整理し、各タイプの

事象を内在的に表す日本語動詞を列挙する (3.3 節)。最後に、各事象タイプの動力学とアスペクトに関わる情報を同時に、かつ明示的に表示できる構造表記を提案し (3.4 節)、4 節で提示する動詞+テイル形の構造的意味記述につなげる。

### 3.1 事象の動力学分類

ではまず事象を動力学の観点から分類しよう。「事象」とは、存在論的カテゴリーとしてはモノ・トキ・トコロ・サマではなくコトであり、しかも外界の出来事そのものではなくそれを (あるいはその中の一側面を) 言語話者が概念化した心的表示を指す。この定義では、例えば「花子」・「昨日」・「舞台」・「美しく」などはそれ自体では事象と言えないが、「花子が昨日舞台上で美しく踊った」・「一郎が花瓶を割った」・「花瓶が割れた」・「神は存在する」・「二郎は賢い (子だ)」・「敵による都市の破壊」などはすべて事象と言える。本稿はそこから形容詞／コピュラ文や事象名詞 (句) を除外し、動詞 (特に単純動詞) を中心とする単文の形——あるいは表記上の簡略化のためにそこから主語を省いた動詞／動詞句の形——で表わされる命題に相当する事象のみを扱う。

「動力学」とは力 (force) の行使や作用に関わるコトの側面を指し、ここではその観点から事象を大きく六つのタイプに分類する。具体的には、まず<行為性>と<変化性>という二つのパラメータの値を組み合わせて事象を大きく五つに分類し、そこに<原因性>というパラメータで特徴づけられるタイプが加えられる。

<行為性>とは主体による内在的な力の行使の有無に関する素性で、それがあればその事象は [+行為] と、なければ [-行為] と範疇化される。例えば、「花子が踊る」や「一郎が泳ぐ」のように生物が自らの力で動作を遂行するような事象は [+行為] となり、「花瓶が割れる」や「公園に池がある」のように (典型的には) 無生物が他からの力を受けて状態変化する事象や参与者間に全く力のやり取りのない単なる状態などは [-行為] となる。この区別自体は周知の通り自動詞の<非能格 vs. 非対格／能格> (あるいは<能動 vs. 所動>) の区別をするために多くの研究者によって指摘されてきたものにほぼ相当し、新しいものではない (三上 1953/1972; Perlmutter 1978; Levin and Rappaport Hovav 1995; 影山 1996, 2000a, 2000b; Alexiadou et al. 2004 等参照)。ただしここで、見た目上モノの動きが全くない事象でも [+行為] となり得ることに注意されたい。例えば「じっとする」のようにある人 (または動物) が自分の意志・力で空間上のある位置に動かずにいたり、「魚を新鮮に保つ」のように何かをある状態に維持したりする事象には主体による力の行使が不可欠な要素として含まれているので [+行為] となる。また、本稿ではこの [±行為] という区別を事象全体 (あるいはそれをスキーマ的レベルで表す動詞) の分類をするためのパラメータとして用いるが、それはその事象の主体自体に自ら何かを引き起こすだけの内在的

力があるかどうかと深く関係しているため、ある事象（または動詞）の〈行為性〉を判断する際にはその主体（あるいはそれを表す名詞（句））の〈自己駆動性〉とでも呼ぶべき特性を考慮する必要があることにも注意されたい（その必要性を示す例はすぐ後で挙げる）。事象（あるいはその中心の動詞）の行為性を判断する手立てとしては、ある種の副詞（句）との共起、いわゆる迷惑受身文や依頼使役文への埋め込み、命令形への変換、複合語形成、格表示、助動詞選択など、非対格性の判断のために先行研究で提案・使用されてきた様々な統語的テスト（詳しくは上述の文献参照）がある程度は使えるが、非典型的なケースではテスト結果が一致しないことも少なくない上に、それらの中には純粋な行為性のテストというよりはむしろ他の特性（あるいは複合的特性）のテストと思われるものもある（この点も後ほどふれる）。本稿では暫定的に「自ら／自力で」のような主体による内在的力の行使を表す副詞（句）をテストとして使い、それと共起できれば〔+行為〕と、できなければ〔-行為〕と分類することにする。<sup>5</sup> 例えば人による動作・運動は問題なくこのテストにパスするので〔+行為〕となり（「花子が自ら踊った」・「一郎が自力で走った」）、無生物の変化や状態はたいていパスしないので〔-行為〕事象と分類される（「??花瓶が自ら割れた」・「\*公園に池が自力であった」）。変化主体が無生物でも「自動ドア」のような場合は自己駆動力があるので〔+行為〕とみなすことができるが（「ドアが自ら開いた」）、〔+行為〕の事象はたいていすぐ後で取り上げられる別の素性〈意志性〉の値もプラスなので、「自動ドア」のようなケースは典型的な行為事象とは言えない（〔±行為〕の線引きが難しい例は後ほど3.3節で再び取り上げる）。

一方、〈変化性〉とは力の行使ではなく作用の側面に関する指標で、他から力を受けて（あるいは自らの内的力で）参加者の状態・位置・姿勢・所有関係などに変化があればその事象は〔+変化〕と、なければ〔-変化〕と範疇化される。こうした通常の意味の変化に加えて、発生・消滅（それに行為が加われば生産・消去）も無から有・有から無への状態変化と言えるので一種の変化事象とみなすことにする。したがって、「花瓶が割れる」・「水が流れる」・「花子が座る」・「一郎が二郎に本をあげる」・「地震が起こる」・「霧が晴れる」のような事象はすべて〔+変化〕となり、「公園に池がある」や「ここに大きな問題が存在する」のような状態・存在事象は〔-変化〕と分類される。その判断方法に関しては、既存のテストの中に適当なものがないが、参加者のある〈領域(domain)〉における変化がその事象の成立にとって不可欠かどうかが決定的に重要なので、「…したが〈領域〉は全く変わらなかった」と矛盾なく言えるかどうかで判断することにしよう。例えば「花瓶が割れる」を例にとると、その成立には〈構成要素の結束性〉（簡単に言えば〈形状〉）という領域における主体の変化が不可欠な条件になるため、「#花瓶が割れたがその形状は全く変わらなかった」と言ったら矛盾する。従ってこの事象は〔+変化〕と判断される。同様に、「水が流れる」

なら主体が<空間位置>という領域において変化することが成立の条件なので、「#水が流れたがその位置は全く変わらなかった」も矛盾文となる。従ってこれも [+変化] 事象と分類される。それに対して、「踊る」や「泳ぐ」にはそのような条件はないので、「バレリーナの花子は10分間踊ったが全く立ち位置が変わらなかった」とか、「一郎は海で10分間泳いだが、流れが強いので全く位置が変わらなかった／前に進まなかった」と矛盾なく言える。したがってそれらはいずれも [-変化] 事象となる。<sup>6</sup>

この二つのパラメータは互いに直交関係にあるので、それらのプラス／マイナスの値を単純に組み合わせれば事象を次の四パターンに分類できることになる——(a) [+行為] [-変化]、(b) [+行為] [+変化]、(c) [-行為] [+変化]、(d) [-行為] [-変化]。しかし、この単純な交差分類では各事象の本質的な特性が十分に反映されないという問題が残る。例えば、この分類では上で挙げた「じっとする」・「魚を新鮮に保つ」や「踊る」・「泳ぐ」、そして「叫ぶ」や「靴を磨く」などはすべて同じ (a) タイプに属することになる。これらがすべて<行為性>に関してプラスの値を持っているという点には問題がないが、<変化性>に関しても全く同じ値を持っていると言いはない。というのは、最初に挙げたタイプの事象（「じっとする」と「魚を新鮮に保つ」）にとっては、それぞれ主体／客体がある領域において変化しないことが事象成立にとって決定的に重要な特性であるため、[-変化] の指定が不可欠であるが、残りの事象にとってはそうでもないからである。例えば、確かに「叫ぶ」という行為をしたからといって必ず主体に何らかの変化（例えば「喉が哽れる」などの変化）があるわけではないが、変化があったらその行為はもはや「叫ぶ」という事象ではなくなるというわけではない。同様に、「踊る」もその結果として主体の空間位置が変化してもよいし、「泳ぐ」では変化する方がむしろ普通である。「靴を磨く」に至っては対象物の変化が行為の意図・目的にさえなっている。ただし、いずれの場合も何かに変化しなければならぬわけではない——だからこそそれらは上で例証したように変化が全くない場合でも使えるし、「靴を磨く」でさえ「磨いたがきれいにならなかった」と言えるのである。つまり、この種の事象にとって<変化>は随意的な概念成分であり、その意味で本質的に重要な特性ではない。この点で、[-変化] が事象成立にとって不可欠となっている「じっとする」タイプとは明らかに異なっている。

この区別をするために、本稿では<行為性>と<変化性>の値の単純な組み合わせではなく、本質的に重要な特性を基にして事象を大きく分類し、その後必要に応じてそれ以外の特性で各事象をさらに下位分類していく。まず、すぐ上で見たように、「踊る」・「泳ぐ」・「叫ぶ」・「靴を磨く」のような事象にとって<行為性>の値がプラスであるというのは本質的に重要な特性であるが、<変化性>に関する値はそうではない。したがって、それらは[+行為]という特性のみによって特徴づけられるタイプとなる。このタイプを<行為事象>と呼ぼう。ちなみに「靴を磨く」のように変化が強く含意

されているタイプは、[+行為] ([+変化]) のように括弧を使った簡略表示で表し分けることができるが、この種の事象はアスペクトの点でも単純な行為事象とは違った振る舞いを見せるので、次節で別の切り口からの線引きがなされ、その後導入される事象構造を用いて構造的に表示し分けられる（詳しくは3.2～3.4節を参照）。

「花瓶を割る」や「服を着る」等は主体による行為と客体（あるいは主体自身）の変化の両方が本質的に重要な特性となっており、しかもそれらの値がいずれもプラスなので<行為・変化事象>と呼ぶことにする。一方、「じっとする」や「魚を新鮮に保つ」などは、<行為性>だけでなく<変化性>も本質的に重要であるという点では上で見た<行為事象>よりむしろ今見た<行為・変化事象>に近いが、[変化]の値がプラスではなくマイナスという違いがある。そこでそれらを第三のタイプ<行為・状態事象>と分類しよう。

行為が本質的に関わらないタイプの事象としては、例えば「水が流れる」のような移動事象や「地震が起こる」・「霧が晴れる」のような発生・消滅事象——いわゆる非対格動詞で表わされる事象——があるが、このタイプは[+変化]のみによって特徴づけられるので<変化事象>と呼ぼう。これに似たタイプとして、「花瓶が割れる」・「窓が閉まる」のように変化を引き起こす行為を主を背景に想定し得るタイプの事象——いわゆる能格動詞で表わされる事象——があるが、これも本質的に重要な側面は[+変化]の部分であり、行為は（ほとんどの場合）随意的である上に、それがあっても背景として概念化されるだけで上記の行為性テストにはたいていパスしないので変化事象の一種と分類できる。<sup>7</sup>これも簡略的には([+行為]) [ +変化] と表し分けることができるが、後ほど導入される事象構造を使えばより明示的にその共通点と相違点を表すことができる。

最後に、「異なる」・「見える」・「位置する」・「ある」のように単なる状態や存在を表す事象は[-変化]のみによって特徴づけられる。このタイプを<状態事象>と呼ぼう。このタイプにもいくつか変種があるが、それらも後ほど下位分類され、構造的に記述される。

ここまで<行為性>と<変化性>という二つの動力学素性を使って事象を五つのタイプに分類してきた——(i) [+行為]のみによって特徴づけられる<行為事象>、[+行為]と[+/-変化]の両方が本質的に重要な(ii) <行為・変化事象>と(iii) <行為・状態事象>、(iv) [+変化]のみが不可欠な特性である<変化事象>、そして(v) [-変化]のみによって特徴づけられる<状態事象>である。3.3節で具体例と共に詳しく示されるが、この五分類にアスペクトの観点からの分類を組み合わせると日本語動詞文で表わされる事象のかなりの部分がカバーできる。しかし、その枠に収まらないタイプの事象もある。それは行為や変化（あるいはその両方）を引き起こす<原因>を含む使役事象である。<原因性>を含むこの種の事象もカバーできるように、こ

ここで〔±原因〕という三つ目の素性と、その値がプラスの場合の下位素性として〔±外的(原因)〕というパラメータを導入しよう。

まず、行為(と変化)を引き起こす原因があり、かつそれが行為主内部にあるケース〔+原因(-外的)〕とは、主体が自分自身の意志で行為を始動・遂行する「意志的行為(・変化)事象」である。つまり、〔+原因(-外的)〕とは〔+意志的〕と実質的に同義である。この特性は「意志的に／敢えて／嫌々」のような主体の意志の有無を表す副詞(句)、「…しよう」という意向を表す補助動詞、目的節「…ために」等との共起可能性、または命令形への変換可能性などで(ある程度は)テストできる。<sup>8</sup>ただし、行為主と原因主が同一である限り、〔+行為〕の事象はたいてい主体が自分の意志でする行為である上に、日本語には(少なくとも主文のレベルでは)〈意志性〉を表す明示的な形態的／統語的マーカーもないので、本稿の研究対象を分析する際には〔+原因(-外的)〕という特性を弁別的な素性／値とみなす必要はないと思われる。例えば、「花子が踊った」と言えば特別な文脈がない限りたいてい「自分の意志で踊った」と解釈されるし、意志性の有無によって動詞の形態や格体制に変化があるわけではない。<sup>9</sup>したがって、〔+原因〕であってもそれが〔-外的〕である場合は基本的に〔-原因〕と区別しないで論を進める——つまり、行為(と変化)を引き起こす原因があってもそれが行為主内部の意志である場合は(特にそうする必要のある一部のケースを除いて)原因／意志性には言及せずに〔±行為〕と〔±変化〕だけで事象を記述・分析する。

一方、行為／変化を引き起こす〈原因〉があり、かつそれが行為主／変化主と同一でない場合は〔+原因(+外的)〕タイプとなるが、こちらは上のケースとは異なり、(いわゆる介在文のような例外を除けば)日本語でもその特性は常に文法的マーカーによって明示的に表されるので弁別的な素性／値とみなす必要がある(介在文に関しては3.4節を参照)。例えば「そのニュースが一郎を驚かせた」・「電話のベルが花子を起こした」のような使役文において拘束形態素 *-as-* や *-os-* は「一郎が驚く」・「花子が起きる」という変化を引き起こした外的原因(「そのニュース」・「電話のベル」)の存在を示すマーカーとして働いていると考えられる。それを影山(1996:4.2.3節)に従って「Xが原因でYが行為／変化した」というパラフレーズができるかどうかでテストすると、いずれも問題なく言い換えられることがわかる(「そのニュースが原因で一郎が驚いた」・「電話のベルが原因で花子が起きた」)。そこで、この種の事象を上で導入した(下位)素性／値を組み合わせて特徴づけると、〔+原因(+外的)〕〔+変化〕となる(ここに〔行為〕が入ってないことに注意)。以下、このように〔+原因(+外的)〕という(下位)素性値を含む事象、そしてそれのみを〈使役事象〉と呼び、他の事象と区別することにする。この通常より狭い定義の下では使役事象とみなされる範囲もそれだけ狭くなることに注意されたい。例えば、「驚かせる」・「起こす」タイプの文の外的原因(「そのニュース」・「電話のベル」)を行為主となり得る〔+自己駆動〕の

モノに換えると——例えば「二郎が一郎を驚かせた」・「良子が花子を起こした」にすると——自然な解釈ではそこに行為が加わって [+行為] [+変化] となるが、こうなるともはや行為主とは別の外的原因がないことになるので、本稿では使役事象ではなく行為・変件事象と分類されることになる。<sup>10</sup> この微妙な違いは、後ほど導入される並行事象構造で明示的に記述し分けられ、その後その経験的帰結が示される。

ここまでをまとめると、本節では力の行使・作用という観点から事象のタイプについて考察し、(12) にまとめた三つの動力学素性と一つの下位素性で事象を (13) のように大きく六つのタイプに分類した。

#### (12) 事象の動力学素性

- a. [±行為]
- b. [±変化]
- c. [±原因]
- d. [+原因] の下位素性：[±外的]

#### (13) 事象の動力学分類

- a. 行為事象： [+行為] (例：踊る、叩く、話す、叫ぶ)
- b. 行為・変件事象： [+行為] [+変化]  
(例：割る、破る、閉める、着る、)
- c. 行為・状態事象： [+行為] [-変化]  
(例：じっとする、いる、守る、保つ)
- d. 変件事象： [+変化]  
(例：割れる、閉まる、起こる、消える)
- e. 状態事象： [-変化]  
(例：異なる、見える、ある、存在する)
- f. 使役事象： [+原因(+外的)] [+変化]  
(例：驚かす、喜ばす、起こす、枯らす)

そもそも生物にとって「モノが形状・空間などの領域で変化・移動しているか」・「そうした変化・移動が主体自身の力によって駆動されているか、それとも他の原因によって引き起こされているか」などはそれが自分に危険を及ぼす可能性があるモノかどうかを判断する大きな手掛かりになるので、生物学的に重要な環境認識パラメータである。従って、我々ヒトが世界を切り取る切り口の中に (12) のようなパラメータが入っていても何ら不思議ではない。

さて、上でふれたように (13) の各グループには様々な下位タイプが存在し、その



うちのいくつかは(12)の素性に下位素性(例えば<再帰性>や<随意性>など)をさらに組み合わせることによって記述し分けることができるが(具体例は3.3節を参照)、中には動力学とは別の切り口で分類する必要があるものもある。しかも、それらはすべてテイル形の解釈に大きく影響する。例えば、次のペアをそれぞれ比較してみよう。

#### (14) 動力学分類の限界

- a. 「踊る」と「手を叩く」
- b. 「家を建てる」と「花瓶を割る」
- c. 「家を建てる／花瓶を割る」と「腕を掴む」
- d. 「水が流れる」と「花瓶が割れる」
- e. 「存在する」と「ある」
- f. 「電話のベルが花子を起こす」と「一郎が花子を起こす」

(14a)のペアは上の分類ではどちらも行為事象に属するが、明らかに行為の持続性という点で異なる——「踊る」は継続的([+持続])行為だが「手を叩く」は瞬時的([-持続])行為である。その帰結として、それらの事象を表す動詞のテイル形の解釈にも違いが出てくる(テイル形の解釈に関しては4節を参照)。同様に、(14b)以降のペアもすべて動力学的な観点からはうまく線引きができず、対応するテイル形の解釈の違いもうまく捉えられない。例えば(14b)はどちらも行為・変件事象だが、主体の行為の持続性も客体の変化の持続性も大きく異なる——「家を建てる」はたいていどちらも[+持続]だが「花瓶を割る」はどちらも[-持続]である。(14c)の「腕を掴む」も行為・変件事象だが、持続性に関しては「家を建てる・花瓶を割る」のどちらとも違う。「掴む」という行為はその事象の始動点から完結点(腕が掴まれた時点)まではたいてい一瞬なのでその局面は[-持続]と言えるが、その行為が完結した後も主体があるやり方で力を行使し続けることによってその状態を維持できるので、完結点以降の局面は[+持続]であり得る。<sup>11</sup> それに対して「家を建てる」の場合はほとんど全く逆である。というのは、その場合は完結点以前の局面——家を建てる行為過程——はたいてい時間がかかるので[+持続]であり、それ以降の局面——家が完成した後——は「建てる」という行為はもはや行われないのでそもそも<持続性>の指定自体がないからである。「花瓶を割る」の場合は、割る行為はたいてい一瞬なので[-持続]、割れた後にはもはや行為はないので無指定となる(これらの違いは次節(特に(17)と(18))で細かい局面分割を基にして詳しく記述される)。いずれのケースも、その局面レベルの持続性の違いの帰結として、それぞれのテイル形の解釈も異なってくる。(14d)のペアはどちらも変件事象だが、これも変化局面の持続性で

互いに異なる。しかもこのケースは完結性でも異なるので、テイル形だけでなくある種の副詞的成分との共起可能性に関しても違った振る舞いをみせるが（具体例は次節を参照）、この点も（13）の分類では捉えられない。（14e）は状態事象のペアであり、これらはすでに2節で指摘したようにテイル形にできるかどうかで一線を画しているが（「存在している」vs.「\*あっている」）、動力学の視点からはその線がどこにどう引かれているかが見えない。最後に、（14f）のペアは上で論じたように動力学的に区別できるが、2節で指摘した問題——それらがテイル形になるとなぜ容認度に差が出るのか——までは説明できない。

以上のような問題を解決するには、動力学とは違った観点からの切り口が必要になる。次節ではその方向を追求してみよう。

### 3.2 事象のアスペクト分類

その観点とは、出来事の時間的展開をどのように把握するか、つまりアスペクト的視点である。ただし、アスペクトと言ってもその中には様々な切り口がある上に、先行研究で広く仮定されているアスペクト分類をそのまま適用しても、実は上で提起した問題を完全に解決することはできない。ここではまずその点を具体的に指摘しておこう。先行研究の問題点は少なくとも五つある。

まず、行為や変化の持続性の違いは、2節で紹介した金田一（1950/1976）をはじめ多くの研究者によって観察・指摘されてきたが、ほとんどの先行研究は事象全体（あるいはそれを表す動詞そのもの）のレベルで<継続>対<瞬間>の区別をしていることに注目されたい。例えば金田一（1950/1976：10）は「読む・書く・笑う・泣く」等は<継続>、「死ぬ・（電燈が）点く・消える・（時計が）止まる」等は<瞬間>という区別を（事象ではなく動詞としてだが）している。最近の研究を見ても、例えば吉永（2008）は主に心理動詞を持続性の観点から細かく分類し、いくつかの興味深い観察・指摘をしているが、やはり持続性の値は事象全体（を表す動詞）のレベルで判断されている。確かに、これで線引きできるタイプの事象（動詞）もある程度はある。例えば（14a）のペア（「踊る」と「手を叩く」）やある種の心理動詞が表す事象（例えば「悩む」と「ぞっとする」）などはこれだけで区別できる——それは例えば「長い間…テイル」と言えるかどうかでテストできる（詳しくは吉永2008：106-107を参照）。しかし、そうはいかないものもかなりある。例えば（14c）の対比（「家を建てる／花瓶を割る」と「腕を掴む」）などは捉えられない。なぜなら、前節で指摘したように、これらの事象が持続性の点で互いに異なるのは事象全体ではなくその内部局面のレベルにおいてだからである。3.3節で示されるように、この種の事象は数多くある。したがって、事象全体（あるいはそれを表す動詞）のレベルで〔±持続〕の区別をし、各事象／動詞を<継続>タイプと<瞬間>タイプに分類しても、上記の問題の完全な解決にはな

らないのである。

しかも、事象内部の局面にもいろいろなレベルがあるが、それも区別できるようになっていないものが多い。例えば金田一の<継続>対<瞬間>の区別で(14a)の対比は捉えられると述べたが、継続/瞬間の二分法では「踊る/手を叩く」と「拍手する」との間には線が引けない。「拍手する」は「手を叩く」とは明らかに似ているが、一回叩いただけでは「拍手した」とは言えないので、単純に全く同じ瞬間事象とは言えない。かと言って逆に「踊る」と全く同じ継続事象とも言えない。なぜなら、「踊る」と違って「拍手する」にはそれを構成している独立した動作(=「手を叩く」)があり、それは一つ一つ瞬間的行為だからである。つまり、それらは互いにある意味では似ていてある意味では異なっているのだが、その「意味」を明示的に示すのに[±持続]というパラメータは必要ではあるが十分ではないのである。この点については、国立国語研究所(1985:Ⅲ部、2章)や須田(2003:3章)などは様々なタイプの反復事象を取り上げ、示唆に富んだ分析を提案しているので、他の先行研究より一歩先に進んでいる。対象言語や理論的枠組みは違うが、Langacker(1987:7章)も反復事象を表すアスペクト表現について本質的に同じような分析を提案している。この点は後ほど再びふれる。

次に、<継続>対<瞬間>の区分はたいていそれぞれ<行為>と<変化>に対応させて使われていることにも注意されたい。例えば上で挙げた金田一(1950/1976:10)の分類で<継続>タイプに属しているのはほとんどすべて行為事象(動詞)であり、<瞬間>タイプはほとんどすべて変化事象(動詞)である。<sup>12</sup>しかし、<継続>対<瞬間>のアスペクト分類は<行為>対<変化>——さらに言えばそれに加えて<行為・変化>や<原因>など——の動力学分類と直交関係にあり、それらすべてのレベルでなされる必要がある。例えば(14a)（「踊る/手を叩く」）で問題なのは<行為>のレベルにおける<継続>対<瞬間>の違いであり、(14d)（「水が流れる/花瓶が割れる」）は<変化>のレベル、(14b/c)（「家を建てる/花瓶を割る/腕を掴む」）は<行為・変化>の両レベルにおける持続性の違いである。(14f)（「電話のベルが花子を起こす/一郎が花子を起こす」）に至ってはそれに<原因>のレベルが加わる。したがって、先行研究の<継続>対<瞬間>のアスペクト分類を導入しただけで上記の問題が解決するわけではない。他にも、例えば影山(1996:57-67)は動詞の語彙概念構造において変化の側面をどういう関数で表記するか(具体的にはGO/MOVE対BECOME/INCH)という問題を検討しており(この問題についてはPinker(1989:5章)やJackendoff(1990:5章)なども参照)、それはまさに<変化>のレベルにおける<継続>対<瞬間>の問題に相当するが、この区別もやはり適用範囲が狭すぎるため、他のレベル(例えば<行為>レベル)の例がカバーできない。<sup>13</sup>

さらに、例えば(14b/c)の「家を建てる」のような行為・変化事象ではその二つ

のレベルの事象の進展（主体による行為と客体の変化）が時間軸に沿って並行して進んでいくが、その時間的並行性を正しく捉えている先行研究もほとんどない（この点は特に重要なので3.4節で事象構造を使って詳しく論じる）。

最後に、アスペクトに関する研究では必ず＜限界性＞が取り上げられるが、この重要な概念の規定も先行研究のものでは問題が残る。2節でも見たように多くの先行研究は＜限界性＞を＜終了限界＞あるいは＜完結性＞と同義で使っているが（例えば奥田1988：36；工藤1995：57-58, 72-73；中村1997：75, 88；金水2000：31-32；副島2007：25-26, 40ff, 232；須田2007：14等を参照）、それでは（14e）の事象（「存在する／ある」）などはどちらも[-限界]となり、その区別ができない。したがってそれらのテイル形の可否についても説明できない。

このような問題をふまえた上で、アスペクトの観点から事象分類を試みよう。本稿ではまず＜限界性＞と＜完結性＞というアスペクト特性を区別し、その二つを別の基本的素性[±限界][±完結]として仮定する。さらに、＜完結性＞の下位素性として＜完結意図性＞と＜完結維持性＞を仮定し、それによって[±完結]事象をそれぞれ下位分類する。この二つの素性と二つの下位素性の値の組み合わせで事象は大きく五つのタイプに分けられるが、それに局面ごとの＜持続性＞、ある種の複合事象における＜マイクロ／マクロ＞のレベル区分、そして変化達成の＜段階性＞という三つの補助的パラメータを加えることによって各タイプがさらに細かく下位分類される。ではこれらの一つひとつ順番に見ていこう。

まず、＜限界性＞とは「出来事が時間的に限界づけられている（と把握される）か」に関する指標であり、限界づけられていれば[+限界]、そうでなければ[-限界]となる。この線引きは時間軸上にその事象の始まりを示す点（始動点／開始限界）か終わりを示す点（終止点／終了限界）があるかどうか——より正確には、そのような限界点を含む事象として把握されるかどうか——で決まり、そのどちらかがあれば限界事象、なければ非限界事象となる。<sup>14</sup>この定義から明らかのように、ここでは「限界（性）」という用語が先行研究に比べて広い意味で使われていることに注意されたい。上述のように先行研究ではこの用語は始動点ではなく終止点、特に変化事象の終止点があるかどうかに対して、つまり「完結（性）」の意味で用いられている。従って、2節で先行研究の検討をする際に「限界動詞」と呼んでいたのは実質的に「完結動詞」と同義であった。しかし本稿では、動詞+テイル形の分析を通して＜完結性＞とは別に＜限界性＞という素性を仮定する必要性と重要性が論証される。4節で示されるように、日本語のテイル文とはまさにそれを示す経験的証拠となるのである。

限界点があるかどうかで事象を[+限界]と[-限界]に分けた後、[+限界]事象をさらに変化の達成点——そうならば変化が達成したと言える状態になった時点（例えば「花瓶が割れる」なら花瓶が割れた時点）——があるかどうかで[+完結]

と〔-完結〕に下位分類する。〔-限界〕であれば、あるいは〔+限界〕でも<変化>のない事象であれば自動的に〔-完結〕となる。例えば「花子が踊る」や「一郎が泳ぐ」なら〔+限界〕〔-完結〕、「タオルが乾く」や「アイスクリームが溶ける」なら〔+限界〕〔+完結〕、そして「机の上に鍵がある」「教室に学生がいる」なら〔-限界〕となる。

この分類は、限界性に関しては「…し始める」という始動アスペクト表現の容認性で、完結性に関しては広く使用されている「10分 {間/で}」のような副詞的修飾語句との共起可能性または共起した際の解釈制限で（たいていは）テストできる（これでテストできないケースについては後ほどふれる）。例えば、〔+限界〕の事象——3.3節で示されるように日本語動詞文で表される事象はほとんどこのタイプに属する——を表す動詞文にはたいてい問題なく「…し始める」をつけられるが（「踊り始める」・「泳ぎ始める」・「乾き始める」・「溶け始める」）、〔-限界〕事象を表す動詞文にはつけられない（「\*あり始める」・「\*い始める」）。そして、〔-完結〕タイプは「10分間」のような行為や状態（変化）の期間を表す語句——以下「期間句」——とは共起できるが（「10分間踊った」・「10分間泳いだ」・「10分間あった」・「10分間いた」）、「10分で」のような期間を限定する語句——以下「限定句」——とは共起できないか、できても事象開始までの時間としてしか解釈できない（「10分で踊った」・「10分で泳いだ」・「\*10分であった」・「\*10分であった」）。逆に、〔+完結〕タイプ（の多くは）は期間句とは共起できないが（「??タオルが10分間乾いた」・「??アイスクリームが10分間溶けた」）、限定句とは問題なく共起でき、それは変化の達成点までの時間として解釈される（「タオルが10分で乾いた」・「アイスクリームが10分で溶けた」）。

ここで、よく知られていることだが、事象の完結性は動詞以外の成分によってしばしば変化するという点に注意されたい。例えば、前節でふれたように「踊る」や「泳ぐ」のような行為はその結果何らかの変化をもたらすことがよくあり、その場合は〔+行為〕〔+変化〕となるが、その際その変化が達成されればその事象は〔+限界〕〔+完結〕となる（例えば「花子がワルツを一曲 {??10分間/10分で} 踊った」・「一郎が500メートルを {??10分間/10分で} 泳いだ」）。しかし、このような完結性は「踊る」や「泳ぐ」という行為事象にとって（前節で述べた意味で）本質的に重要な特性というわけではなく、その点で内在的に〔+完結〕の「乾く」や「溶ける」といった変化事象とは決定的に違うという点にも注意されたい。

さて、<限界性>と<完結性>という二つのアスペクト素性で事象は大きく三つのタイプ（(a)〔+限界〕〔-完結〕、(b)〔+限界〕〔+完結〕、(c)〔-限界〕）に分類されることを見たが、このままでは〔-完結〕タイプと〔+完結〕タイプの幅がどちらも広すぎため、篩分けが十分とは言えない。まず〔-完結〕の側では、基本的に主体による行為のみで特徴づけられる「踊る」や「泳ぐ」のような行為事象と客体に

何らかの状態変化をもたらすことを意図して主体が客体に働きかける「磨く」や「洗う」のような行為事象との区別ができていない。それらはどちらも基本的に期間句と共起可能なので〔-完結〕と言えるが（「10分間踊った／10分間靴を磨いた」）、「磨く」タイプは限定句によって達成までの時間を表せるので完結性もある程度持っている（「10分で靴を磨いた」）。しかし、このタイプの事象は単に〔+完結〕であるとも言えない——そうであればそもそも期間句とは共起できないはずだが、上記のように実際はできるからである。この種の中間的タイプを扱うために、本稿では<完結性>（特に〔-完結〕タイプ）の下位素性として<完結意図性>というパラメータを加え、基本的には〔-完結〕の行為だが、それが特定の変化の達成を意図して（あるいはそれを目的として）なされる事象のアスペクト特性を〔-完結(+意図)〕という素性値で表示することにする。<sup>15</sup>

逆に〔+完結〕の側では、「割る」や「割れる」のように終止点で行為・変化が完全に終了する典型的な（行為・）変件事象と「掴む」や「光る」のように終了限界突破後も自らの（あるいは他からの）継続的エネルギー供給により結果状態が持続され得るタイプの事象との区別ができていない。どちらも結果状態の継続はあり得るが、期間句と共起できるのはたいてい後者のみである（「\*10分間割れている／10分間腕を掴んでいる」）。「～続ける」という補助動詞と共に結果状態の継続を表せるのも後者（正確にはその一部）のみである（「\*切れ続ける／腕を掴み続ける」）。この区別をするために本稿では<完結維持性>という下位素性を導入し、「掴む」タイプの事象を〔+完結(+維持)〕という素性値で表示することにする。

以上四つのパラメータによって、アスペクトの観点から事象は大きく五つのタイプに分類されることになる。

#### (15) 事象のアスペクト素性

- a. 〔±限界〕
- b. 〔±完結〕
- c. 〔-完結〕の下位素性：〔±意図〕
- d. 〔+完結〕の下位素性：〔±維持〕

#### (16) 事象のアスペクト分類<sup>16</sup>

- a. 限界・非完結事象： 〔+限界〕 〔-完結〕  
(例：部屋で踊る、プールで泳ぐ)
- b. 限界・完結意図事象： 〔+限界〕 〔-完結(+意図)〕  
(例：靴を磨く、車を洗う)
- c. 限界・完結事象： 〔+限界〕 〔+完結〕

(例：タオルが乾く、氷が溶ける)

d. 限界・完結維持事象：[+限界] [+完結(+維持)]

(例：腕を掴む、水が光る)

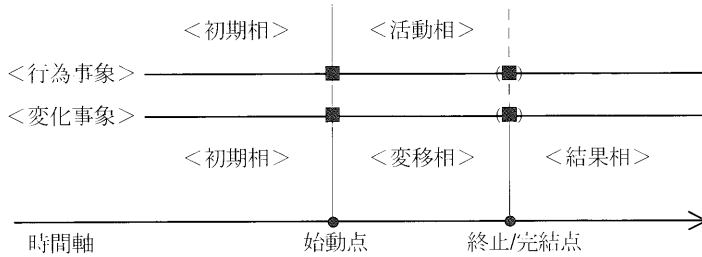
e. 非限界事象： [-限界]

(例：机の上に本がある、教室に学生がいる)

このアスペクト分類に前節で示した動力学分類を組み合わせると、日本語動詞文で表される事象はかなり細かくタイプ分けできるが、いくつかの現象を記述するにはアスペクト的にさらに細かい下位分類が必要になる。ここではそのために必要となる三つのパラメータを見ておこう。

一つ目は局面ごとの<持続性>であるが、その前提としてまず各事象がどういう局面から構成されているかを見てみよう。上述のように、事象の限界性と完結性は限界点と変化の達成点の有無によって決まるが、それらを境界にして各事象（とそれを構成している下位事象）はいくつかの主要な局面／相に分割できる。まず、行為事象は始動点の前後で少なくとも二つの局面に分割できる。それらをそれぞれ<初期相>と<活動相>と呼ぼう。その活動相がさらに終止点の側で限界づけられているかによって行為事象は下位分類される。その行為が「窓を閉める」のように [+完結] の変化を伴うタイプであれば、その事象は完結点で限界づけられるが、「踊る」のように [-完結] タイプか、 [+完結] でも「掴む」のように [+完結維持] タイプであれば活動相に終了限界はない。一方、 [+完結] の変件事象は大きく分けると変化の前・途中・後——言い換えれば始動点の前・始動点と完結点の間・完結点の後——の三つの局面に分割できる。それらをそれぞれ<初期相>・<変移相>・<結果相>と呼ぼう。例えば「タオルが乾く」のような変件事象であれば、乾燥が始まる前の濡れた状態が初期相、徐々に含有水分が少なくなっていく段階が変移相、そして水分を感じない程度にまで乾いた状態が結果相である。「水が流れる」のように [-完結] タイプであれば結果相はない。「電話のベルが一郎を起こす」のような使役事象は、変件事象（「一郎が起きる」）の始動点の時点にそれを引き起こす外的原因（「電話のベル（を一郎が聞くこと）」）がかかっているだけなので、それに特有の局面はない。このような事象の局面分割を簡略的にまとめると次のようになる（より詳しい構造表示は3.4節を参照）。

## (17) 各事象の局面分割



このように分割された局面ごとに〔±持続〕の指定をすることによって、各事象をアスペクト的により細かく分類することができ、それが(14)で指摘した問題の解決につながる。上で挙げた事象の中で比較的わかりやすいものをいくつか例にとると、その局面ごとの持続性は次のように記述できる。<sup>17</sup>

## (18) 事象局面の&lt;持続性&gt;の指定

- a. 踊る： 活動相：〔+持続〕
- b. 手を叩く： 活動相：〔-持続〕
- c. タオルが乾く：変移相：〔+持続〕；結果相：〔+持続〕
- d. 花瓶が割れる：変移相：〔-持続〕；結果相：〔+持続〕
- e. 家を立てる：活動／変移相：〔+持続〕；結果相：〔+持続〕
- f. 花瓶を割る：活動／変移相：〔-持続〕；結果相：〔+持続〕
- g. 腕を掴む：変移相：〔-持続〕；活動／結果相：〔-(+)持続〕

例えば、継続的な行為の「踊る」は活動相が〔+持続〕だが、「手を叩く」は瞬時的な行為なので（基本的には）〔-持続〕となる。<sup>18</sup> これらはいずれも行為のみの事象であるため、その持続性の指定が局面レベルでも事象全体のレベルでも実質的に変わりはないが、上で指摘したように変化を含む事象ではその違いがはっきりと表れてくる。例えば「タオルが乾く」なら乾くまで時間がかかるので変移相は〔+持続〕であり、乾いた状態はしばらく続くので結果相も〔+持続〕であるのに対して、「花瓶が割れる」なら結果相は〔+持続〕だが、割れるのはたいてい一瞬なので変移相は〔-持続〕となる。金田一（1950/1976）が「瞬間動詞」と呼んでいる動詞（が表している事象）——例えば上で挙げた「死ぬ・（電燈が）点く・消える・（時計が）止まる」等——もほとんどこのタイプである。行為・変件事象の場合は、「家を立てる」のような事象は主体の行為と客体の変化が並行して漸進的に進んでいくので活動相と変移相が共に〔+持続〕となり、結果状態も通常そのまま続くので〔+持続〕である。それに対して、「花瓶を割る」なら結果相は〔+持続〕だが活動相と変移相はたいてい瞬時的なので共に



[-持続]となる。「腕を掴む」になると、掴んだ後にすぐ放しても「掴んだ」と言えるので活動／変移相だけでなく結果相も基本的には[-持続]だが——ここが「割る」タイプと異なる——、掴んだ後もあるやり方で行為を継続することができるので完結点後にも[+持続]の活動相があり得——ここが「建てる」タイプと異なる——、その帰結として変化の結果相も[+持続]となり得る（この随意的持続性は(18g)では括弧を使って[-(+)]持続と表記してある）。

ここで特に、(18d)の「花瓶が割れる」のような従来「瞬間事象（動詞）」とみなされてきた事象（動詞）にも[+持続]の局面があるという主張がなされている点に注目されたい。4節で詳しく示されるが、この種の事象にもともと[+持続]の局面があるからこそ、テイルによってその部分が前景化され得るのであって、それらがもし完全に瞬間的な事象であれば、そのような前景化はできないはずなのである。

また、(18)はいずれも局面（あるいは事象全体）の持続性が動詞の表す行為／変化の内在的特性によってほぼ決まる例ばかりだが、それが動詞の内項となっている名詞（句）の表すモノの特性（特にその大きさや長さなどのサイズ）や行為の手段などによって決まる例も少なくないことにも注意されたい。例えば、(3a)の「窓を閉める」という事象の活動／変移相の持続性がプラスかマイナスかは、「閉める」という動詞が内在的に表す行為自体によって決まるのではなく、むしろその行為の対象／変化を被るモノである「窓」の大きさで決まる。その大きさが普通かそれ以上であれば閉めるのにある程度時間がかかるので活動／変移相は[+持続]となるが、とても小さければ一瞬で閉められるので[-持続]となる。従って、各事象の持続性は、その完結性がそうであるように、それを構成している各要素のアスペクト（に關与する）特性から合成的に決定されるようになっていく。<sup>19</sup> 以下の議論では、次の段落で取り上げる点を除いて、その特性の指定の仕方や合成過程には立ち入らず、合成された結果の持続性にのみ言及する——例えば「窓を閉める」ならたいてい活動／変移相は[+持続]とみなし、どういうプロセスでそうなるかには言及しない——が、合成のメカニズム自体も解明されるべき重要な問題である。<sup>20</sup>

「窓を閉める」に似た例として(3b)「二郎が庭の納屋を壊す」のようなケースがあるが、この種の事象の活動／変移相も同じように[+持続]と言えるだろうか。答えは微妙だが、少なくとも全く同じとは言えない。「壊す」は「閉める」と同様に行為・変理事象であり、変化物が「花瓶」のように小さく壊れやすいモノなら活動／変移相は[-持続]となる。一方、それが「納屋」のように大きなモノなら（手段にもよるが、(3b)のような状況では普通）[+持続]となるであろう。確かに納屋はたいてい人が一瞬で壊せるほど小さくないのでその破壊行為全体は[+持続]と言える。しかし、「壊す」は「閉める」と違って対象物に変化をもたらす行為がたいてい連続していない。例えば人による納屋の破壊はたいていそれを構成している個々の行為・変化

——例えば納屋の壁（の一部）を壊す、屋根（の一部）を壊す、等々——があり、ズームインして見ればそれら一つひとつはそれぞれ〔-持続〕の行為・変化と言える。その小さな瞬時的破壊行為を反復遂行してはじめて「納屋を壊す」という事象が達成される。つまり、「納屋を壊す」のような事象は、活動相と変移相が単一の行為のレベルでは〔-持続〕で、それが集まってできた高次の事象レベルでは〔+持続〕となるタイプと言える。この点で、「納屋を壊す」は「窓を閉める」よりむしろ「拍手する」に近い。<sup>21</sup>上でも指摘したように、「拍手する」も「手を叩く」という行為の反復によって構成されている高次の行為事象であり、下位のレベルでは〔-持続〕で上位のレベルでは〔+持続〕であるからである。同じ趣旨の指摘はすでに上で言及した先行研究——国立国語研究所（1985：Ⅲ部、2章）・Langacker（1987：7章）・須田（2003：3章）など——によってなされている。詳しい議論は4節でなされるが、以下この種の複合事象において下位と上位の事象レベルを対比する時はそれらをそれぞれ「マイクロレベル／マクロレベル」と呼んで区別することにする。この種の事象・表現は「草を刈る」や「チラシを配る」など数多く存在し、それらの中には（a）マイクロレベルの行為の＜離散性／独立性＞や（b）動詞の語彙的焦点指定などの点で様々な変種がある。例えば（a）の点では「拍手する」は非常に高いが「草を刈る」はそれほど高くない——例えば鎌で刈れば離散的になり、草刈り機で刈れば連続的になるが、「拍手する」にはそのような変動はない——し、（b）の点では「拍手する」は語彙的焦点が完全にマクロレベルに当たっているが「草を刈る」にレベル指定はない——したがって一本刈っただけでも「草を刈った」と言えるが、一回手を叩いただけでは「拍手した」とは言えない。いずれにしろ、このような事象／表現の記述・説明にはこの＜マイクロ／マクロ＞のレベル区分が不可欠であり、4節で示されるように、特にテイル形になるとこのパラメータの必要性和重要性がより一層明らかになる。

最後に、変化達成の＜段階性＞を示す事例を見てみよう。上で挙げた〔+完結〕の変化事象はどれも変化の完結点があり、それは一つだけであった。従って、その変化事象が一旦完結したら、（結果相が〔+持続〕であり、何らかの別の力の行使や作用がない限り）その変化結果の状態がそのまま続く。例えば、花瓶が割れたら（放っておけば）その後には割れた状態がそのまま続くだけである。結果相が〔+持続〕の変化事象とはたいていこのタイプであり、その結果状態の継続まで含めた全体がその事象を構成していると考えられる。だからこそ、それにテイルをつけて（「花瓶が割れている」のように）その結果残存の局面を前景化できるのである。そして、完結点後に何らかの変化があれば（例えば割れた花瓶の破片が集められてゴミ袋に入れられたら）、たいていそれはもはや一つの事象とはみなされない。

しかし、完結点突破後に再び別の完結点を持ち得る変化事象がある。それは「上がる・下がる」や「伸びる・縮む」のようにあるスケール上で値が段階的に変化する事象で

ある。例えば、ガソリン価格が1リッター100円から101円になれば「ガソリン価格が上がった」と言えるが、101円が102円になってもそう言えるし、そこからさらに103円になってもまたそう言える。そして、それらをそれぞれ別の事象とみなすこともできるが、「ガソリン価格上昇」という一つの事象とみなすこともでき、その場合は一つの事象に複数の完結点があることになる。<sup>22</sup> この種の事象を表す動詞は、テイル形にすると(19)のように<変化進行>と<結果残存>のどちらも表すことができるため、日本語学では「二側面動詞」として知られているが(奥田1978:24-26; 金水2000:24; 岩本2006:65-69等を参照)、この種の動詞と「割れる」のようにテイル形が(<反復/習慣>や<経験/パーフェクト>を除くと)<結果残存>の意味でしか使えない普通の変化動詞を区別するには変化達成の<段階性>というパラメータが必要になる。

- (19) a. ガソリン価格が最近どんどん上がっている。 <変化進行>  
 b. ガソリン価格がすでに1リッター180円に上がっている。 <結果残存>

また、この種の動詞は次の例によって示されているように期間/期限句との共起テストにおいても「割れる」タイプの変化動詞とは異なる振る舞いを見せるので、変化達成の<段階性>は事象全体の<完結性>にも影響を与え得る特性であると言える。<sup>23</sup>

- (20) a. ガソリン価格がここ数ヶ月間かなり上がった。  
 b. ガソリン価格がここ数ヶ月間で1リッター180円に上がった。

ここまでをまとめると、本節はまず二つの基本的アスペクト素性(<限界性>と<完結性>)を仮定し、それに<完結性>の下位素性(<完結意図性>と<完結維持性>)を組み合わせて事象を大きく五つのタイプに分類した。その後さらに三つの補助的パラメータ(局面ごとの<持続性>、ある種の複合事象における<マイクロ/マクロ>のレベル区分、そして変化達成の<段階性>)を導入し、それらによって各事象タイプをさらに細かく下位分類した。

### 3.3 事象と動詞の動力学/アスペクト分類

ではここまで提案した二つの観点からの事象分類(動力学分類とアスペクト分類)を組み合わせて、事象とそれに対応する動詞を細かく整理・分類しよう。具体的には、本節ではまず(13)と(16)にまとめた事象タイプ——それぞれ下に(21)・(22)として再録——を組み合わせることによって事象を複合的に分類し、そのうちのいくつかを上で言及した素性を含めた補助的パラメータでさらに細かく下位分類する。

## (21) 事象の動力学分類

- < 1 > 行為
- < 2 > 行為・変化
- < 3 > 行為・状態
- < 4 > 変化
- < 5 > 状態
- < 6 > 使役

## (22) 事象のアスペクト分類

- < A > 限界・非完結
- < B > 限界・完結意図
- < C > 限界・完結
- < D > 限界・完結維持
- < E > 非限界

(21) と (22) を単純に組み合わせるとかなりの数の事象タイプが生まれるが、これら二つの分類は互いから完全に独立しているわけではないので、実際に観察されるのは次に挙げる 13 種類の組み合わせパターンである（それらのほとんど—— (23g) と (23l) 以外すべて——は [+限界] 事象なので、名称の簡略化のために、以下アスペクトに関してはそれらを完結性のみで言い分ける——例えば < 1A > タイプは「行為／限界・非完結事象」の代わりに「行為／非完結事象」と呼ぶ）。

## (23) 事象の動力学／アスペクト分類

- a. < 1A > タイプ：行為／非完結事象      [+行為]／[-完結]
- b. < 1B > タイプ：行為／完結意図事象      [+行為]／[-完結(+意図)]
- c. < 2A > タイプ：行為・変化／非完結事象      [+行為][+変化]／[-完結]
- d. < 2C > タイプ：行為・変化／完結事象      [+行為][+変化]／[+完結]
- e. < 2D > タイプ：行為・変化／完結維持事象      [+行為][+変化]／  
[+完結(+維持)]
- f. < 3A > タイプ：行為・状態／非完結事象      [+行為] [-変化]／[-完結]
- g. < 3E > タイプ：行為・状態／非限界事象      [+行為] [-変化]／[-限界]
- h. < 4A > タイプ：変化／非完結事象      [+変化]／[-完結]
- i. < 4C > タイプ：変化／完結事象      [+変化]／[+完結]
- j. < 4D > タイプ：変化／完結維持事象      [+変化]／[+完結(+維持)]
- k. < 5A > タイプ：状態／非完結事象      [-変化]／[-完結]
- l. < 5E > タイプ：状態／非限界事象      [-変化]／[-限界]
- m. < 6C > タイプ：使役／完結事象      [+原因(+外的)][+変化]／[+完結]

以下、これら 13 種類の事象タイプを一つひとつ具体例と共に見ていくが、動詞が語彙的に表す意味は（スキーマ的なレベルではあるが）基本的には事象に相当するので、次に挙げるいくつかの点に留意すれば、ここで提示される事象分類はほぼそのまま対応する動詞の分類とみなすことができる。まず、以下で挙げる動詞は基本的に単

一の形態素からなる和語のみであり、複合語や漢語・外来語由来のものは除外してある。ただし、和語にはない意味を表す語（例えば「ウインクする」）や対応する和語とほぼ同じ意味だが異なる事象タイプを表す語（例えば< 2C >に属する「死ぬ」に対して< 4C >に属する「死亡／死去する」）などはその限りではない。いずれにしろ、本節で挙げる動詞は各タイプの事象を表す語の包括的なリストでは全くない。また、上でもふれたように動詞が単独で表すのはあくまで事象のスキーマであって、参与者の情報などが確定した完全な事象ではない。例えば「泳ぐ」という動詞はそれだけで「人や魚が水中においてある状態で動き、たいていはそれを推進力としてその行為主がある方向に進む」という事象を表しているが、その行為主や時間・場所・移動の有無・方向などの情報は確定していない。従って、動詞単独では意味があまりにも漠然としている場合は必要に応じて項／格成分や付加詞／修飾成分を加えてある。その上、これから挙げる動詞（または動詞句／動詞文）はあくまでその動詞の代表的な用法であり、その動詞が他のタイプの事象を表すことがないというわけでは全くない。例えば、金田一（1955/1976:23-24）が指摘しているように「落とす」は「棒で柿の実を落とす」のようにたいてい人間が意志・意図を持って自分の力で行う行為を表し、それはアスペクト的に [+限界] [+完結] 事象なので、下のリストでは< 2C >タイプの一例として挙げられるが、「人ごみで蝦蟇口を落とす」のような用法もあり、これはたいてい単なる紛失——つまり< 行為性 >のない変件事象——を表すので< 4C >タイプとなる。また、一つの動詞が二つ以上のタイプの事象を表すのに用いられ、かつそれらの用法が同じくらいよく使われる（と思われる）ケースでは、どちらのタイプにも属するとみなしておく。<sup>24</sup> さらに、以下で提示される動詞のクラス分けは、当該動詞が義務的な項のみを取り、かつその項がすべて単数で有界的な場合——つまり Smith（1997:54）の「最大簡潔文（maximally simple sentence）」にほぼ相当する形式を取った場合——にどのタイプの事象を表すかという基準での分類であり、これも項の交替や副詞的修飾成分の付加などによってはタイプが変わり得る。例えば、前節で述べたように「泳ぐ」は基本的には [+限界] [-完結] の行為を表すので、本稿の分類では< 1A >タイプに属するとみなされるが、それに「岸まで」のような移動の到達点を表す副詞的修飾成分が付くと終止点の側が限界づけられるので事象全体としては< 2C >タイプになる。最後に、ここで提示するのはあくまで日本語動詞の分類であり、他言語では対応する動詞が他のタイプに属することは当然あり得るし、実際にある。例えば、周知の通り日本語の「知る」や「愛する」のような動詞に対応する英語の動詞（例えば know や love など）はタイプが異なる——本稿の分類では、日本語動詞は< 4C >タイプであるのに対して、対応する英語動詞は< 5E >タイプとなる。以上の点に留意して、(23)に挙げた順序で各事象タイプとそれを表す動詞を見ていこう。

まず、< 1A >タイプ（行為／非完結事象）とは、自己駆動力のあるモノ——典型

的には意志を持つ人間——による内在的な完結点のない活動である。具体的には、演技・演奏、見聞・発声、思考・計算、労働・休息、闘争・和解、心情・願望の表出・伝達、跳躍、打撃、そして通常は移動を伴う——従ってタイプのには< 2A >に近い——身体的運動など、肉体的・精神的・（そのどちらの領域にも使えるという意味で）中立的な活動である。そして、このタイプに属する事象を語彙的に表す動詞の内在の意味範囲は、たいていその事象を特徴づける行為の様態にまで及んでいることが多い。<sup>25</sup> この事象タイプを活動相の< 持続性 >・< ミクロ／マクロレベル >・< 変化性 >という三つの動力学／アスペクトパラメータで下位分類し、さらにその内部を（大まかな）< 領域 >ごとに整理すると、全体は次のようにまとめられる（前節でも述べたように、これらの値の指定はあくまで通常その活動が遂行・認識される状況に基づいたものであり、状況・視点によってその値は変わり得るし（注18参照）、< 領域 >の分割・指定もあくまで暫定的なものである（注6参照））。

(24) < 1A >タイプ：行為／非完結事象

a. 活動相：[+持続]

< 肉体的 >動く、動かす

< 体全体 >踊る、舞う、回る、演じる、暴れる、羽ばたく、< 部分 >< 頭 >振る、< 顔 >笑う、微笑む、泣く、< 目 >見る、見張る、眺める、睨む、覗く、読む、< 耳 >聞く、聴く、< 鼻 >匂う、嗅ぐ、吸う、吐く、< 口 >歌う、吹く、話す、言う、喋る、叫ぶ、囁く、騒ぐ、鳴く、囁る、吠える、喚く、舐める、嚙る、< 首 >回す、< 手 >弾く、掻く、さする、撫でる、いじる、こする、くすぐる、…

< 精神的 >

< 思考 >考える、< 計算 >数える、測る、比べる、< 願望 >願う、祈る、望む、< 探究 >探す、探る、調べる、< 苦楽 >楽しむ、遊ぶ、苦しむ、耐える、もがく、あせる…

< 中立的 >する、行う

< 労働 >働く、勤める、（委員長を）務める、営む、< 休息 >休む、（体・心を）休める、だらける、怠ける、< 闘争 >戦う、争う、< 努力 >頑張る、踏ん張る、（問題解決に）努める、< 急進 >急ぐ、< 浪費 >使う、費やす、（時間を）潰す、< 継続 >続ける、< 試行・挑戦 >試す、挑む、（試験を）受ける、< 伝達・交流 >電話する、メールする、褒める、怒る、叱る、責める、咎める、（愛想を）ふりまく、（嘘を）つく、（ほらを）吹く、（態度を）示す・見せる、説く、…

b. 活動相：[-持続]

<体全体>跳ねる、跳ぶ、躓く、<頭・顔>頷く、(暖簾を) くぐる、  
<目>瞬きする、ウインクする、<口>噛む、齧る、咳をする、くしゃ  
みする、<首>傾げる、<手>叩く、殴る、小突く、(目薬を) さす、(鼻  
を) かむ、<足>蹴る、…

c. 活動相：マイクロレベル：[-持続]、マクロレベル：[+持続]

拍手する、(ドアを) ノックする、(ボールを) 連打する、…

d. 通常は位置変化を伴う：<2A>に近いタイプ

歩く、走る、駆ける、泳ぐ、飛ぶ、這う、転がる、漕ぐ、(自転車) こぐ、…

この種の活動はたいてい均質的なので始動点が事象の成立点となる。成立点とは、(簡単に言えば) そこでその事象が成立したと言える時点である。例えば少しでも踊れば「踊った」と言えるので「踊る」の場合は始動点が成立点と言える(こう単純にはいえないケース——特に成立点が複数あるケース——は後ほど詳しく取り上げる)。「耐える」や「もがく」のようにその事象の性質上ある程度その行為を継続しなければ成立しないタイプもある。また、「歩く」や「走る」のような動詞は、3.1節で指摘したように一義的には行為主の運動とその様態を表しており、空間の移動は二義的である——例えばルームランナーの上で運動しているだけで全く位置変化がなくても「歩く／走る」と言える——ので基本的には行為事象とみなすが、典型的にはこの種の運動は空間移動を伴うので行為・変件事象に近いタイプと言える。

次に、<1B>タイプ(行為／完結意図事象)は、[+自己駆動]のモノによる(基本的には)内在的完結点のない活動という点で<1A>と同じだが、それが客体にある変化を引き起こすことを意図して遂行されるという点が異なる。この帰結として、行為主は<意図・目的>という認識を持ち得るモノ——実質的には人間——に限られ、意図された変化が達成された場合は[+完結]になり得るという点も異なる。このタイプには清掃・調理・温度調節のようなモノの状態変化や、説得・脅迫・招待のような人の心情変化・空間移動の達成を意図して遂行される行為などが含まれる。それらを活動相の<持続性>と意図された変化の<領域>の観点から整理すると次のようにまとめられる。

(25) <1B>タイプ：行為／完結意図事象

a. 活動相：[+持続]

<衛生>磨く、拭く、洗う、掃く、拭う、<乾燥>干す、乾かす、  
<燃焼>燃やす、<温度>沸かす、焚く、温める、暖める、冷やす、  
冷ます、(温度を) 上げる、下げる、<調理>炒める、茹でる、焼く、

焦がす、煮る、揚げる、蒸す、蒸かす、炊く、＜覚醒＞起こす、＜心情＞なだめる、口説く、説得する、頼む、招く、脅す、…

b. 活動相：〔-持続〕

＜入出力＞（エンジン）かける、（スイッチ）入れる、＜浮遊＞浮かべる、…

細かいクラス分けはあくまで典型的な状況に基づいたものであり、状況や視点によって判断が異なることがあり得るという点はここでも同じである。例えば、窓を綺麗にするにはたいていはある程度時間がかかるので「磨く」や「拭く」は〔+持続〕タイプとみなしているが、一拭きで綺麗になることもあるので〔-持続〕タイプの可能性もある。「お湯を沸かす」や「ビールを冷やす」のような事象は、行為主の動作自体——例えばガスのスイッチを押す／カンを冷蔵庫に入れる——はたいてい一瞬なので〔-持続〕タイプと言えるかもしれないが、この種の事象は達成までの間ずっと行為主のコントロール下にある——例えばスイッチはいつでも切れるしカンはいつでも取り出せるがそれをしないでおくというのは行為主である——ので、「沸かす」や「冷やす」等も〔+持続〕タイプとみなしている。<sup>26</sup>また、言葉で人の気持ちを変化させる行為はたいてい時間がかかるので「説得する」等も〔+持続〕タイプに含めているが、(説得が成功した場合) 心の変化自体は一瞬のこともあり、その場合は変移相が〔-持続〕となるのに対して、モノの温度変化に関わる事象はたいてい変移相も〔+持続〕なので、厳密に言えばその点で両者は異なる。いずれにしろ、全体として＜1B＞タイプの事象・動詞の特徴は、「靴を磨いたがその表面はピカピカにならなかった」や「一郎を説得したが彼の気持ちは変わらなかった」のように言えることからわかるように、主体による客体への働きかけに焦点があり、客体のある領域における変化は意図されてはいるが必ずしも達成されるわけではないという点にある。池上（1981）以降多くの研究者によって議論されている変化結果をキャンセルできる文（以下「キャンセル文」）が表しているのはたいていこのタイプの事象である。<sup>27</sup>

主体の行為に加えて客体（または主体自身）の変化が必ず含まれていれば、その事象は＜2＞タイプ（行為・変件事象）となる。そしてその変化に内在的完結点がなければ＜2A＞タイプ（行為・変化／非完結事象）と分類される。このタイプに属する事象はたいてい活動相が〔+持続〕であり、その多くは（行為の作用が自分自身に及ぶという意味で）再帰的活動なので、その内部は＜再帰性＞で下位分類できる。この種の事象を表す動詞には次のようなものがあるが、そのうちのいくつかは移動の到着点を二格項として取り得るので、次に取り上げる＜2C＞タイプ（行為・変化／完結事象）にも属していると言える——例えば「山を一時間登った」なら＜2A＞タイプ、「山頂に一時間で登った」なら＜2C＞タイプなので、「登る」は両タイプに属してい



ると言える。

(26) <2A>タイプ：行為・変化／非完結事象

- a. [+再帰]:登る、昇る、上がる、下る、降りる、滑る、北上する、南下する、進む、周る、うろつく、ぶらつく、逃げる、食べる、飲む、…
- b. [-再帰]:(ボールを) 転がす、(水を) 流す、(独楽を) 回す、(容疑者を) およがす、…

<2C>タイプ(行為・変化／完結事象)に属する事象・動詞は非常に多い。それらも<持続性>や<再帰性>などいくつかのパラメータを使えば細かく下位分類できるし、中にはそうする必要のあるケースもあるが、数があまりに多いのでここでは変化の<領域>ごとの整理だけしておく(例えば前節でふれた(18e)「家を建てる」と(18f)「花瓶を割る」などは下位分類が必要なケースの一例であるが、それらは4節でテイル形の分析をする際に詳しく取り上げる)。具体的には、「壊す」や「割る」のように主体の行為が客体(または主体自身)の状態変化を引き起こすタイプは(27a)に、「入れる／入る」のように主体の行為が客体(または主体自身)の位置変化を引き起こすタイプと「塗る」のように位置変化に加えてある種の状態変化も引き起こすタイプの事象はまとめて(27b)に列挙しておく。ただし、変化の領域が何であれ、このタイプに属する事象を語彙的に表す動詞のほとんどは、上で見たタイプ(特に<1A>タイプ)に属する多くの動詞とは異なり、語彙的指定が主体の行為だけでなく客体への作用・影響にまで及んでおり、そのため行為の様態が焦点から外れることが多いという点だけは指摘しておく。例えば、「壊す」という動詞が語彙的に表しているのは主体による客体への行為とその結果としての客体の状態変化であって、行為の様態まではカバーしていない。この意味で、「花瓶を壊す」や「窓を閉める」などは<2C>タイプの典型例と言えるが、「ボールを子供に投げる」や「矢を的に放つ」などはそうではない。

(27) <2C>タイプ：行為・変化／完結事象

a. <状態>変える

<形状>壊す、割る、砕く、崩す、潰す、折る、切る、裂く、破く、曲げる、丸める、削る、(豆を) 挽く、刈る、摘む、千切る、分ける、  
 <長さ>伸ばす、縮める、<面積>広げる、狭める、<増減>増やす、加える、減らす、<傾斜>傾ける、倒す、<色彩>染める、<濃淡>薄める、<清濁>清める、濁らす、混ぜる、汚す、穢す、<整頓・散乱>片付ける、散らかす、<硬軟>固める、溶かす、<表面>荒

らす、均す、出す、凹ませる、出っ張らせる、引っ込ませる、＜開拓＞耕す、肥やす、＜利益＞儲ける、稼ぐ、＜結合・拘束・解放＞ほぐす、巻く、締める、結ぶ、縛る、綴じる、ほどく、緩める、解く、縫う、編む、織る、留める、つなげる、＜乾湿＞乾かす、湿らす、潤す、＜開閉＞開ける、開く、(傘を) さす、閉める、閉じる、＜包囲・遮蔽＞塞ぐ、被せる、おおう、遮る、包む、(カバーを) かける、剥く、(シートを) めくる、埋める、＜苦痛・鎮痛＞苦しめる、懲らしめる、(痛みを) 鎮める、治す、＜喧騒・静寂＞(騒ぎを) 静める、騒がす、＜調整＞まとめる、(丸く) 収める、＜準備＞備える、＜蓄積＞貯める、溜める、＜帰属・離脱＞入学・卒業・修了・退学・中退する、入社・退社する、入院・退院する、結婚・離婚する、ひきこもる、＜生死＞死ぬ、絶やす、＜救助＞助ける、＜体型＞太る、痩せる、体重を増やす・減らす、＜評価・地位＞高める、上げる、下げる、＜感情＞落ち着ける、癒す、＜攻略・征服＞(相手を) 負かす、滅ぼす、狩る、＜作成＞建てる、築く、作る、書く、描く、編集・編纂する、敷く、(屋根を瓦で) 葺く、(お茶を) 出す、(災害対策本部を) 設置する、＜選定＞決める、＜消去・隠蔽＞消す、隠す、隠れる、…

b. ＜位置（・状態）＞進める、移す

＜出入＞入れる／入る、出す／出る、収める、こぼす、洩らす、満たす、詰める、(葉を) 挿む、注ぐ、＜遠近＞近づく／近づける、遠ざかる／遠ざける、離れる／離す、行く、来る、向かう、寄る、＜到着＞着く、届ける、帰る／帰す、＜弾道移動＞投げる、放る、打つ、放つ、飛ばす、蹴る、落とす、＜携帯移動＞運ぶ、上がる／上げる、登る、昇る、下がる／下げる／下る、降りる／降ろす、＜通過＞通る、渡る、過ぎる、横切る、抜ける、辿る、＜集合・整列＞集まる／集める、揃う／揃える、並ぶ／並べる、屯する、＜停止・停滞＞止める、停める、＜情報＞伝える、ばらす、＜塗装＞塗る、＜植樹＞植える、生ける、(花瓶に花を) 挿す、＜掲示＞載せる、(旗を) 掲げる、＜分配・散布＞配る、ばらまく、種を蒔く、水を撒く、＜積載・付着・除去＞置く、乗せる、重ねる、被せる、付ける、貼る、盛る、刺す、剥す、剥ぐ、離す、抜く、取る、(林檎を) もぐ、＜着脱＞着る、履く、かぶる、はめる、巻く、脱ぐ、身に着ける、まとう、はおる、絞める、(眼鏡を) かける、(コンタクトレンズを) つける、脱ぐ、外す、解く、＜所有＞あげる、もらう、売る、買う、払う、貸す、取る、預ける、…

(27)に挙げた動詞が表す事象は変化の結果状態がたいてい自動的にそのまま持続されるタイプである——例えば花瓶を割ったら通常そのまま割れた状態が持続する——が、変化が成立した後も主体的な行為を継続することによってその状態を維持することができるタイプもある。それが<2D>タイプの事象(行為・変化/完結維持事象)である。このタイプは(18g)に示したアスペクト特性——変移相が[-持続]で活動/結果相が[-(+持続)]の組み合わせ——を持ち、次のような事象・動詞がここに含まれる。<sup>28</sup>

(28) <2D>タイプ：行為・変化/完結維持事象

<姿勢・体勢>立つ、座る、腰かける、屈む、寝転ぶ、もたれる、背伸びする、倒れる、横になる、眼を閉じる、踏む、持つ、触る、握る、掴む、しがみつく、抓る、つまむ、キスする、握手する、起き(上がる)、寝る、振り向く、振り返る、立ち止まる、手を上げる、足を組む、頬杖をつく、おぶる、担ぐ、抱く、抱える、啜える、<閉口> 黙る、<投光>照らす、(光を)当てる、<依存>頼る、すがる、当てにする、<感情・認識>信じる、疑う、思い出す、覚える、心に留める、思う、頭に入れる、願う、念じる、祈る、察する、分かる、推し量る、同情する、心/気を配る、敬う、反省する、耐える、こだわる、気にする、味わう、…

ここで、<感情・認識>に関わる事象を表すいわゆる「心理動詞」(または「感情/内的情態動詞」)がいくつかこのタイプに分類されている点に注意されたい。心理動詞はすぐ後で取り上げる<4C>タイプに分類されるものも多く——例えば「驚く」や「喜ぶ」などはそうである——、その間の線引きが難しいが、いずれにしる心理動詞が表す事象には<変化性>があると本稿は考えており、その点で多くの先行研究とは異なっている。例えば、三原(2004)や吉永(2008)は心理動詞(の一部)を一種の「活動(または動作)動詞」——本稿の分類では<1A>タイプ——とみなしているし、工藤(1995)はテイル形にしてもアスペクト対立がないという判断の下で心理動詞を「静態動詞」——本稿の分類では<5A>タイプ——に近いタイプとみなしている。いずれにしても、先行研究の多くは心理動詞が表す事象に<変化性>がないと考えているようである。しかし、<2D>タイプとして(28)に挙げた「信じる」や「疑う」等にしても、後ほど<4C>タイプの例として挙げる「驚く」や「喜ぶ」等にしても、その後<6C>タイプとして挙げる「驚かせる」や「喜ばせる」等にしても、すべて何らかの感情・認識の発生——上で規定した広い意味での<変化>の一種——を表しているように思われる。例えば誰かが何かを疑うという行為をすれば、疑念という感

情がその行為者（かつ経験者）の心に発生するので、彼（女）の心的状態はそれをする前と比べて必ず異なるし、それは「驚く」のような場合でもほぼ同じである（違う点はすぐ後でふれる）。その証拠に、「# 一郎は花子の言葉を疑ったが、彼の気持ちに全く変化はなかった」や「# 一郎は花子のプレゼントに驚いたが、彼の気持ちに全く変化はなかった」と言えば矛盾する。従って、（少なくとも日本語では）心理動詞は＜変化性＞がプラスのタイプに分類されるべきである。そして、感情・認識には行為者／経験者が自分の意志／力でその発生をコントロールしやすいものとしにくい（またはできない）ものがあるので、＜意志性／行為性＞の程度に応じてその中を下位分類すべきである。たとえば「信じる」・「疑う」・「心配する」・「同情する」などは比較的コントロールしやすいが、「驚く」・「喜ぶ」・「キレル」・「ドキドキする」などは難しいか無理である。これは程度問題なので線引きが難しいが、本稿では暫定的に3.1節で導入した＜意志性＞のテスト——厳密に言えば＜意志性＋行為性＞のテスト（注8参照）——の「敢えて」との共起可能性と（真の）命令形への変換可能性で分類しておこう。これらのテストを使えば、例えば「信じる」などは「一郎は花子を取って信じた」・「俺を信じろ」と自然に言えるので〔＋（意志的）行為〕の＜2＞タイプに、「驚く」などは「? 一郎は花子のプレゼントに敢えて驚いた」・「? プレゼントに驚け」と言うとは不自然なので〔－行為〕の＜4＞タイプに分類される。<sup>29</sup> また、それらがアスペクト的にそれぞれ＜D＞タイプ（完結維持）と＜C＞タイプ（完結）なのは、変化結果の状態を主体的に維持できるのは＜行為性＞のある前者（＜2＞タイプ）だけだからである。

今見た＜2D＞タイプは客体（または主体自体）を変化させ、その結果状態を維持する種類の事象だったが、初期相の状態を変化させずにそのまま維持するタイプもある。それが＜3A＞タイプ（行為・状態／非完結事象）である。

(29) ＜3A＞タイプ：行為・状態／非完結事象

- a. 〔＋再帰〕：じっとする、暮らす、住む、とどまる、泊まる、生きる、…
- b. 〔－再帰〕：保つ、保存する、保護する、維持する、（秘密を）守る、生かす…

そして、主体的な行為は含まれてはいるものの、局面に分割されていない——従って初期相も当然ない——状態事象もある。このタイプは素性的には〔＋行為〕〔－変化〕〔－限界〕——上の定義により、〔－限界〕なら自動的に〔－完結〕——の組み合わせとなり、(23) の分類では＜3E＞タイプとなる。この種の事象を表す日本語動詞は「いる」しかない。

(30) < 3E >タイプ：行為・状態／非限界事象  
 いる

この<限界性>の違いは3.1節で導入したテストでチェックできる。(29)の動詞には補助動詞「…し始める」を付けられるが(「じっとし始める」「保ち始める」)、「いる」には付けられない(「\*い始める」)。

では次に<行為性>がマイナスのタイプの事象／動詞を見てみよう。このグループには(23h)～(23m)の変化・状態・使役タイプがすべて含まれる。まず、変化動詞にはアスペクティブに非完結タイプ< 4A >と完結維持タイプ< 4D >の事象を表す動詞がいくつかあるが、それ以外はすべて完結タイプ< 4C >の事象を表す動詞である。< 4C >タイプは変移相と結果相の<持続性>に基づいてさらに下位分類でき、変移相の持続性は「少しずつ」や「だんだん」のような漸次的進展を表す副詞を付けて完結点までの変化過程を表せるかどうかで、結果相の持続性は変化した結果の状態を「…した状態だ」と言えるかどうかでテストできる。

(31) < 4A >タイプ：変化／非完結事象

動く、<水流・浮遊>流れる、浮かぶ、漂う、<振動>震える、揺れる、靡く、ゆらめく、はためく、<回転・周回>転がる、回る、周る、…

(32) < 4C >タイプ：変化／完結事象

a. 変移相：[+持続]；結果相：[+持続]

<寸法>伸びる、縮む、広がる、狭まる、<寒暖>暖まる、温まる、冷える、冷める、<乾湿>乾く、湿る、潤う、荒れる、かさつく、爛れる、<老若>老ける、老いる、若返る、<成熟・腐敗>育つ、咲く、熟す、発酵する、腐る、錆びる、枯れる、<体型><全体>太る、痩せる、<部分>腫れる、弛む、浮腫む、<良化>治る、上向く、直る、(痛みが)鎮まる、(土壌が)肥える、<悪化>弱る、弱まる、やつれる、飢える、(体が)なまる、(感覚が)鈍る、病む、<形状>膨れる、膨らむ、萎む、丸まる、曲がる、出る、出っ張る、凹む、引っ込む、<開閉>開く、閉まる、<増減>増える、減る、<強弱>(風が勢いを)増す、強める、弱める、<硬軟>固まる、解れる、<色彩>染まる、色付く、<清濁>清まる、汚れる、濁る、混ざる、<整頓・散乱>片付く、散らかる、<濃淡>薄まる、<拘束・弛緩>締る、留まる、解れる、緩む、撓む、弛む、<蓄積>積る、貯まる、<進展>進む、<位置・地位・評価・感情>上がる、下がる、高まる、落ちる、<生産><調理>煮える、焼ける、揚がる、蒸れる、

炒まる、炊ける、焦げる、(うま味/甘味が) 出る、(お茶が濃く) 出る、  
…

b. 変移相：[-持続]；結果相：[+持続]

<誕生・成長>生える、芽を吹く、出る、浮かび上がる、<消滅・死去>消える、なくなる、死亡/死去する、<衰弱・悪化>腹を下す、頭を痛める、<覚醒・酩酊>(目が) 覚める、眠る、酔う、(酒が) 抜ける、(酔いが) 醒める、(頭/意識が) ぼやける、<乾湿>濡れる、<沸騰・凍結・溶解>沸く、凍る、溶ける、<帰着>着く、戻る、帰る、返る、届く、<停止・停滞・終了>止まる、停まる、滞る、渋滞する、止む、<転倒>転ぶ、倒れる、<傾斜・倒壊>傾く、倒れる、<合流・分岐>合わさる、分かれる、<混雑>混む、ごった返す、空く、<形状>切れる、割れる、砕ける、崩れる、潰れる、壊れる、折れる、裂ける、破れる、削れる、<開閉>閉ざす、<接触・付着・脱落>当たる、付く、離れる、挟まる、繋がる、はずれる、千切れる、取れる、剥がれる、剥ける、抜ける、<蓄積>重なる、<和解>仲直りする、(元の鞘に) 収まる、<包囲・遮蔽>塞がる、被さる、埋まる、隠れる、植わる、<出入>入る、出る、収まる、詰まる、満ちる、こぼれる、溢れる、洩れる、<清濁>澄む、<残存>残る、<金銭>儲かる、<位置>落ちる、沈む、垂れる、<注目>(興味を) 引く、<繁栄・没落>栄える、滅びる、<感情・認識><喜び・楽しみ・安らぎ>喜ぶ、浮かれる、恋する、惹かれる、気になる、舞い上がる、(気持ち) 高ぶる、ワクワクする、ドキドキする、感心する、感動する、感激する、感謝する、安らぐ、憧れる、(感傷に) 浸る、懐かしむ、落ち着く、ホッとする、すっきりする、<怒り・悲しみ・悩み・焦り・恐れ・痛み・苦しみ>怒る、腹が立つ、カッとなる/する、ムツとなる/する、キレル、いらつく、ウンザリする、ガッカリする、げんなりする、滅入る、まいる、懲りる、清々する、退屈する、飽きる、呆れる、困る、ハラハラする、痛む、疼く、眩む、火照る、もたれる、ムカムカする、しびれる、喉が乾く、お腹が減る、慌てる、焦る、やっきになる、嫉妬する、諦める、恨む、軽蔑する、後悔する、悩む、憎む、迷う、恐れる、<驚き>驚く、ビククリする、ギョッとする、<知覚>見える、映る、写る、聞こえる、匂う、感じる、…

c. 変移相：[-持続]；結果相：[-持続]

<出現・生起>生まれる、現れる、(姿を) 現す、起こる、<救助>助かる、<感染>(風邪が) うつる、<移行>移る、<通過>通る、ぬける、<決定>決まる、<成功・失敗・勝敗>(試験に) うかる、落ちる、勝つ、

負ける、とちる、ミスる、へまをする、＜感情・認識＞ひやっとする、ゾッと  
 する、ぞくっとする、びくっとする、胸がすく、すっとする、…

(33) < 4D >タイプ：変化／完結維持事象<sup>30</sup>

光る、輝く、(日)が照る、晴れる、曇る、陰る、霞む、煌く、鳴る、轟  
 く、響く、燃える、燻る、滴る、香る、…

点滅する (ミクロレベル：[-持続]、マクロレベル：[+持続])

状態動詞にはモノ・コトの存在・位置・異同・属性などを表す (34) のような動  
 詞があり、金田一 (1950/1976) が「第四種の動詞」と呼ぶ「聳える」や「ばかげる」  
 等もこのグループに含まれる。

(34) < 5A >タイプ：状態／非完結事象

<存在>存在する、<位置・景観>位置する、隣接する、聳える、<占  
 有> (過半数を) 占める、<表示>意味する、表す、<異同>似る、異  
 なる、<適合>値する、適する、似合う、当てはまる、<属性>(性格)おっ  
 とりする、(目)がクリっとする、(鼻筋)が通る、ありふれる、ばかげる、  
 優れる、…

これらは形態的には動詞だが、恒常的な状態・属性を表しているという点で意味・機  
 能的には形容(動)詞に近い。したがって、この種の語こそ「形容動詞」という名に  
 相応しいように思われる。逆に、「静かな」のような伝統的にその名で呼ばれてきた  
 語は、加藤 (2003) 等が論じているように動詞よりむしろ名詞に近いので、用語とし  
 ては「形容名詞」の方が相応しい。

(34) は [+限界] [-完結] の組み合わせだが、<限界性>の値もマイナスになる  
 と < 5E >タイプになる。

(35) < 5E >タイプ：状態／非限界事象

ある、要る

ここでもその差は上記のテストで (ある程度) チェックできる (「存在し始める」  
 vs. 「\*あり始める」)。<sup>31</sup>

最後に、3.1 節で規定した意味での使役事象—— [+原因(+外的)] [+変化] タイ  
 プの事象——を表す動詞には次のようなものがある。

## (36) &lt; 6C &gt;タイプ：使役／完結事象

驚かす、喜ばす、起こす、枯らす、濡らす、漏らす、遅らす、…

上で指摘したように、これらの動詞がこのタイプの事象を表すのは変化を引き起こす原因が行為主／変化主と同一でない場合——例えば「そのニュースが一郎を驚かせた」のような場合——であり、それが同一である場合は別のタイプになる——例えば「二郎が一郎を驚かせた」なら(注10で述べたような状況を除けば)< 2C >タイプになる。また、「花子が良子に本を読ませた」や「明子が子供にテニスをやらせた」のようなタイプは明らかに使役事象を表しているが、統語的に複文になるので本稿の射程には入らない。

## 3.4 事象／動詞の構造表示：並行事象構造

ここまで様々なタイプの事象を見てきたが、それらの多くは先行研究で仮定されているような構造・図式では十分に表せない特徴を持っている(先行研究の成果と問題点は後ほど具体的に示す)。本節では動詞の分類やテイル形の意味記述に必要な事象構造の構築へ向けて、先行研究の成果を踏まえつつ必要な改良を加えた新しい構造表示を提案し、それを使って前節でまとめた13種類の事象の記述を試みる。

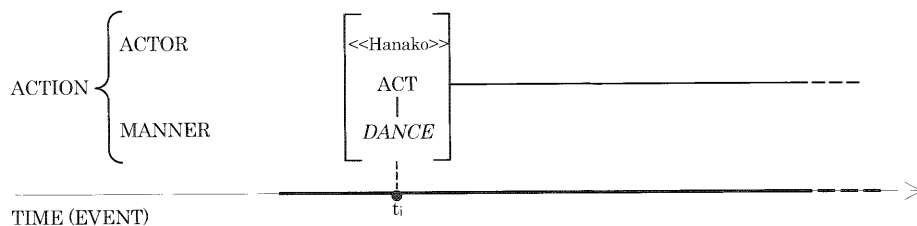
新たな提案の核心は、各事象内部の動力学とアスペクトに関わる情報の両方を同時に表示できるように事象構造を縦横に精密化する点にある。まず全体像を簡単に示すと、本稿が提案する事象構造は、時間を横軸にとり、それに沿って並列する——つまり表示上は縦に並ぶ——複数の層から成る多重並行構造をしている。この並行事象構造を構成する各層は、3.1節で明らかにされた三つの動力学特性(原因・行為・変化(または変化のない状態経過))をそれぞれ表し、それらが上から順に<原因層>・<行為層>・<(不)変化層>として並列している。参与者間の力の行使や作用は主としてその縦の次元で表示される(厳密に言えば、力の行使や作用、特に作用の結果の<変化>は必然的に時間を内包するので、それらの記述に次に述べる横の次元が一切関与しないわけではない)。一方、出来事の時間的展開は横の次元で表示され、3.2節で明らかにされたいくつかのアスペクト特性(例えば限界点や完結点を境にした局面分割、各局面の持続性、ミクロ／マクロのレベル区分、変化達成の段階性等)が時間軸に沿った形で明示的に表される。また、複数の層にまたがる複合的なアスペクト特性もあるが、その記述には縦と横の両次元が決定的に重要な役割を果たす。このように、並行事象構造では動力学的情報は主として縦方向に、基本的なアスペクト情報は横方向に、そして複合的なアスペクト情報は二次元的に、すべて同時に表示できるため、前節で見た様々なタイプの事象をそれらの共通点や相違点を捉えながら細かく記述し分けることが可能になる。



では、これからこの構造で各事象がどのように記述されるかを一つひとつ具体的に見ていくが、はじめに表記上の注意をいくつかしておこう。まず本稿では、多くの意味概念構造に関する先行研究——そのうちいくつかは後ほど紹介される——と同じように、動詞／事象の概念構造の定項はすべて英語の大文字で表記される。これには単なる慣習上の理由もあるが、実質的な理由もある。まず「なぜ大文字か」というと、事象構造は言語の形式ではなくあくまで意味概念の表示なのだが、何語であろうと通常の言語表記——英語の場合それはたいてい小文字——を採用するとその二つのレベル（形式と意味）が混同されやすくなるからである。次に「なぜ英語か」というと、（単に多くの先行研究がそうだからという理由もあるが）日本語には大文字・小文字の区別がなく、漢字・仮名は通常の表記でどちらも使われるので、日本語で表記すると上記のレベル間の混同の問題が起りやすいためである。三つ目の、最も大きな理由は、多くの先行研究によって示されているように事象構造の基本型や構成要素には普遍性の高いものが多いのだが、本稿の記述で多用される構造型やその要素の多くもその例外ではない——つまりそれらは他言語の現象を記述する際に用いられているものと同じである——ということを示すためである。以上の理由で、先行研究で広く採用されている英語の用語・表記を“翻訳”せずにそのまま使う箇所もいくつかあるし（例えば ACT-ON や BE など）、それを微調整して使う箇所もある（それはその都度指摘する）。また、定項の英語表記に合わせて変項——実質的にはたいてい格成分——も英語で表記するが、両者の違いを出すために変項は（固有名詞を除いて）すべて小文字で表記する（ただし変項には後述の理由でたいてい括弧が付けられるので上で述べた形式と意味の混同に関する問題は起りにくい）。さらに、行為の様態や変化の結果状態はたいていその事象を他の類似事象から差異化するカギとなる情報となるので、いくつかの先行研究と同じようにそれをイタリック体で表示する。こうした点は先行研究をそのまま受け継ぐものの、本稿の創意はそれ以外の箇所にあるので、以下ではその新しい点を中心に各事象の構造表示を紹介していく。

ではまず単純な <1A>タイプ（行為／非完結事象）から見てみよう。3.1節で示されたように、<1A>タイプの事象は動力的には [+行為] のみで特徴づけられるので、その構造も <原因> や <変化> といったレベルの概念成分は含まず、<行為> のみで成り立っていると考えられる。<行為> はいくつかの概念成分から構成されており、そこには <行為 (ACT)> 自体の他に少なくとも行為を遂行するモノ <行為主 (ACTOR)> が必ず含まれる。場合によってはそれに行為の <様態 (MANNER)> や行為の対象となるモノ <被行為主 (ACTEE)> などが加わる。そして、本稿が提案する構造では、それらがそれぞれ縦に並んだ層に表示され、全体が大きな角括弧でまとめられて一つの事象を構成していることが示される。例えば、「花子が踊る」という事象は次のような構造で表される。

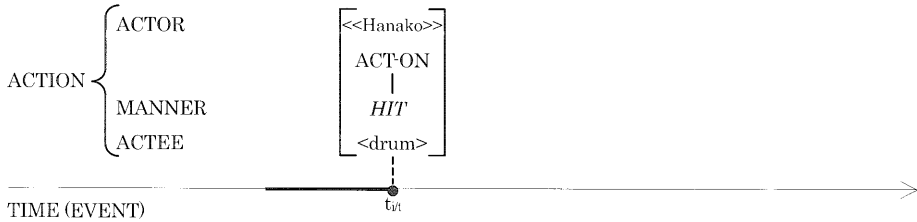
(37) &lt; 1A &gt;タイプ (行為／非完結事象) : 「花子が踊る」



一番左の ACTION は< 行為層 (action tier) >を表しており、その右の ACTOR と MANNER はそれぞれその下位層の< 行為主層 >と< 様態層 >を表している。その右の大きな角括弧の中には ACT を核として行為主層に Hanako が、様態層に DANCE が配置されているが、それらが全体で「行為主の< 花子 >が「踊る」という語によって特徴づけられる様態を伴う行為を遂行する」という事象を表している。ACT と DANCE の間の縦線はそれらがまとまって一つの語「踊る」に対応していることを示している。この包入は、この種の動詞が語彙的にカバーしている意味範囲はたいてい行為の様態にまで及んでいるという 3.3 節でふれた語彙化のパターンの一例である。Hanako に付いている二重かぎ括弧はそれが外項であること——従ってたいてい主語として実現すること——を示している。角括弧から下に延びる破線の先にある点  $t_i$  はその事象の始動点 (inchoative point) を表しており、その点があるということが逆にその事象が [+限界] タイプであることを示している。また、3.2 節で規定したように、この点を時間的境界にしてその前後の局面がそれぞれ< 初期相 >と< 活動相 >に分割される。一方、角括弧から右に長く延びる実線と破線は、この事象に内在的な完結点がないこと——つまり [-完結] タイプの事象であること——と活動相が [+持続] タイプであることを表している。それと並行した太線が一番下の時間軸の上にも延びているが、それはその動詞が語彙的に表している事象の範囲を表している。「踊る」の場合、始動点から先が限界なく続くことは今述べた通りだが、始動点前の初期相まで語彙的指定が及んでいる点——時間軸上の太線が始動点  $t_i$  の左側まで延びている点——には注意されたい。この指定が興味深い経験的帰結をもたらすことが後ほど示される。最後に、議論の中で何度も言及される「時間」とはテンスではなくアスペクト的時間のことなので、それを明示するために (37) の事象構造では時間軸を TIME (EVENT) と表している。動詞文の意味を完全に表すにはこれに加えて出来事と「発話時 (speech time)」・「参照時 (reference time)」との関係を表す時間軸が必要となるが (Reichenbach 1947: § 51 を参照)、テンス的時間は本稿の主題に直接関係ないので除外しておく。

同じ< 1A >タイプの事象でも、「花子が太鼓を叩く」のように行為主による行為がある対象に向けられている場合は次のような構造になる。

(38) < 1A >タイプ (行為／非完結事象) : 「花子が太鼓を叩く」



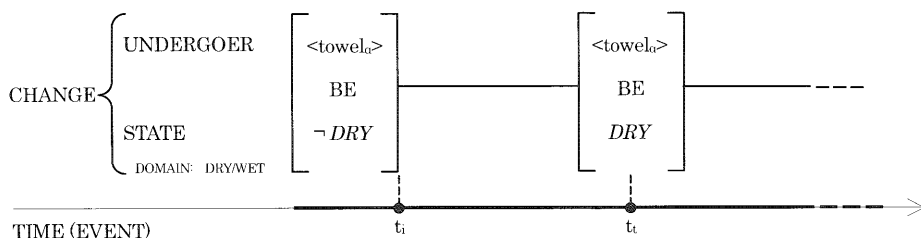
上で見た「踊る」タイプの事象構造との違いは、動力的には<被行為主 (ACTEE)> が加わった点と行為の働きかけの側面が ACT-ON によって表されている点にある。二重かぎ括弧は上と同様に行為主の Hanako が外項であることを表しており、被行為主の drum に付いている一重のかぎ括弧はそれが内項であることを表している。従ってこの事象を表す文は統語的に他動詞文となり、「太鼓」は目的語として実現する。<sup>32</sup> アスペクト的には、「叩く」は「踊る」と違って活動相が [-持続] のタイプ、つまり瞬時的な事象なので、(少なくともミクロレベルでは) 開始とほぼ同時に行為が終了する。言い換えれば、このタイプは始動点と終止点 (terminative point,  $t_t$ ) が時間的にほとんど隣接している。(38) の構造ではその始動／終止の隣接性が時間軸上の一つの点  $t_{it}$  で表されている。

このように、この事象構造では動力学とアスペクトに関わる情報の両方を同時に表示できるが、後ほど示されるようにほとんどの先行研究ではそれができない。そして、その差がもたらす記述・説明力の違いは (37) や (38) のような極めて単純な現象ではまだはっきりと見えないが、これからより複雑な現象に見ていくにつれて徐々に明らかになっていく。

今見たのは<行為層>のみから成るタイプだが、今度は<変化層>のみから成るタイプを見てみよう。<変化層 (change tier —— 以下略して CHANGE と表示)> は変化するモノ<変化主 (UNDERGOER)> とその<状態 (STATE)> を表す二つの下位層から構成されている。< 4C >タイプの変化／完結事象——厳密には発生・消滅を除いた狭い意味での変化／完結事象——の場合、定義上始動点前の初期相における変化主の状態と完結点以降の結果相における状態が異なるので、事象構造でもその二つの局面の変化主の状態とその間の変化過程、さらに結果状態の継続性まですべて表示されている必要がある。例えば「タオルが乾く」であれば、初期相においてタオルが乾いていない状態にあること、それが完結点の時点で乾いた状態になること、その含有水分の変化にはたいていある程度の時間がかかること、さらにその変化結果の状態はたいていそのまましばらく持続すること——つまり変移相と結果相が両方共 [+持続] であること——などが (少なくとも) 表示されていないなければならない (厳密には、さらにいくつか別の情報が表示されている必要があるが、その点は次節で取り上げる)。

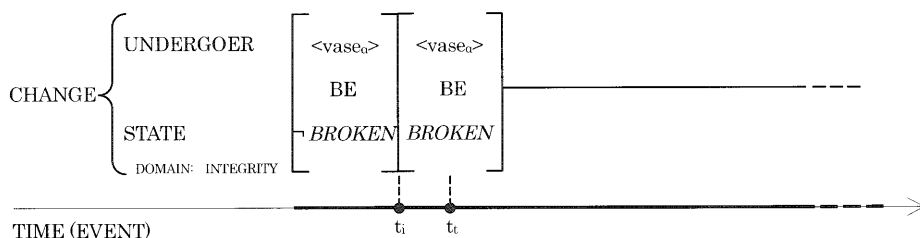
そして次の構造ではそれらの情報がすべて明示的に表されている（変化主 towel に付いているインデックス  $a$  は指示物の同一性を、状態表示の中の BE はその上の変化主がその下の状態にあることを、初期相にある記号  $\neg$  は否定をそれぞれ表している）。

(39) < 4C >タイプ（変化／完結事象）：「タオルが乾く」



これが「花瓶が割れる」のような瞬時的変化事象になると、変化前と変化後の状態が時間的にほとんど隣接することになる。その時間的隣接性／変化の瞬時性は、(40)のように初期相の状態表示と完結点の状態表示の間隔をなくすことによって構造的に表すことができる。

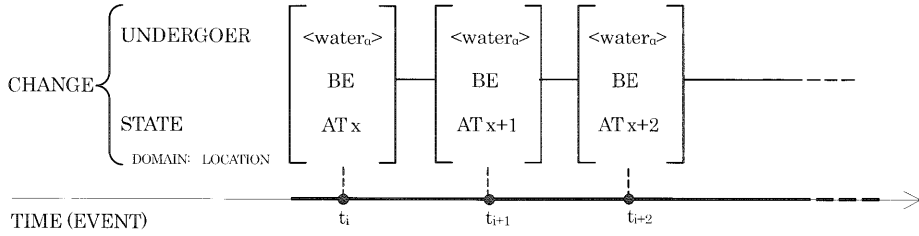
(40) < 4C >タイプ（変化／完結事象）：「花瓶が割れる」



このように<変化>の背後にそれを引き起こす<行為>があるケースは後ほど取り上げる。

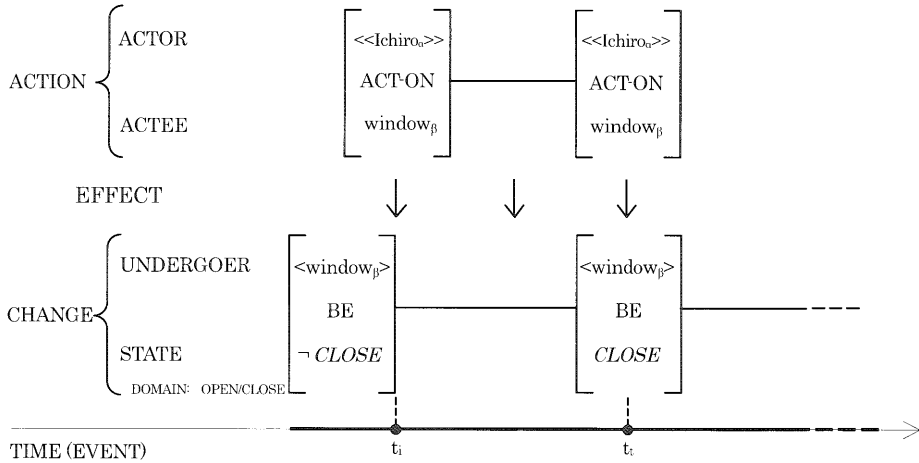
非完結の変化事象——つまり< 4A >タイプ——の場合は、アスペクト局面は初期相と変移相しかないので、上のケースと違ってその構造表示には完結点（telic point、 $t_f$ ）は存在しない。この種の事象ではたいてい変化主の空間上の位置が時間の経過と相同的に変化していくが、その位置変化と時間経過の相同性は状態層と時間軸の値に同じ変数を付加することによって表示できる。例えば「水が流れる」のような事象は次のように表示される。

(41) < 4A >タイプ (変化/非完結事象) : 「水が流れる」



ここまで<行為層>のみのタイプと<変化層>のみのタイプを見てきたが、並行事象構造の利点が最もはっきりと現れるのは<行為層>と<変化層>の両方を持つタイプ、つまり<行為・変件事象>である。例えば「一郎が窓を閉める」のようなく2C>タイプの事象(行為・変化/完結事象)は次のように表される。

(42) < 2C >タイプ (行為・変化/完結事象) : 「一郎が窓を閉める」



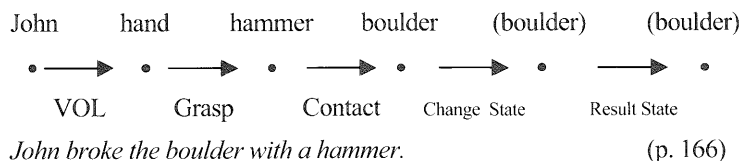
「一郎が窓を閉める」という事象には、(i) 「一郎が窓に働きかける」という行為事象、(ii) 「窓が閉まっていない状態から閉まった状態になる」という変件事象、そして (iii) 後者は前者によって引き起こされるという因果関係が含まれている。また、こうした動力的情報に加えて (a) その行為はたいてい完結点の時点(窓が閉まった時点)で終了し、(その窓が普通の大きさであると仮定すると) (b) その行為・変化はどちらもある程度の時間がかかり、(c) その結果状態は通常そのままある程度持続するという(基本的)アスペクト情報も含まれている。さらに、これが本稿のテーマにとって最も重要な特性なのだが、(d) その行為と変化の時間的並行性——つまり一郎による窓への働きかけの開始とほぼ同時に窓の内部位置変化が開始し、その行為と変化

は時間的に並行して進展し、ほぼ同時に終了・完結するという（二つの下位事象のアスペクト情報が複合されているという意味で）複合的アスペクト情報——も含まれている。この特性があるからこそ、次節で詳しく記述・説明されるように、「窓を閉めている」のようなタイプの動詞+テイル形は行為と変化が並行して進行していることを意味するのである。

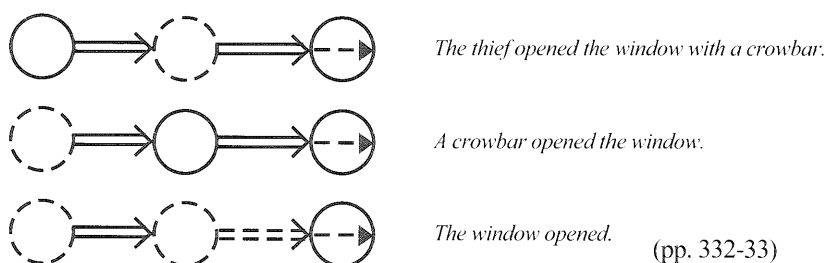
そして (42) の並行事象構造はこれら七つの情報をすべて明示的に表している。具体的には、(i) の情報は上位の行為層で、(ii) の情報は下位の変化層で、(iii) の情報は行為層から変化層へと延びる矢印（とその関係を表す EFFECT）でそれぞれ表されている。一方、(a) の情報は行為層の表示が完結点の時点までしかないこと——つまり行為層では完結点の左側（活動相）には線があるがには右側（結果相）には線が延びていないこと——によって、(b) の情報は活動相と変移相の両方に幅があること、そして (c) の情報は行為層と違って変化層では完結点後まで表示が続いており、かつそこにも幅があることによってそれぞれ表されている。さらに (d) の情報は、行為層と変化層が時間軸に沿って縦に並び、始動点から完結点までの活動相と変移相が時間的に並行していることによって表されている。つまり、(i) ~ (iii) の動力学情報は主に縦の次元で、(a) ~ (c) の基本的アスペクト情報は横の次元で、そして (d) の複合的アスペクト情報は縦と横の二次元で、すべて同時に表されている。

この七つの情報をすべて同時に、かつ明示的に表すことができる構造は、(筆者の知る限り) 先行研究の中にはない。動詞の意味概念構造や事象構造に関する研究は膨大にあり、本稿もそれに負うところが多いが、それらはどれも上の情報のほんの一部しか表示していないし、ほとんどの場合根本的な修正を加えない限りすべてを同時に表示することが原理的にできない仕組みになっている。上述のようにこれは本稿のテーマにとって最も重要なポイントなので、先に進む前にここでいくつか先行研究を挙げて本稿の提案する並行事象構造との違いを明確にしておこう。上の七つの情報をどの程度明示的に記述しているかという基準で先行研究を整理すると、大きく三つのグループに分類できる。一つ目は、動力学情報は捉えているがアスペクト情報はほとんど全く記述していないタイプである。例えば次のような先行研究はこのタイプになる。<sup>33</sup>

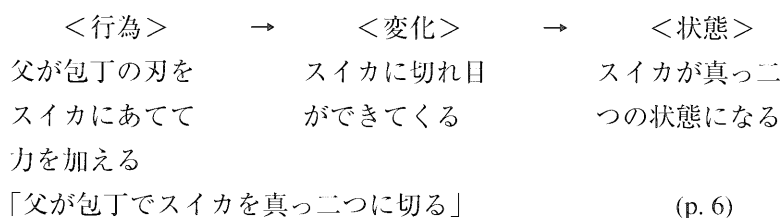
(43) a. Croft (1991)



b. Langacker (1991)



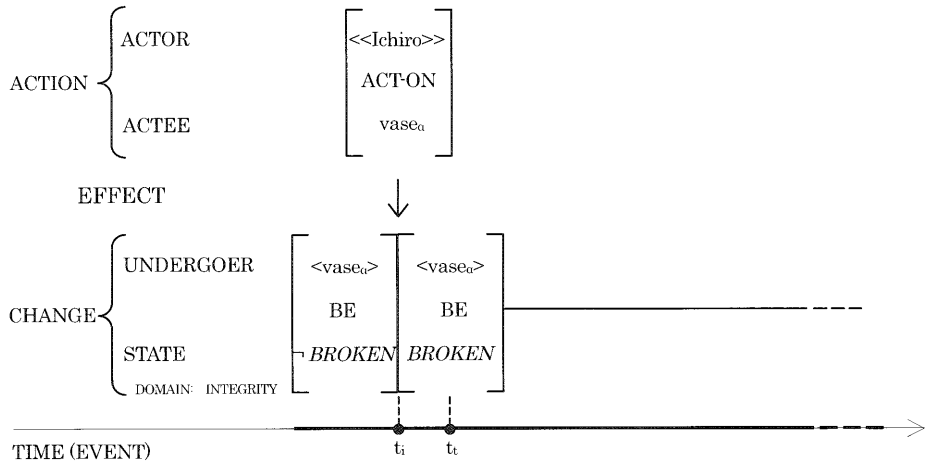
c. 影山 (2001a)



これらを一つひとつ個別に詳しく紹介・検討はしないが、ここでのポイントは Croft (1991) や影山 (2001a/b) の行為連鎖 (action chain) にしても Langacker (1991) のビリヤードボールモデルにしても、それが表しているのはほとんど動力学情報のみであり、上で指摘したアスペクト情報はほとんど捉えられていないという点である。<sup>31</sup> 特に、(d) の複合的アスペクト情報は<行為>と<変化>を横に並べているこの種の図式で記述するのは原理的に難しい。

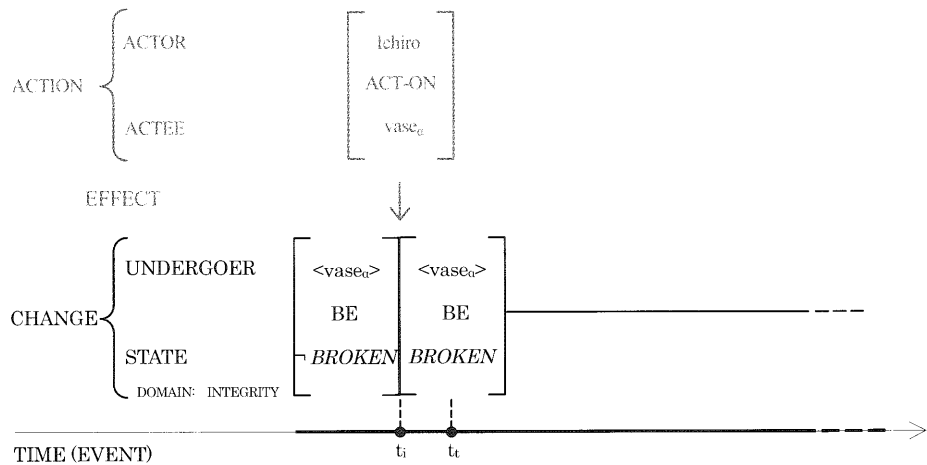
ではどうして多くの先行研究がこの種の分析をしているのだろうか。それはおそらく扱っている行為・変件事象 (の活動相/変移相) がほとんど [-持続] タイプだからであろう。例えば (43) を見ても、例として挙げられているのはいずれも行為・変化がほとんど瞬時的なタイプの事象である。この種の事象では上のアスペクト情報、特に (d) の複合的アスペクト情報は実質的にほとんど問題とならないので、その記述の必要性に気がつかないのかもしれない。しかし、理由が何であれ、(42) のように活動相/変移相が [+持続] の行為・変化/完結事象は「髪を染める」・「紐を結ぶ」・「家を建てる」・「論文を書く」など数多く存在するので、それを [-持続] のタイプと記述し分ける必要 (と同時に共通点も捉える必要) がある。本稿では [-持続] タイプを次のように記述し、(42) のような [+持続] タイプとの共通点と相違点の両方を明示的に表すことができる——これも並行事象構造の利点の一つである。

(44) < 2C >タイプ (行為・変化/完結事象): 「一郎が花瓶を割る」



ちなみにこのうち<行為>の部分が背景化されて外項がなくなると実質的に(40)で見た< 4C >タイプの変化事象と同類になる。それを構造的に表示すれば次のようになる(ここでは背景化された部分が灰色化によって表されている)。

(45) < 4C' >タイプ ((行為) 変化/完結事象): 「(一郎が花瓶に働きかけて) 花瓶が割れる」

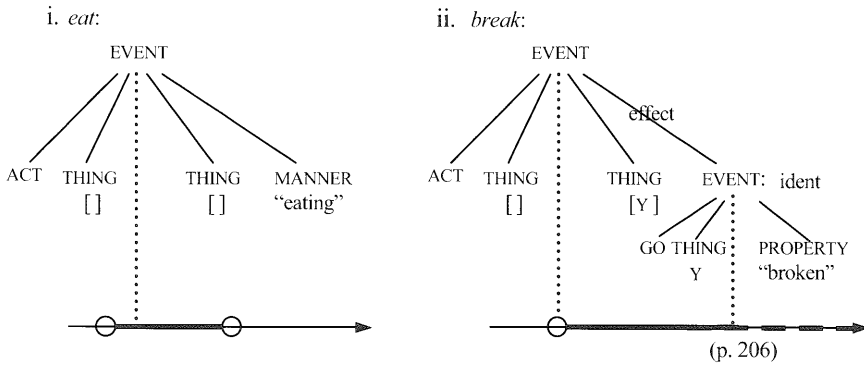


こうしていわゆる「能格動詞」の自他交替も並行事象構造で記述できる。

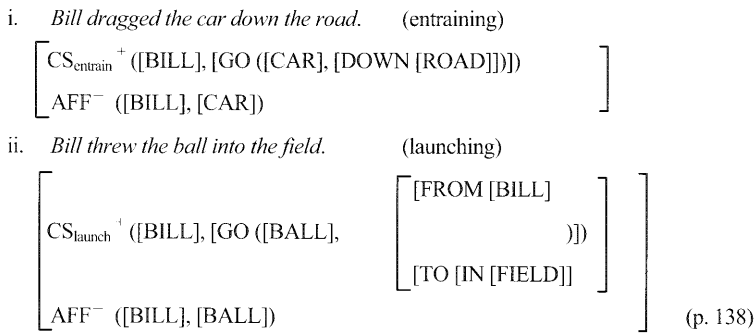
二つ目のグループは、動力学情報だけでなくアスペクト情報もある程度は捉えているが、記述方法に原理的限界があるため問題を完全に克服するのが難しいタイプである。このグループには次のような先行研究が含まれる。



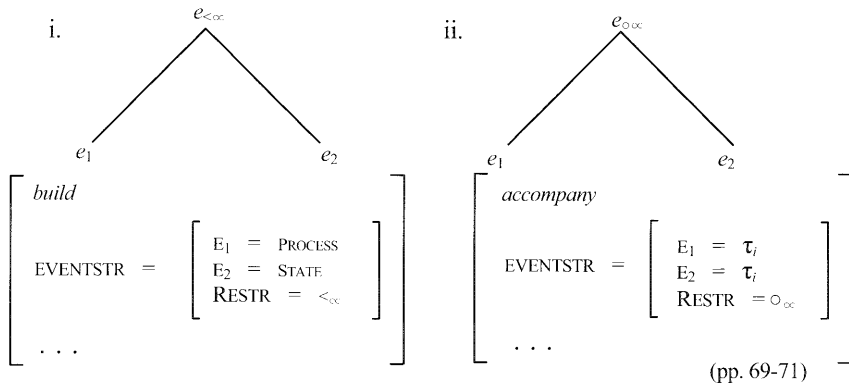
(46) a. Pinker (1989)



b. Jackendoff (1990)



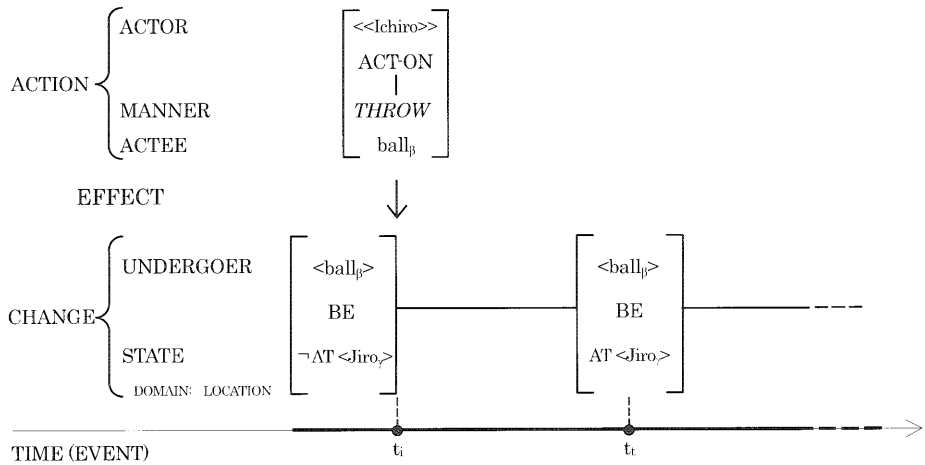
c. Pustejovsky (1995)



これらはいずれも上記のアスペクト情報（の少なくとも一部）を明らかに意識して捉えようと試みており、その点で（43）で見た先行研究より少し先に進んでいる。特に（46b）の Jackendoff (1990) と（46c）の Pustejovsky (1995) は drag や accompany のような主体が客体と共に移動していくタイプの行為・変化事象と throw のような主体の行為が客体の変化前に終了するタイプ——Talmy (1985a)・丸田 (1998) の用語を使って言えばそれぞれ「同延使役 (extended causation)」と「オンセット使役

(onset causation)』——を峻別しているのので、その点では一歩前進している。<sup>35</sup>しかしそれでも (a) ~ (d) のアスペクト情報のすべては捉えられていない上に、それ補うために構造を改良するにしても (46) のような表記法では限界があるように思われる。例えば Jackendoff (1990) なら〈使役〉を表す CS に entrain/launch という語をそのままインデックスとしてふっているだけであり、Pustejovsky (1995) では二つの下位事象の関係を不等号記号と丸という恣意的な記号で表しているだけであって、それをどう改良しても必要なアスペクト情報を十分に、かつ明示的に表示できるようになるとは思えない。それに対して本稿の並行事象構造では、同延使役タイプは (42) のように、オンセット使役タイプ (のうちの変移相が [-持続] のタイプ) は (44) のように、さらに言えば「一郎が二郎にボールを投げる」のように変移相が [+持続] のオンセット使役タイプは次のように、すべて構造的に表し分けることができる。<sup>36</sup>

(47) < 2C >タイプ (行為・変化/完結事象): 「一郎が二郎にボールを投げる」

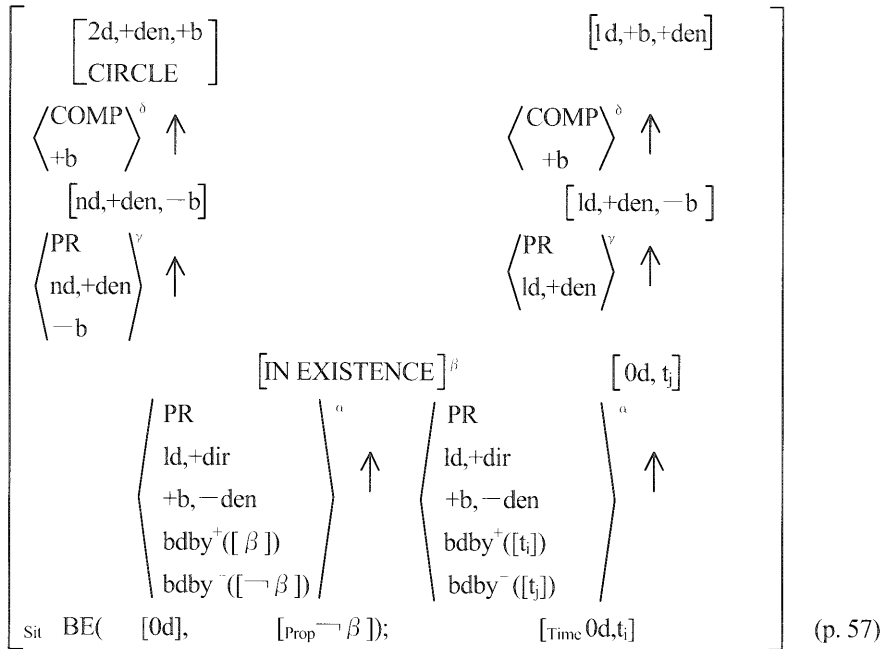


最後に三つ目のタイプを見てみよう。それは Jackendoff (1991, 1996) の構造保持束縛理論 (structure-preserving binding theory) やそれに基づいた岩本 (2002, 2006) の事象投射理論で、それらはアスペクト情報を十分に捉えられるほどの記述力があるという点でさらに一歩進んでいる。

(48) a. Jackendoff (1991, 1996)

$$\begin{array}{c}
 \left[ \begin{array}{ccc}
 \left[ \begin{array}{c} 1d \\ +b \end{array} \right]^{\alpha} & \left[ \begin{array}{c} 1d \\ +b \end{array} \right]^{\alpha} & \left[ \begin{array}{c} 1d \\ +b \end{array} \right]^{\alpha} \\
 \parallel & \parallel & \parallel \\
 0d & & \\
 BE & ([Thing X], [Space 0d]); [Time 0d] & \\
 Sit & & 
 \end{array} \right] \quad (p. 324)
 \end{array}$$

b. 岩本 (2006)



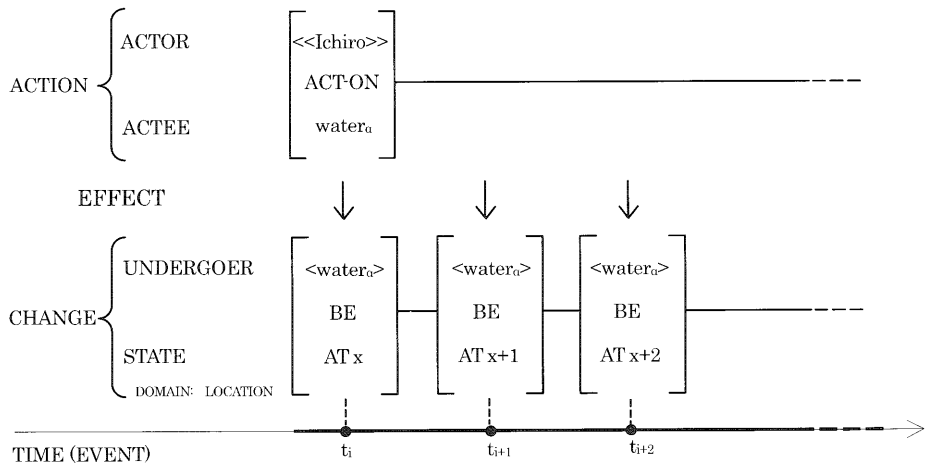
これらは事象の完結性に関わる様々な要因を統一的に捉えることができるほど強力かつ柔軟な記述力を持ち、その背後にはアスペクトについての深い洞察が窺えるものの、提示されている具体的現象の記述には動力学情報が抜け落ちていることが多い上に、アスペクト情報の表示があまり明示的でないという問題がある。例えば、(48a)は「+完結」の変化事象を表しているが、そこに動力学情報がどのように統合されて上で挙げた多様な事象タイプを記述し分けるのかは不明であるし、(48b)は「円を描く」という事象の記述を意図した表示だが、実際には動力学情報がかなり抜け落ちており、その帰結として複合的アスペクト情報も捉えられていない。具体的には、(48b)の構造が実際に表しているのは「円ができる」という<変化/発生>の部分だけで、描き手の<行為>と<作用(行為と変化の因果関係)>の部分は全く入っていない。従って行為と変化の並行的進展に関する情報も入っていない。つまり、ここでもまだ上記のアスペクト情報は完全には捉えられていない。そして、これらの理論では今指摘した点を含めていくつか修正すれば当面の問題を克服することは可能だが、それが(我々が今求めている種類の情報の構造表示として)明示的なものになるとは思えない。なぜなら、それには(「円を描く」)のようなごく単純な事象を表すのにさえ(48b)以上に複雑な構造が必要になり、かつ、これは基になっている Jackendoff (1991, 1996)の構造保持束縛理論にも当てはまるのだが、この種の構造記述ではアスペクトの時間の情報が縦の次元で、しかも素性値やインデックスという表記法で表されることにな

るからである。周知の通り、どんな学問分野でもある現象の時間的進展を記述する際にはたいてい時間を横軸に取り、そのスケール上の空間的幅との相同性を利用して時間経過を表示するものだが、言語学だけはそれを縦軸で、しかも空間関係との相同性を使わずに表示する必要があるとは思えないし、ましてやそうすることによって必要な情報の表示がより明示的になるとは思えない。

以上のように、先行研究では上で挙げた七つの動力学・アスペクト情報をすべて同時に、かつ明示的に表すことができそうもないが、本稿が提案する構造ではそれができるとするのがここでのポイントであり、これが並行事象構造を支持する最も強い証拠の一つである。次節で詳しく示されるようにテイル文の意味解釈の違いをこの構造でうまく記述・説明できるということも別の証拠となるが、テイル文とは独立にこの構造を仮定する根拠があるという点はここで銘記されたい。

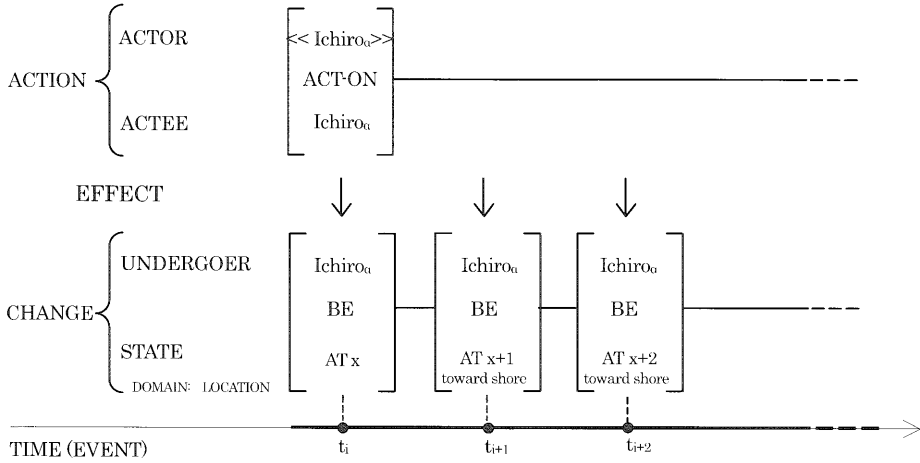
では元に戻って各事象タイプの構造記述を続けよう。行為・変件事象のうち〔+完結〕タイプ（<2C>タイプ）は今いくつか見たが、それが〔-完結〕になれば次のような構造になる。

(49) <2A>タイプ（行為・変化／非完結事象）：「一郎が水を流す」



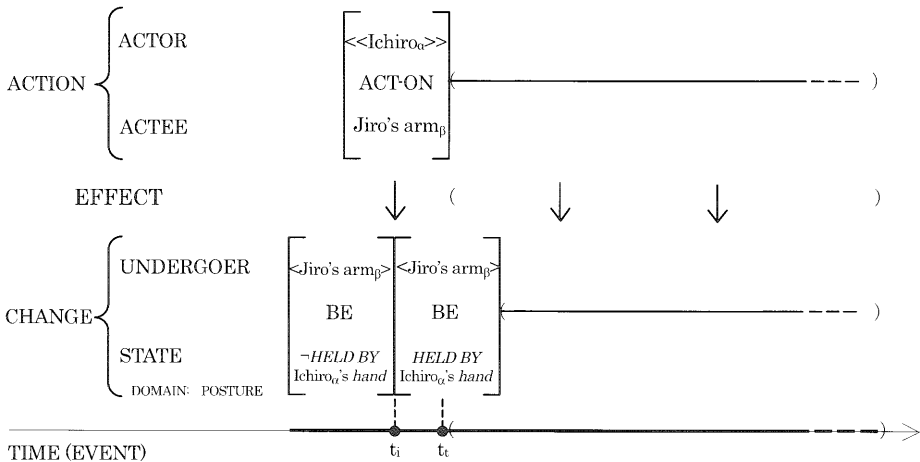
「一郎が岸へ泳ぐ」のように行為主自身が移動する事象の場合は、次のように行為主と変化主が同一指示の構造となる（岸へ向かって泳いでも2節で述べたような理由で全く前に進まないこともあり得るので、厳密にはこの文は<1B>タイプ（行為／完結意図）の事象を表しているとも解釈できる——そしてその構造は後ほど記述する——が、ここでは自然に解釈できる移動を伴う状況に対応する構造を挙げる）。

(50) < 2A >タイプ (行為・変化/非完結事象) : 「一郎が岸へ泳ぐ」



一旦変化が完結した後に引き続き行為を継続して結果状態を維持するタイプの事象——< 2D >行為・変化/完結維持事象——は (51) のように記述できる (そこで完結点以降の部分がすべて丸括弧で括られているのは< 行為/結果状態 >の維持が注11で述べた意味で随意的だからである)。

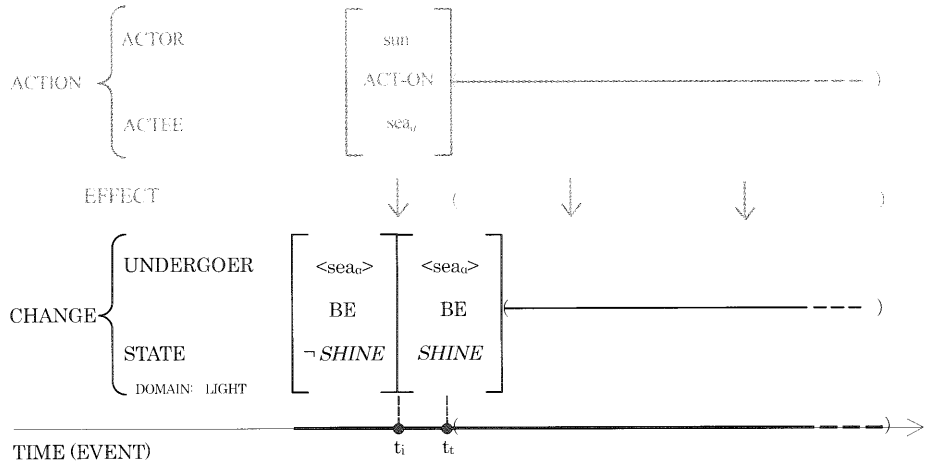
(51) < 2D >タイプ (行為・変化/完結維持事象) : 「一郎が二郎の腕を掴む」



同じ完結維持でも変化やその結果状態の維持が主体以外のモノの力によって引き起こされているケースは< 行為性 >がないので< 4D >タイプ (変化/完結維持事象) となる。例えば前節で見たように、「海が輝く」と言ってもたいてい海は自分自身の力で輝くわけではないので、この種の事象は< 4D >タイプの一例である。そしてこのタイプはその変化・維持エネルギーの供給源のモノ——例えば「海が輝く」ならたいてい「太陽」——とその力の行使・作用が全く概念化されていないわけではなく、

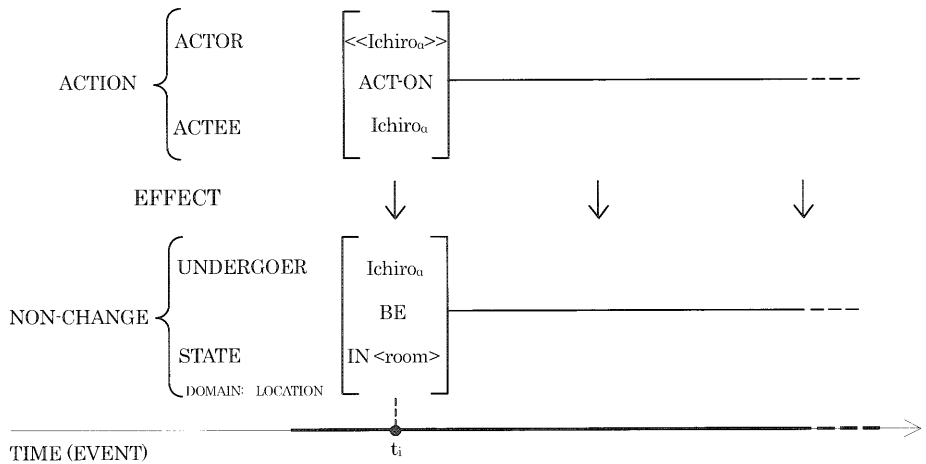
むしろ背景化された形で事象構造に含まれていると考えられるので次のような構造となる。

(52) <4D>タイプ (変化/完結維持事象): 「(日の光で) 海が輝く」



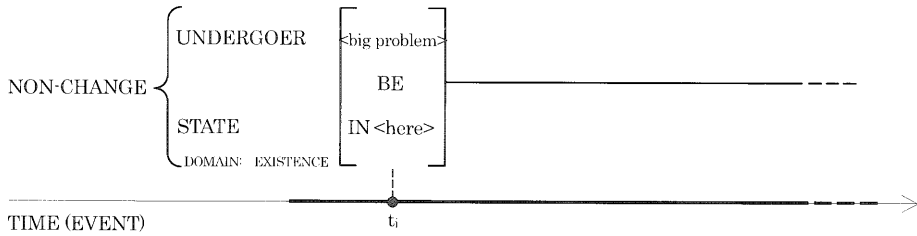
そもそも変化が全くなく、初期相の状態をそのまま維持するタイプ (<3A>行為・状態/非完結事象) になると、(53) のような構造となる (そこでは下位層を不変化層 (non-change tier — 略して NON-CHANGE) と表示してこれまで見てきた変化層 (CHANGE) と区別してある)。

(53) <3A>タイプ (行為・状態/非完結事象): 「一郎が部屋でじっとする」



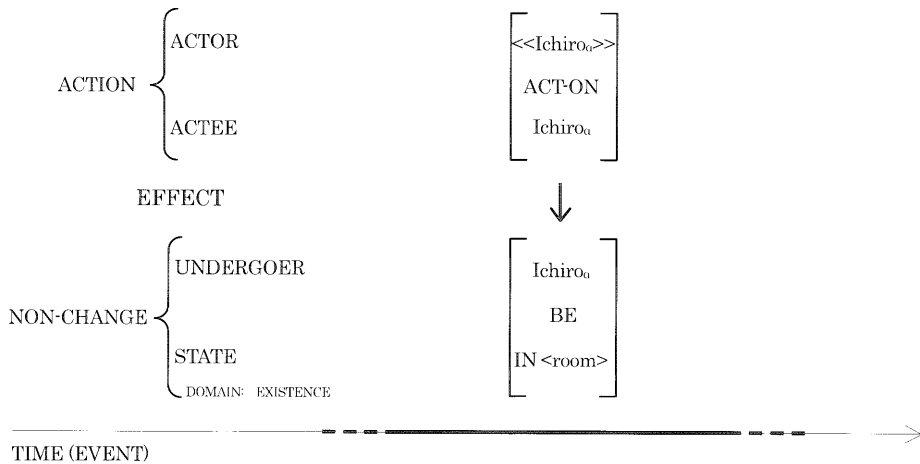
そこから<行為>を除けば<5A>タイプ (状態/非完結事象) になる。

(54) < 5A >タイプ (状態／非完結事象) : 「ここに大きな問題が存在する」

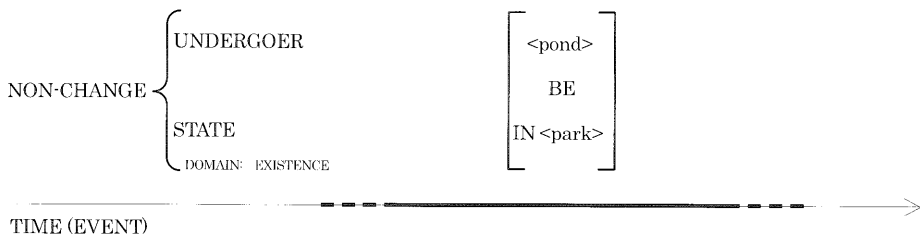


今見た二つの静的事象 (< 3A >と< 5A >) は [+限界] タイプだが、それが [-限界] タイプ (< 3E >と< 5E >) になると定義上局面を分割する境界が全くないので次のような構造になる。

(55) < 3E >タイプ (行為・状態／非限界事象) : 「一郎が部屋にいる」



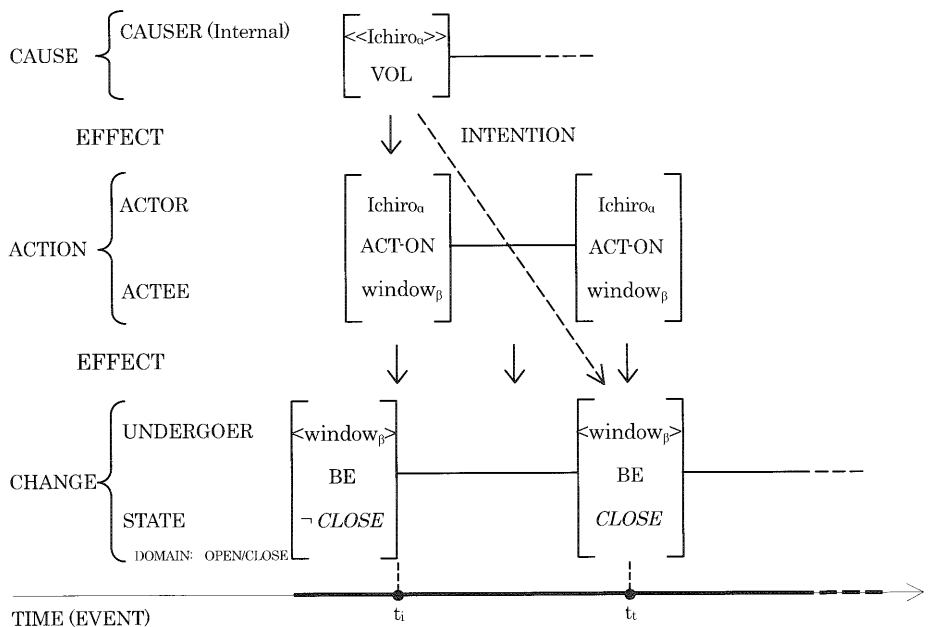
(56) < 5E >タイプ (状態／非限界事象) : 「公園に池がある」



ここまで<行為層>、<(不)変化層>、そしてその両方を持つ事象を見てきたが、最後に<原因層(cause tier——略してCAUSE)>を含むタイプを見てみよう。3.1節で述べたように、行為はたいてい主体が自分の意志で行うので、厳密に言えばこれまで見てきた行為事象を表す構造には行為層の上に原因層があり、そこで<原因[-外的]>という情報、つまり原因／行為主内部の<意志>が表示されているべきであっ

た。さらに言えば、それが客体（または主体自身）の変化を伴う事象（行為・変化事象）であれば、たいてい主体は客体／主体自身をある状態にさせるという目的をあらかじめ持ち、それを意図して行為を遂行するので、原因層では<意志>だけでなく<意図>も表示されているべきであった。従って、例えば<2C>タイプの「一郎が窓を閉める」であれば、(42)ではなくむしろ次のような構造で表示されるべきであった（そこで CAUSER は原因主層を、(Internal) はその原因が行為主内部にあることを、そして VOL は意志をそれぞれ表している）。

(57) <2C'>タイプ（意志／意図的行為・変化／完結事象）：「一郎が窓を閉める」



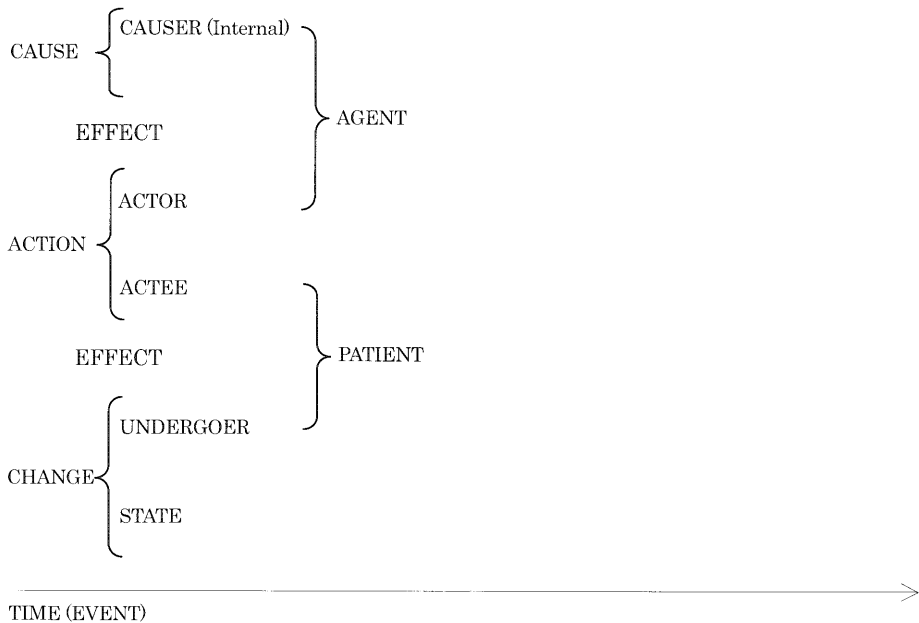
この構造は単に主体が客体に働きかけ、その結果それが閉まっていない状態から閉まった状態に変化するというだけでなく、主体は初めからその状態変化を意図し、自分の意志でそれを引き起こす行為を始動・遂行するという情報まで表している。<sup>37</sup> (3.1節で規定した狭い意味ではなく通常の意味での)「使役」に関する多くの先行研究で指摘されているように、いわゆる「(語彙的)使役文」が表す事象はたいていこのように主体が客体に対して意志的・意図的に直接働きかけて状態変化させるタイプなので(黒田1975:11章、Lyons 1977:12章、Lakoff and Johnson 1980:14章、西村1998:2章等を参照)、(57)はそのプロトタイプを表す構造と言える。このように、厳密に言えば<行為>を含む事象の構造記述にはたいてい<意志>(と場合によってはそれに加えて<意図>)を表す<原因層>まで入れておく必要がある。

また、この三層構造を基にすると、純粋な行為主と意志(意図)を持つ行為主を構



造的に表示し分けることも可能になる。上述の通り、後者——つまり上位二層にまたがる複合的意味成分〈内的原因主+行為主〉——の方がむしろ行為主のプロトタイプであり、以下それを単なる〈行為主〉と区別する必要がある場合は〈意志的行為主 (agent)〉という用語を使って差異化するが、呼び名が何であれ、意味役割の構造記述という点から言っても〈原因層〉まで含めた表示の方が望ましいと言える。ちなみに、英語の術語 agent に対応する日本語として最もよく使われる用語は「動作主」だが、この用語を採用すると〈行為〉とは別に〈動作〉という事象タイプを想定していると誤解される恐れがあるので本稿では使用しない。また、agent と並んで行為・変件事象を表す他動詞の意味役割としてよく使われる用語に patient があるが、本稿ではそれを下位二層にまたがる複合的意味成分〈被行為主+変化主〉に対して使用する。それによって例えば「太鼓を叩く」の「太鼓」のように単に行為の対象となっているだけのモノと「花瓶を割る」の「花瓶」のように状態変化までのモノとの意味役割上の区別ができる。こうした各層内の意味役割と複数の層にまたがる意味役割の関係を事象構造上でまとめると次のようになる。

(58) 意味役割の構造的関係



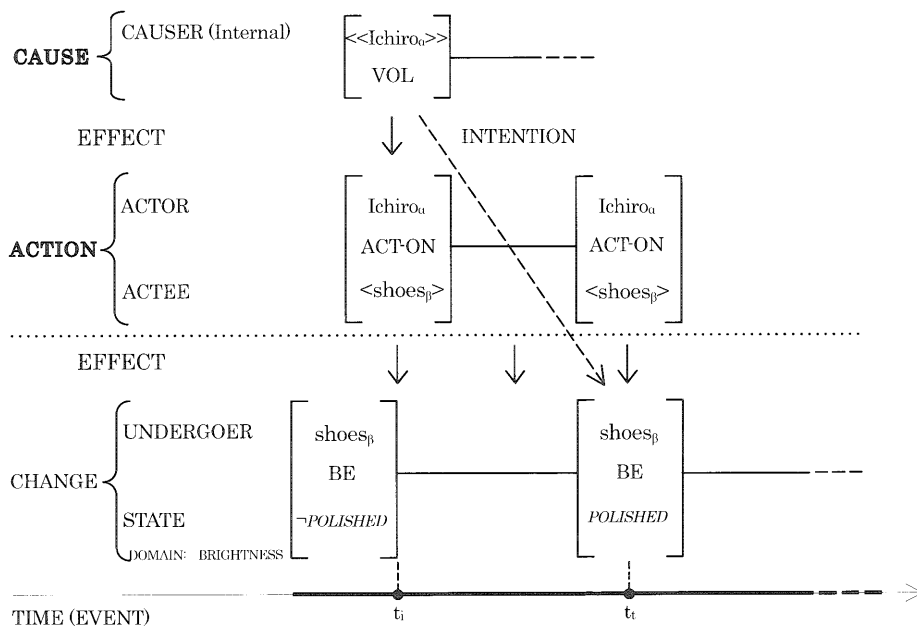
このように、本稿の提案する並行事象構造では各意味役割が構造上の位置によって定義されるため、意味役割の数や適用範囲が適切に限定されるという利点もある。

原因層まで含めた構造表示にはこのような利点があるものの、上述のように〈意志／意図〉は日本語では文法的形式にあまり反映されない上に、そこまで記述に入れる

と構造表示が複雑になるという（実質的ではなく単に表記上の）問題もある。そこで本稿では、ここで原因層に不可避免的に言及する必要がある経験的現象を三つ取り上げ、それらを<原因・行為・変化>の三層構造（あるいは<原因・変化>の二層構造）で記述することによって原因層の必要性を実証し、それ以降は原則的に原因層を除いた簡略表示——例えば<2C>タイプであれば“三階建て”の(57)ではなく“二階建て”の(42)——で話を進めていくことにする。

原因層が重要な役割を果たす一つ目の現象は、<1B>タイプの事象（行為／完結意図事象）である。このタイプは、前節で規定・例証したように、基本的に[-完結]の行為事象だが、それが客体にある変化を引き起こすことを意図して行われるという点が単なる行為事象の<1A>タイプと異なる。この種の事象を記述する際には、単に行為層で主体による客体への行為を表示するだけでなく、原因層で<意志>と<意図>を明示し、変化層で（必ず実現されるわけではないが）意図されている客体の変化を指定しておく必要がある。例えば「一郎が靴を磨く」であれば次のような構造となる（ここでは CAUSE と ACTION を太字にするによって原因層と行為層に動詞の意味的焦点が当たっていることを、そしてそれらと変化層との間に点線を引くことによって変化は意図されているだけで必ずしも達成されるわけではないことを表している）。<sup>38</sup>

(59) <1B>タイプ（行為／完結意図事象）：「一郎が靴を磨く」



ここから原因層を除くとこのタイプの事象の本質的な特性の一部が失われることにな

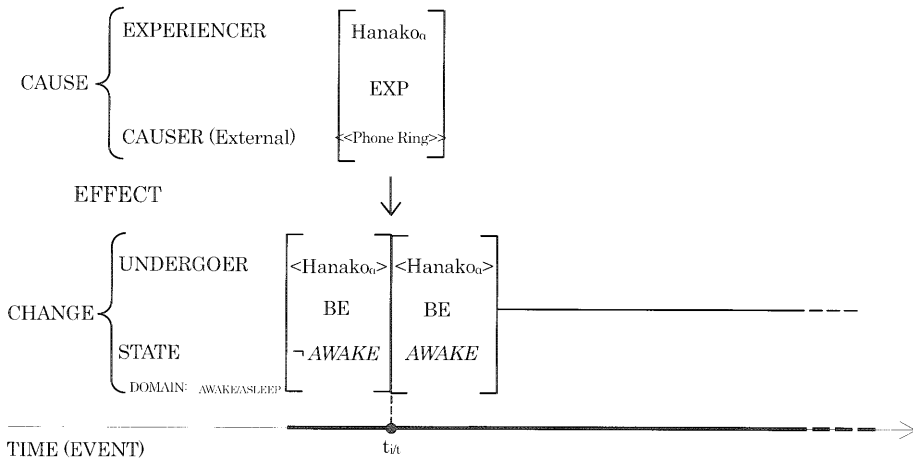
る。その証拠に、(60) と (61) にそれぞれ示したように、この種の事象を表す文にはたいてい「うっかり」のようなく無意志／無意図性>を表す副詞は付けられないし、付けられるように見えるケースでは結果をキャンセルすると必ず矛盾する——つまりそれは同じ動詞の別の用法であり、もはや< 1B >タイプの事象ではない ((61) の類似例は Tsujimura 2003 : 398 や江連 2008 : 3 を参照)。

- (60) a. ?? 一郎がうっかり靴を磨いた。  
 b. ?? 二郎がうっかり魚を炒めた。
- (61) a. # 花子がうっかり紙を燃やしたが燃えなかった。  
 a'. 花子が紙を燃やしたが燃えなかった。  
 a". 花子がうっかり紙を燃やした。  
 b. # 良子がうっかりエンジンをかけたがかからなかった。  
 b'. 良子がエンジンをかけたがかからなかった。  
 b". 良子がうっかりエンジンをかけた。

従って、このタイプの事象の記述から原因層を外すことはできない。

二つ目は< 6C >タイプの事象(使役/完結事象)である。例えば2節で見た文「電話のベルが花子を起こした」は次のような構造となるが、そこから<原因>を除けばもちろん(使役文として)意味を成さない(原因層のEXPは経験を表し、ここでは「経験者<花子>が外的原因主<電話のベル>を聞く」という下位事象を表している)。

(62) < 6C >タイプ(使役/完結事象): 「電話のベルが花子を起こす」



ちなみに、(63) に示したようにこの種の文もキャンセルしたら必ず矛盾するが、そ

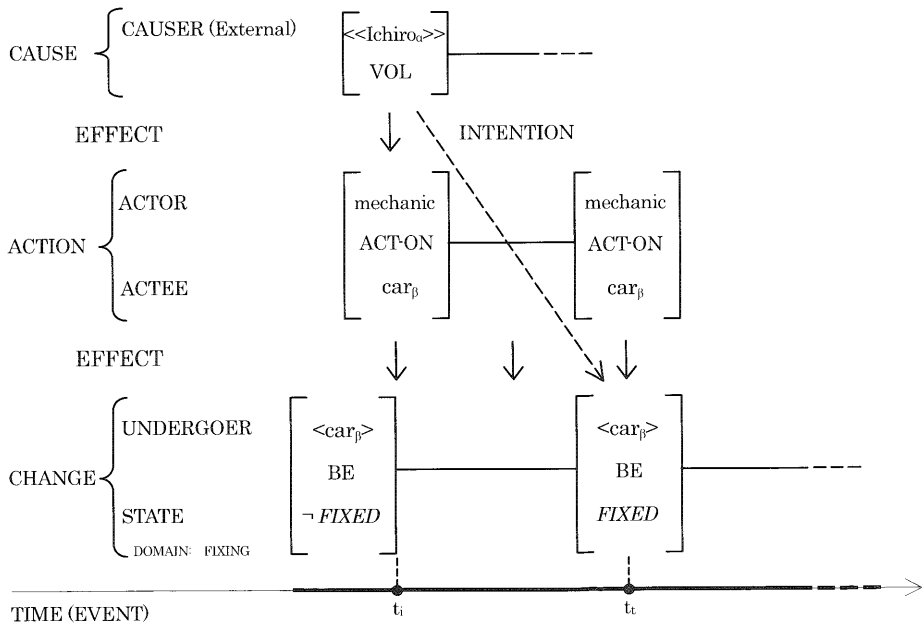
れに対応する意志／意図的行為・変件事象を表す文は矛盾しない（(63a)の類似例は三原 2004：134-135を参照）。

- (63) a. # 電話のベルが花子を起こしたが花子は起きなかった。  
 b. 一郎が花子を起こしたが花子は起きなかった。

この観察もキャンセル文とはく1B>タイプの事象を表す文のことであるという本稿の特徴付けを支持する証拠となる。

三つ目はいわゆる「介在文」である。介在文とは動詞が表す行為を主語が指すモノ（たいてい人）が自分で行うという解釈と他の誰かが行うという解釈の両方が可能な多義文のことである。例えば「一郎が車を修理した」という文は、一郎が自分で修理したという意味と整備士に依頼して修理してもらったという意味のどちらにも解釈できる。前者の意味を記述する際には原因層の有無はそれほど重要ではない。その行為が主体自身の意志によるものであれば(57)のような原因層を含む三層構造になり、そうでなければ(42)のような二層構造になるだけである。その違いが文法的に反映されることもないので、副詞的修飾語句でも使わない限り形式による区別はできない。一方、後者の場合は「整備士による車の修理」という行為事象を引き起こした原因主としての<一郎>を次のように原因層で明示する必要があるので三層構造でなくてはならない。

- (64) <6C>タイプ（使役／完結事象）：介在文「一郎が車を修理する」



つまり、介在文とは< 2C / 2C' >タイプの行為・変件事象と< 6C >タイプの使役事象を多義的に表す文と言える。このように限定的に介在文を特徴付けることによって、行為事象を表す文がすべて多義的に解釈できるわけではないことが説明できる。例えば「二郎が図書館で勉強する」や「三郎が部屋で踊る」などは（自分でその行為をしたという解釈しかできないので）介在文とはならないが、これは「図書館で勉強する」や「部屋で踊る」が< 1A >タイプの単なる行為事象だからである。逆に「花子が髪を染めた」や「良子が家を建てた」などは< 2C >タイプの行為・変件事象なので介在文となり得る。そしてこのような特徴付けを可能にしているのが上で提案した事象／動詞の動力学・アスペクト分類と< 原因・行為・変化 >の三層から成る並行事象構造である。従って、介在文はそれらの必要性和重要性を示す更なる証拠とみなすことができる。<sup>39</sup>

以上で(23)にまとめた13種類の事象タイプは（まだ取り上げていない下位タイプはいくつかあるものの）一通りすべて並行事象構造で記述したことになる。ではこれをふまえてテイル文の分析に移ろう。

#### 4. テイル文の意味的分析

前節で提案した事象構造と動詞分類を基盤とし、それにここで提示するテイルの意味を重ね合わせると、2節で指摘した先行研究の問題点を解決しながらテイル文の振舞いをうまく記述・説明することが可能になる。

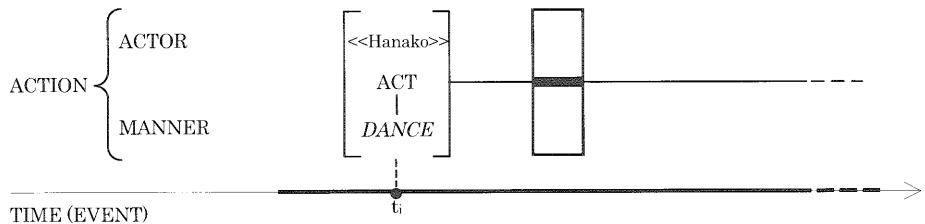
(65)テイルとは、内在的に有界の事象を表す動詞に付き、その事象の成立点突破後の一局面の継続を非有界的に前景化する補助動詞である。

この定義には2節で紹介した先行研究の洞察が「成立点突破後の一局面の継続」という表現で取り入れられており、「非有界的に前景化する」という部分はLangacker(1982, 1987)の先駆的アスペクト分析に基づいている。「非有界的に前景化する」とは、基盤となる要素である動詞の事象構造の一部に限界点を含まない“枠”をはめて非有界局面を区切り、その部分を際立たせるという意味である。認知文法の用語で言えば、ベースの上に限界点を含まない直接的スコープを設定し、その内部をプロファイルするということである。<sup>40</sup>ではこの定義の下でテイル文の一見多様な用法がどのように記述・説明されるかを一つひとつタイプ別に見ていこう。

まず、動詞が「踊る」のようなく< 1A >タイプ（行為／非完結）であれば限界点は始動点しかなく、3.3節で述べたようにその始動点が成立点となるのでそれを突破した後の局面は[+持続]の活動相しかない。ベースとなるこの種の動詞の事象構造の

上にテイルの意味を重ね合わせると、その局面の継続が非有界的に前景化され、結果として「その行為が進行中」という解釈が出てくる。以下、この解釈を<行為進行>と呼び、それを同定・確認するテストとして「…テイル最中である」へのパラフレーズを使おう。<sup>41</sup> 例えば「花子が踊っている」は次のような構造で表され、それは「花子が踊っている最中である」と言い換えられるので<行為進行>用法とみなされる。

(66) <1A> (行為/非完結) 動詞+テイル: 「花子が踊っている」 <行為進行>

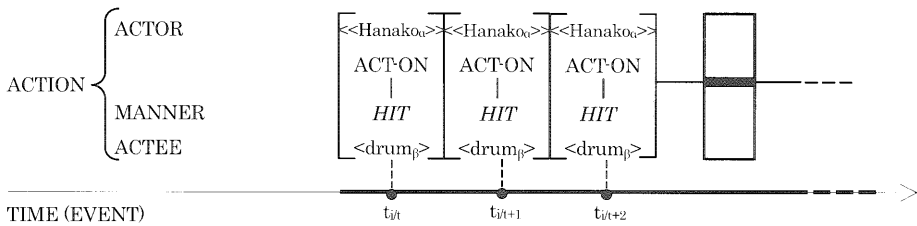


この構造は(37)で見た<1A>タイプの事象「花子が踊る」をベースとし、その活動相の一部に限界点を含まない“枠”がはめられ、その局面が前景化されていることを表している(そこで非有界的に区切られている部分は文字通り四角い枠によって囲まれ、前景化されている局面は太線によって示されている)。(24a)に挙げた他の<1A>動詞のテイル形(「舞っている」・「演じている」・「考えている」・「働いている」等々)もすべてこの構造を持ち、<行為進行>の意味に解釈される。

ただし、(38)の「花子が太鼓を叩く」のように活動相が[-持続]である場合は、それが表す行為には定義上(マイクロレベルでは)時間的幅がないので、そのテイル形「花子が太鼓を叩いている」は(66)のように単純な行為進行の解釈にはなり得ない。しかし興味深いことに、それにもかかわらずその種の[-持続]行為動詞にもテイルを付けることができる。そしてその際は必ず<行為反復>の解釈になる——この解釈は「繰り返し」という副詞を付けても全体の意味がほとんど変わらないかどうかでテストできる(例えば「花子が太鼓を繰り返し叩いている」と言っても「花子が太鼓を叩いている」と実質的な意味はほとんど変わらない)。これが可能なのは、動詞自体にたいしてそれが表す事象の生起回数に関する内在的指定がないため、同じ形式で単一の事象だけでなく何度か繰り返して起こる事象も表すことができるからだと思う。例えば、「叩く」という動詞は「主体が客体に対して手を使って瞬間的に打撃を加える」という意味だが、その回数まではあらかじめ指定されていない。つまり、語彙的にコード化されているのは抽象的な行為のタイプだけであって、そのトークンまでは指定されていない。それはちょうど「机」という名詞の語彙的な指定は「ある種の家具」というタイプまでであって、そのトークンの個数までには及んでいないのと同じである。そして「机」が「二つの」のような数量詞で連体修飾されたら自動的に

それに合うトークン個数で解釈されるのと同様に、「叩く」も「二回」のような数量詞で連用修飾されたらそれに合わせて反復行為として解釈される。「叩く」のような[-持続] 行為動詞+テイル形の反復読みはこれと同じ原理で生み出されると考えられる。つまり、(65) の定義によりテイルはそれが付く動詞の表す事象に少なくとも一つの限界点/成立点とその後の局面にある程度の時間的幅を要求するが、(38) に示したように「叩く」タイプの動詞が表す事象にはマイクロレベル——単一の行為のレベル——ではその幅はないので、まずそれにある種の集合化——いわば“点”的事象を並べて“線”化する心的プロセス——を適用して高次のマクロレベルで [+持続] の行為事象を形成せざるを得ない。そしてそのレベルの事象にテイルをかけるので、「叩く」タイプの [-持続] 行為動詞+テイル形は自動的・強制的に<行為反復>の解釈となるのである。これを構造的に表せば (67) のようになる。

(67) < 1A > (行為/非完結) 動詞+テイル: 「花子が太鼓を叩いている」  
 < 行為反復 >



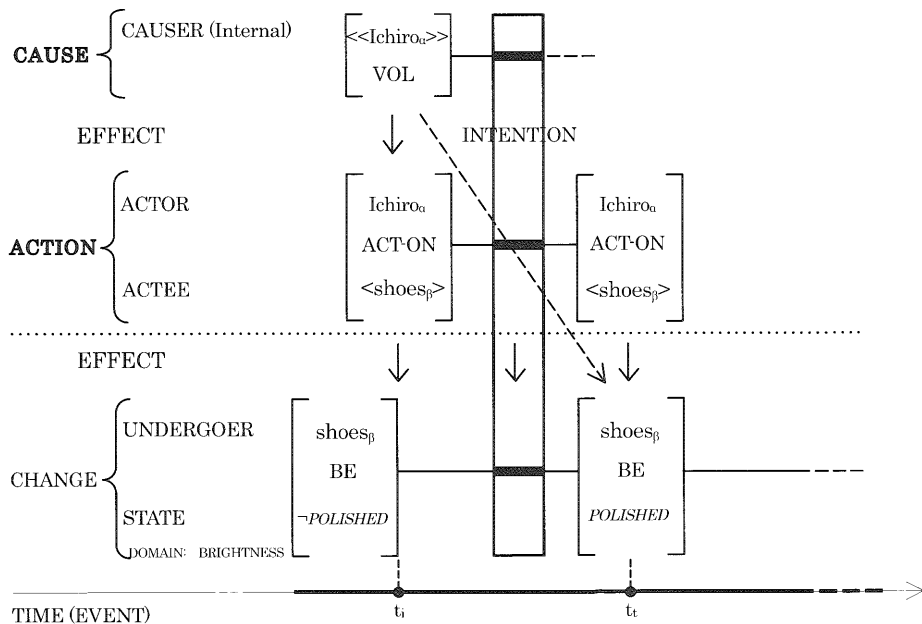
(24b) に挙げた他の< 1A >動詞のテイル形（「跳ねている」・「瞬きしている」・「囁んでいる」・「蹴ってる」等々）もすべてこの構造を持ち、< 行為反復 >の意味に解釈される。ちなみに、(24c) に挙げた「拍手する」や「ノックする」のようにテイルを付けなくても語彙的にマクロレベルの行為反復まで表している動詞もある。(24d) の「歩く」や「走る」などはたいてい（意図された）位置変化を伴うので< 1B >動詞のテイル形の後にふれる。

先に行く前にここでテイル形の< 反復 >解釈について注意すべき点をいくつか指摘しておこう。まず、「叩く」のようにマイクロレベルで全く持続性がない動詞のテイル形はマクロレベルでしか解釈できないので結果的に反復読みしか許されないが、逆に「走る」のようにマイクロレベルで持続性のある動詞のテイル形はマクロレベルで反復の解釈ができないというわけではないことに注意されたい。例えば (1c) 「花子は毎朝公園を走っている」のようにそれは可能である。ただし、そのような [+持続] 動詞のテイル形が表す事象の反復の時間的幅は、「叩く」のような [-持続] 動詞の場合とはたいてい異なることにも注意されたい。これは、[-持続] タイプの事象は数秒のスパンで反復できるが、[+持続] タイプは原理的にそれができないことに起因し

ている。従って、[-持続]の<1A>動詞+テイル形は(67)や(7a)「一郎が二郎の肩を叩いている」のように秒/分レベルで解釈される反復事象を表すことができるが、(66)や(1c)のような[+持続]の<1A>動詞+テイル形が<行為反復>の意味で用いられる場合は、必ず時間/日レベル以上の反復事象を指すことになる。<sup>42</sup>このように、本稿の分析では同じ<反復>と言っても時間的幅が異なることもあるという事実を捉え、その上でのタイプの動詞がどのように振る舞い、それはなぜかということまである程度説明できるという点にも注目されたい。

では次に<1B>タイプ(行為/完結意図)の動詞+テイル形を見てみよう。<1B>タイプは(59)に示したように三層構造なので一見複雑に見えるが、<原因層>は単に行為主の<意志・意図>を表しているだけであり、<変化層>の情報は意図されてはいるが必ず実現するわけではないので、テイル形の解釈は<1A>タイプとほとんど同じである(ちなみに金田一(1950/1976:23-24)や吉永(2008:113,122)は<意志性>の有無によってテイル文の解釈が変わると述べているが、後ほど示されるようにそれに直接影響を与えるのは<意志性>というよりはむしろ<行為性>の有無や層レベルの焦点の位置——特に<行為層>と<変化層>のどちらに意味的焦点が当たっているか——である)。ただし、行為と並行して変化も進行し得るので、その潜在的変化を考慮して<1B>動詞+テイル形の解釈を<行為(・変化)進行>と呼んでおこう。「靴を磨いている」のようにその行為が[+持続]の場合は次のような構造となる。

(68) <1B> (行為/完結意図) 動詞+テイル: 「一郎が靴を磨いている」  
 <行為(・変化)進行>



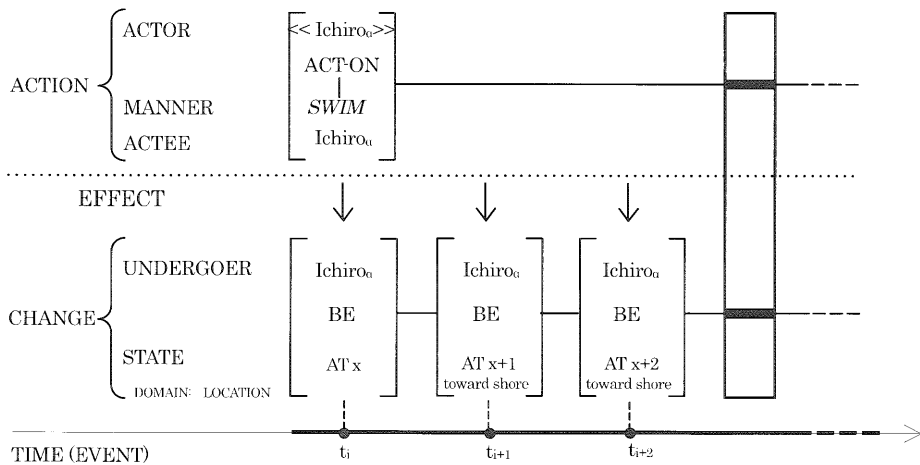


(25a) に挙げた他の < 1B > 動詞のテイル形 (「拭いている」・「洗っている」・「沸かしている」・「なだめている」等々) もすべてこの構造を持ち、< 行為(・変化)進行 > の意味に解釈される。(25b) に挙げた「エンジンをかける」のような [-持続] タイプは、基本的には < 1A > の「叩く」のように < 行為反復 > となるが、それがあつた状態変化を意図して行われ、それが達成された時に行為も終了するという点が異なる。

< 1A > タイプの動詞に方向を表す副詞的修飾成分が付いた場合も (意図された) < 変化層 > が加わるので全体としては < 行為(・変化)進行 > の解釈になる。例えば「泳ぐ」に「岸へ」が付いたテイル文は次のような構造になる (上述のように、普通の場合ではこの種の行為は実際に変化を伴うので < 2A > タイプとなる)。

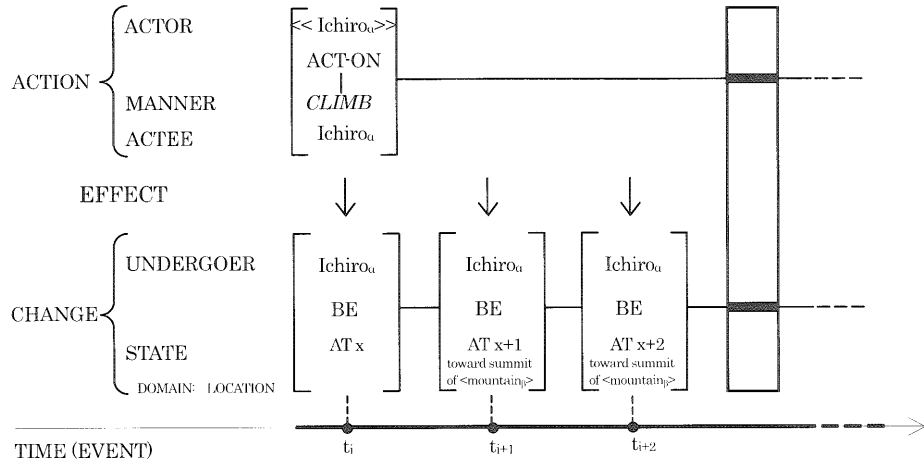
(69) < 1A > 動詞 (+方向句) + テイル : 「一郎が岸へ泳いでいる」

< 行為(・変化)進行 >

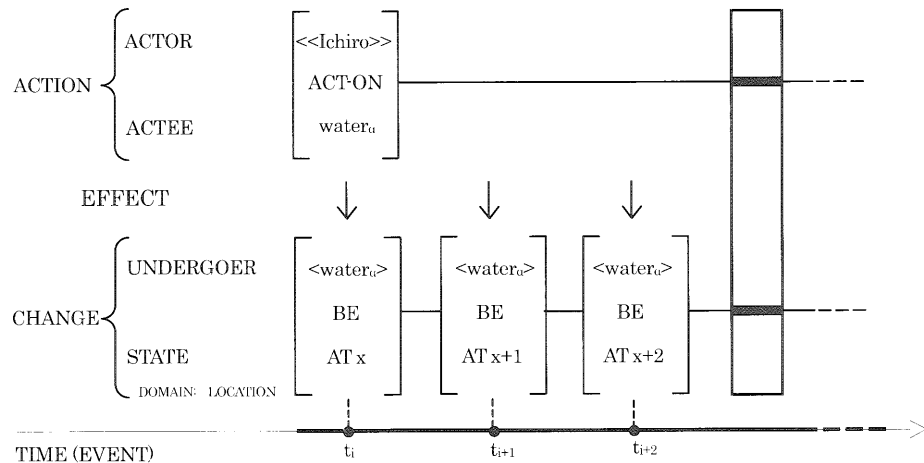


動詞が < 2 > タイプになるとベースとなる事象構造に < 変化層 > が必ず含まれるので、その帰結としてテイル形の解釈にも必ず < 変化 > が含まれる。まず [-完結] の < 2A > タイプは、[+再帰] であれば (70) のような構造に、[-再帰] であれば (71) のような構造になるが、いずれにしてもテイル形は < 主体の行為 > と < 主体/客体の変化 > が時間軸に沿って並んで進行する < 行為・変化進行 > の解釈になる。この解釈は、< 行為進行 > の部分は上述のテスト (「…テイル最中である」へのパラフレーズの可否) で同定・確認でき、< 変化進行 > の部分は「主体/客体の状態 (または位置/姿勢/所有関係等) が変化している最中である」と言えるかどうかでチェックできる。例えば (70) なら「一郎が山頂へ向けて山を登っている最中である」とも言えるし、「一郎の位置が変化している最中である」とも言えるので < 行為・変化進行 > 用法とみなすことができる。そして「主体の行為と客体 (または主体自身) の変化が並行して進行中である」と言えるかどうかでそれらの時間的並行性をテストできる。

(70) < 2A > (行為・変化/非完結) 動詞+テイル: 「一郎が山を登っている」  
 < 行為・変化進行 >



(71) < 2A > (行為・変化/非完結) 動詞+テイル: 「一郎が水を流している」  
 < 行為・変化進行 >

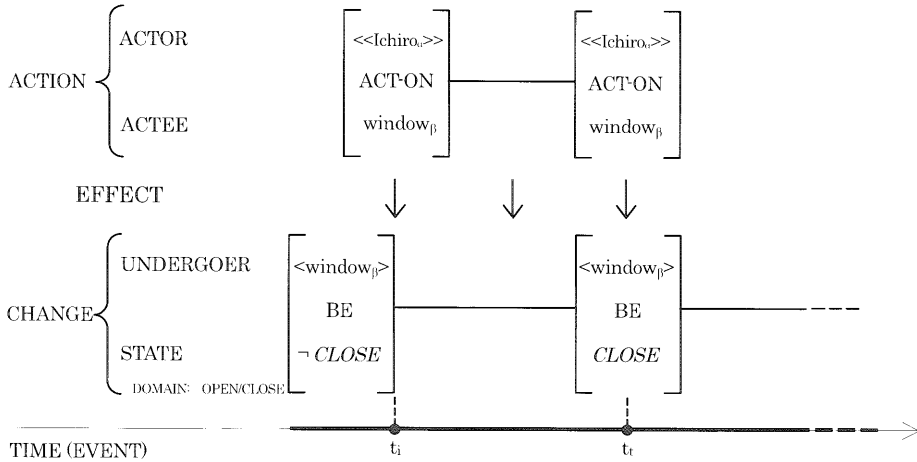


(26) に挙げた他の< 2A >タイプの動詞+テイル形(「階段を降りている」・「坂を滑っている」・「公園をぶらついている」・「ボールを転がしている」等々)も同じように解釈される。

< 2C >タイプのテイル形もほぼ同じように記述できるのだが、このタイプは限界点が二つあるため一見問題となる点が生じる。そのため少し補足説明が必要となる。まず、「窓を閉める」のように活動相/変移相と結果相が共に [+持続] のケースでは、(42) —下に(72)として再録—に示したように枠をはめて前景化し得る限界点突破後の局面が二つある。一つは始動点と完結点の間の局面(活動相/変移相)であ

り、もう一つは完結点後の局面（結果相）である。

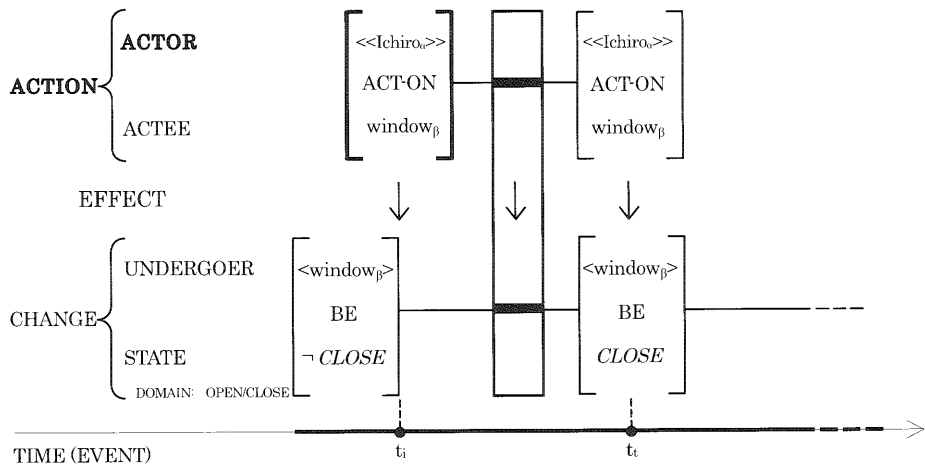
(72) <2C>タイプ（行為・変化／完結事象）：「一郎が窓を閉める」



そのうちテイル形（「窓を閉めている」）にして実際に前景化されるのは前者（活動相／変移相）であり、その解釈は<行為・変化進行>となるのだが、問題はこの解釈が(65)の規定と一見整合しないように見える点にある。というのは、それらを整合させるには「窓を閉める」タイプの事象の成立点が完結点ではなく始動点であると結論づける必要があるが、この結論は従来先行研究で仮定されてきた考え方とは一見相容れないからである。2節で取り上げた副島（2007）を含め、多くの先行研究ではこの種の完結事象の成立点は完結点であると仮定し、それを前提として様々な問題——例えばいわゆる「未完了の逆説(imperfective paradox)」など——を議論している(Dowty 1977, 三原 2004 : 13-14)。それに対して本稿は、事象によっては成立点が複数あることもあり、(72)のように複数の層から成る構造を持つ事象はその一例であると主張する（他の例は後ほどふれる）。具体的には、「窓を閉める」の場合は (i) 主体が客体に働きかけて客体が閉まる方向に変化した時点——つまり始動点（厳密には始動点直後の時点）——と、(ii) 客体の変化が完全に達成された時点——つまり完結点——の二つの成立点があると仮定する。そして、そのどちらが当該構文において重要な成立点とみなされるかは、その構文の意味的焦点が<行為層>と<変化層>のどちらに当たっているかによる——より限定的に言えば、焦点が<行為層>にある場合は (i) の始動点が、<変化層>にある場合は (ii) の完結点が成立点となる——と仮定する。そこで「窓を閉めている」を見てみると、二重の意味で<行為層>に焦点が当たっていることがわかる。まず、ベースとなっている動詞「閉める」は他動詞の能動態だが、それは対応する自動詞「閉まる」や受動態の「閉められる」が客体の変化に焦点を当てているのに対して明らかに主体の行為に焦点を当てている——そうでなけ

れば語彙的な存在意義がほとんどない。さらに、動詞に付いている補助動詞「テイル」も対応する「テアル」が客体志向であるのに対して明らかに主体志向であり、「窓を閉めている」の主体は変化主ではなく行為主である。従って、「窓を閉めている」のような事象タイプの焦点層は行為層——その中でも特に行為主層——となり、成立点は始動点となる。そして意味的焦点の当たっている行為層でその成立点突破後の局面はたいてい（窓が閉まった時点で主体の行為は終了するため）完結点前の活動相しかないので、そこがテイルによって前景化されることになる。そして、その局面は変移相と並行しているので、結果的に「窓を閉める」タイプのテイル形は<行為・変化進行>と解釈されることになる。今述べた層レベルの意味的焦点と焦点層における成立点を太字で表すと、全体の構造は次のようになる（そこで行為層には完結点後の線がない——つまり活動相は完結点で終了している——ことに注意）。

(73) < 2C > (行為・変化/完結) 動詞+テイル: 「一郎が窓を閉めている」  
 < 行為・変化進行 >

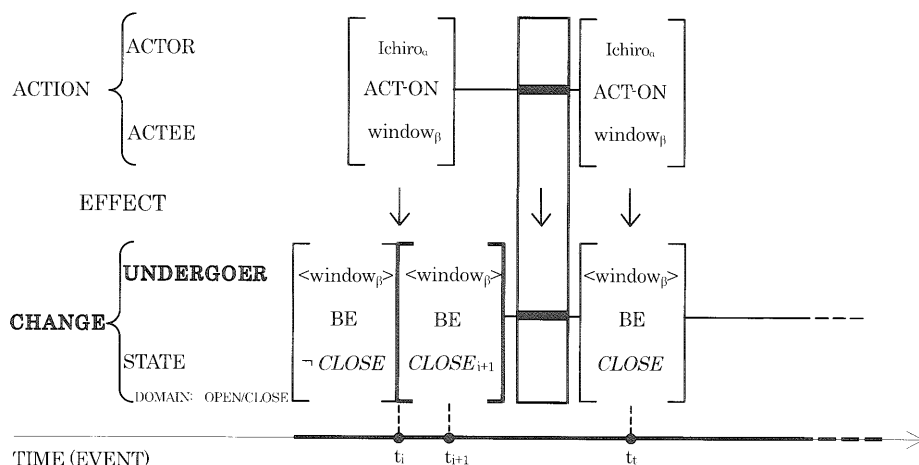


この分析は対応する受動文によって支持される。上記のように「閉める」のような行為・変化事象を表す他動詞が受動化されると意味的焦点は主体の行為から客体の変化へシフトする。従って、上の分析が正しければ受動態にテイルが付いた場合は前景化される部分もそれに応じてシフトし、結果的に文全体の意味解釈が変わると予測されるが、これは事実と一致する。例えば「窓が閉められている」なら (i) 「主体による行為と並行して窓が閉まっていく過程が進行中」という<行為・変化進行>（そして焦点は変化の側）と (ii) 「その行為・変化後の結果状態の継続」という<結果残存>の二つの解釈が可能であるが、これは< 2C >タイプの動詞の変化層には行為層とは違って完結点の後にも局面がある——例えば「窓が閉まっていく」という変化過程（変移相）の後には「窓が

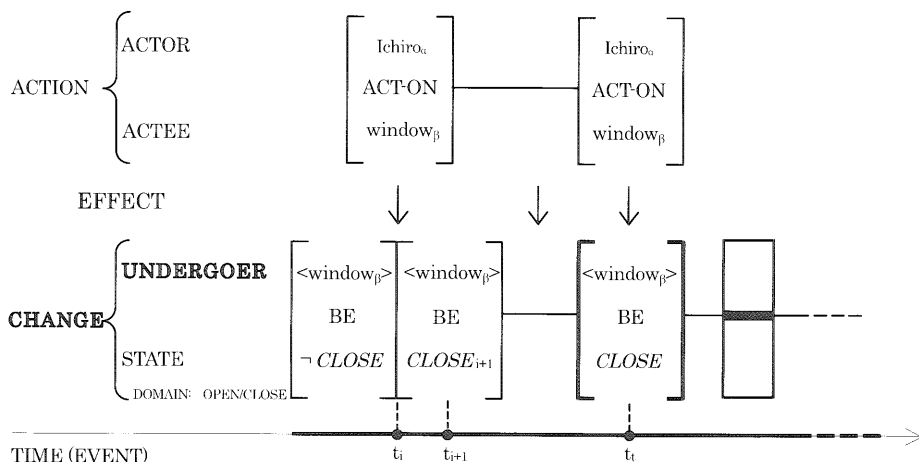
閉まっている」という結果状態（結果相）がある——ため、焦点層が変化層にシフトすれば前景化し得る局面が二つになるからであると説明できる。それを構造的に表したのが (74a/b) である—— (74a) は (i) の解釈（変化に焦点のある<行為/変化進行>）を、(74b) は (ii) の解釈（<結果残存>）を生み出す構造を表している（<結果残存>は「変化主が…した状態である」と言い換えられるかどうかでチェックできる）。また、ここでは<変化層>のレベルで始動点直後の成立点（わずかに閉まった段階）を表す必要があるので、その時点をと $t_{i+1}$ 、その時点における客体の状態を  $CLOSE_{i+1}$  と表し、最終的に完全に閉まった時点/状態を従来通りそれぞれ  $t_f/CLOSE$  と表記し分けている。

(74) < 2C > (行為・変化/完結) 動詞 (受動態) + テイル: 「窓が閉められている」

a. < 行為・変化進行(焦点は変化のレベル) > (≡ 「窓が閉められている最中である」)



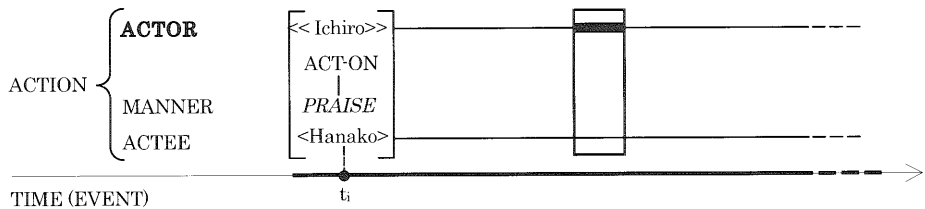
b. < 結果残存 > (≡ 「窓が閉まった状態である」)



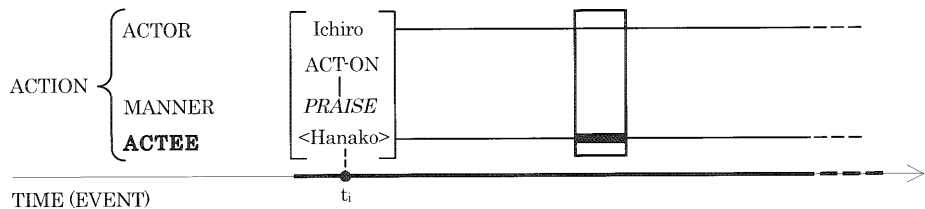
今見たのは<行為/変化層>レベルの焦点シフトの例だが、類似の現象は一つの層の内部でも見られる。例えば<1A>タイプの行為進行事象を表す文「一郎が花子を褒めている」を考えてみよう。この種の事象は変化を伴わないので事象構造には行為層しかない。従ってそれを受動文「花子が一郎に褒められている」にしても(73/74)のような層レベルの焦点シフトは起こり得ない。しかし、明らかにその能動/受動の二文間には意味的焦点の違いがある。本稿が提案している並行事象構造と上の分析を組み合わせればそれを行為層内部の二つの下位層——行為主層と被行為主層——の間の焦点シフトの帰結として捉えられる。つまり、(75)に示したように、能動文では行為層の中でも特に行為主層に主な焦点が当たっており、受動文になると焦点が行為対象の被行為主の方にシフトすると仮定することによって捉えられる。

(75) <1A> (行為/非完結) 動詞+テイル:

a. 能動態: 「一郎が花子を褒めている」 <行為進行(焦点は行為主)>



b. 受動態: 「花子が一郎に褒められている」 <行為進行(焦点は被行為主)>



この観察も層レベルの焦点シフトに基づく上の分析とそれが基づく並行事象構造を支持する更なる証拠とみなすことができる。成立点の指定の仕方に関する上記の主張を支持する経験的証拠もあるが、それはテイル文とは全く独立の証拠なので、次節でふれることにする。

<2C>タイプに話を戻そう。(27)で挙げた<2C>タイプの事象を表す動詞(句)のうち、活動相/変移相が[+持続]タイプのテイル形(例えば「髪を染めている」・「紐を結んでいる」・「家を建てている」・「論文を書いている」等々)はすべて(73)のような構造を持ち、<行為・変化進行>と解釈される。一方、「花瓶を割る」のように活動相/変移相が[-持続]のタイプは、(44)で示したようにその局面に枠をはめ

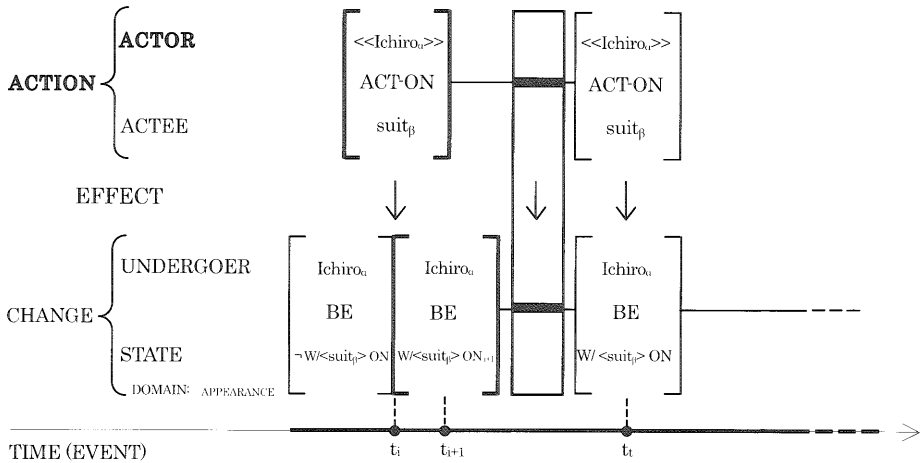
るだけの時間的幅がないので、テイル形（例えば「花瓶を割っている」）にしても<行為・変化進行>とは解釈できない。また、能動文である限り上で述べた理由で<結果残存>の意味にも解釈できない。結果として可能な解釈は<反復>か<パーフェクト>——それは後ほどふれる——だけになる。ただし、(3b)の「納屋を壊している」のような場合は、3.2節で述べたようにマイクロレベルでは[-持続]の行為・変化を反復遂行することによってマクロレベルでは一つの[+持続]行為・変化とみなすことができるので、(3a/73)の「窓を閉めている」とほぼ同じように<行為・変化進行>と解釈できる。

<2C>タイプの動詞のほとんどはこの分析の予測通り振舞うが、それに一見反するのが[+再帰]タイプの動詞である。例えば、よく知られているように「スーツを着ている」や「靴を履いている」のような着衣動詞+テイル形は能動態でも(74)で見た受動態と同じタイプの多義性を持っている。これはこの種の動詞が行為主自身に変化をもたらすような再帰的行為を語彙的に表しており、内在的に行為(主)層と変化(主)層の両方に意味的焦点が当たっているからだと思われる。従ってこのタイプのテイル文は(74)とほぼ同じ構造となる。

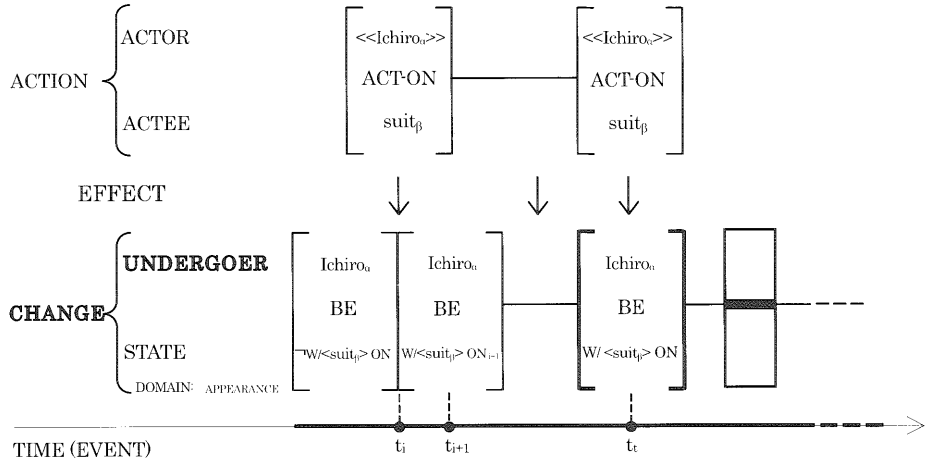
(76) <2C> (行為・変化/完結) [ +再帰 ] 動詞+テイル: 「スーツを着ている」

a. <行為・変化進行(焦点は行為のレベル)>

(≒ 「スーツを着ている最中である」)



b. <結果残存> (≡「スーツを着た状態である」)

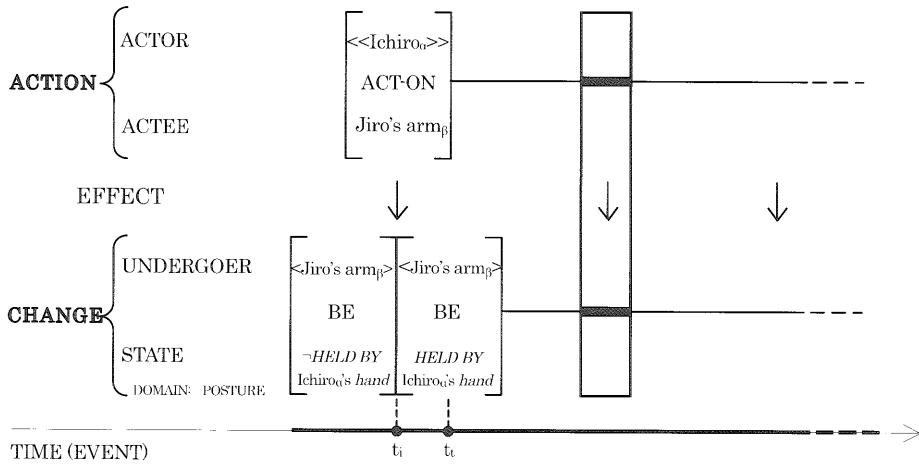


このように<2C>タイプの動詞+テイル形を記述・分析する本稿では、2節で提起した一つ目の問題——「完結動詞（副島（2007）の用語では「限界動詞」）のテイル形が変化の結果ではなく過程を表しているケースをどうするか」という問題——は生じない。

<2C>タイプの動詞とは対照的に、「踏む」のようなく<2D>（行為／完結維持）タイプの動詞は終止点を突破した後も行為主が活動を持続し得る事象を表しているので、そのテイル形は終止／完結点後の局面を前景化することができる。また、この種の行為はたいてい主体自身にも何らか（特に姿勢・体勢）の変化をもたらすので、すぐ上で見た [+再帰] タイプの動詞と同様に行為層と変化層の両方に焦点が当たる。ただし<2D>の場合は、終止／完結点前の局面はたいてい [-持続] なので活動／変移相が前景化されることはない。つまり、<2D>タイプの動詞+テイル形は終止／完結点突破後の活動／結果相における主体の行為進行とそれによる主体／客体の変化結果維持の両方を表すと予測され、それも事実と一致する。本稿はこの解釈を<行為進行・結果維持>と呼び、それを「主体／客体が…した状態を主体が行為を継続することによって維持している最中である」と言い換えられるかでテストする。例えば「一郎が二郎の腕を掴んでいる」は「二郎の腕が掴まれた状態を一郎が行為を継続することによって維持している最中である」とパラフレーズできるのでこのタイプとなる。この種のテイル文の事象構造は次のように記述できる。



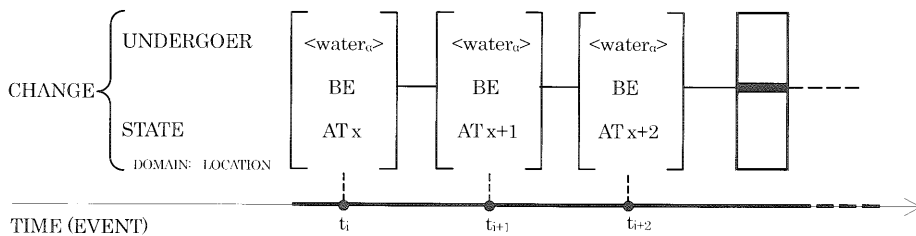
(77) <2D> (行為・変化／完結維持) 動詞 + テイル: 「一郎が二郎の腕を掴んでいる」  
 <行為進行・結果維持>



(28) に挙げた他の<2D>タイプの動詞+テイル形 (例えば「立っている」・「足を踏んでいる」・「光を当てている」・「信じている」等々) もすべてこのように解釈される (ただし、3.3 節で述べたようにこの種の動詞 (特に心理動詞) は比較的<行為性>が低いために<4C>タイプに近いものもある)。この記述・分析によって、本稿は先行研究と違ってこのタイプに属する (7b) 「一郎が二郎の足を踏んでいる」を、(67) に示した<1A>タイプに属する (7a) 「一郎が二郎の肩を叩いている」からはっきりと区別できるので、2 節で提起した二つ目の問題—— (7a/b) の区別に関する問題——も残らない。

ここまで示してきた三つの<2>タイプ (<2A/C/D>) の構造から行為層を除けば (あるいは背景化すれば) それぞれ対応する<4>タイプ (<4A/C/D>) になるが、それを同じように記述・分析すれば三つ目の問題—— (8) と (9) の区別に関する問題——も解消する。まず、「水が流れる」のような<4A> (変化／非完結) タイプは(41) に示したように [+持続] の変移相を持っているので、そのテイル形は単にその局面が前景化されて<変化進行>と解釈される。その構造は次のように記述できる。

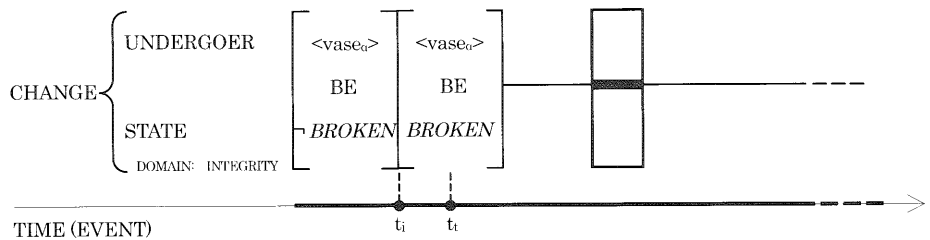
(78) <4A> (変化／非完結) 動詞 + テイル: 「水が流れている」 <変化進行>



< 4A >タイプとして (31) に挙げた動詞のすべてが「流れる」と全く同じように時間と相同的に位置変化するわけではないが、それらのテイル形（例えば「ボートが海を漂っている」・「木々が風で揺れている」・「独楽が回っている」・「ボールが坂を転がっている」等々）も主体の内在的力ではなく他から何らかの力を受けて特定の完結点のない変化が進行中であることを表している。

それに対して「割れる」のように変移相が [- 持続] で結果相が [+ 持続] の < 4C >タイプ—— (32b) タイプ——の動詞+テイル形は、終止点後の局面が前景化されて< 結果残存 >の解釈になる。このタイプは (79) のように構造記述される。<sup>43</sup>

(79) < 4C > (変化/完結) 動詞+テイル: 「花瓶が割れている」 < 結果残存 >

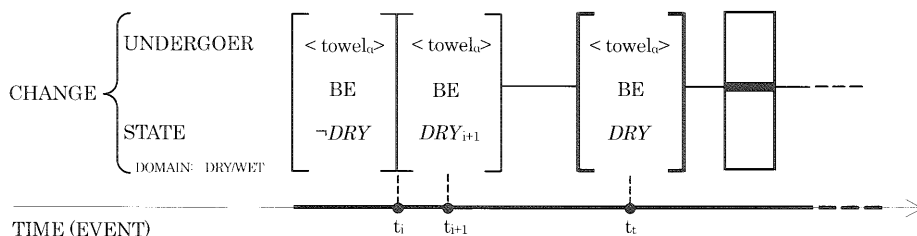


(32b) に挙げた他の動詞のテイル形（例えば「紐が切れている」・「塀が倒れている」・「虫が死んでいる」・「花子が驚いている」等々）もすべて同じように解釈される。

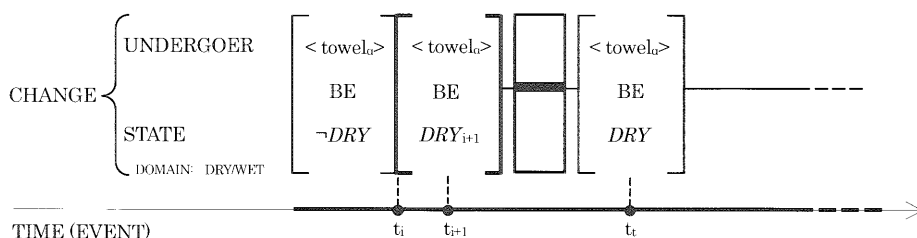
それが (32a) に挙げたような変移相と結果相が両方共 [+ 持続] のタイプになると、前景化し得る局面が二つになるのでテイル文は多義的になる。例えば (39) に挙げた「タオルが乾く」にテイルが付くと、基本的には結果相が前景化されて< 結果残存 >の解釈になるが、文脈や文中の何らかの成分——例えば「少しずつ」や「徐々に」のように変化の進展をプロファイルする副詞的修飾成分——によって変移相が前景化されて< 変化進行 >と解釈されることもあり得る。この種の（広い意味での）二側面動詞のテイル文（例えば「木々が色付いている」・「アイスクリームが溶けている」・「病気が治っている」・「川が汚れている」等々）はすべて同じように振舞う。これらの文が持つ二つの解釈に対応する構造を表したのがそれぞれ (80a) と (80b) である（前節で仮定していた構造 (39) に比べて、段階的完結点/成立点の付加に伴って構造が複雑になっている点に注意）。

(80) < 4C > (変化/完結) 動詞+テイル: 「タオルが (徐々に) 乾いている」

a. < 結果残存 > (≡ 「タオルが完全に乾いた状態である」)



b. < 変化進行 > (≡ 「タオルの乾燥が進行中である」)



二側面動詞の中をさらに細かく見れば、今見た「乾く」タイプに加えて、(19)に挙げた「(ガソリン価格が) 上がる」のように (特別な文脈がない限り) < 変化進行 > と < 結果残存 > の解釈がどちらも同じくらい自然にできるタイプもある。この二タイプの解釈上の違いは、前者には明確で絶対的な完結点/成立点——例えば「乾く」なら変化主が完全に乾いた時点——があるのに対して後者にはそれが無いという達成基準の絶対性/相対性の違いに帰されるであろう。そしてその違いは、ちょうど上で見た層レベルの焦点の違いのように、相/局面レベルの焦点の違いとして捉えられる。つまり、明確な完結点のある「乾く」タイプでは基本的に< 結果相 > に焦点が当たっているが、「上がる」タイプではそのような偏りがないため、テイルによって前景化されやすい局面がそれに応じて異なると考えられる。

また、今述べたのはあくまで動詞の語彙的指定によって決まる側面のみであり、文全体の焦点の位置は動詞以外の成分によって変わり得るということをいくつか新しい例を挙げてさらに強調しておこう。例えば、上に挙げた「徐々に」のような進展過程を表す副詞だけでなく、(81)に挙げた「ひらひら (と)」や「ゴロゴロ (と)」のような移動の様態を表す副詞が< 4C > 動詞+テイル形に付いても< 変移相 > に焦点が当たるが、様態副詞の中でも「ポトリと」や「ドスンと」のように移動の結果の地点における接触 (擬) 音を通して移動物の属性を表すタイプの修飾成分が付いた場合は、(82)に示したようにむしろ< 結果相 > の方に焦点が当たり、< 結果残存 > として解釈されやすくなる (特に (82) は移動物の「財布」や「テレビ」が落ちる場面を全く

見ず、後から結果状態のみを見てそう言えることに注意)。

- (81) a. 木の葉がひらひら (と) 落ちている。 <変化進行>  
 b. 丸太がゴロゴロ (と) 落ちている。
- (82) a. 財布がポトリと歩道に落ちている。 <結果残存>  
 b. 地震があったので急いで家に帰ったらテレビがドスンと床に落ちていた。

さらに、副詞以外にも焦点をシフトさせる役割を果たし得る成分がある。例えば、(83) に示したように移動の経路が目的語として現れているケースや、複合動詞の第一要素が移動の様態を表す動詞であるケースでは、やはり<変移相>に焦点が当たる。

- (83) a. 橋を渡っている。(cf. 駅に着いている。) <行為・変化進行>  
 b. 丸太が坂を転がり落ちている。 <変化進行>

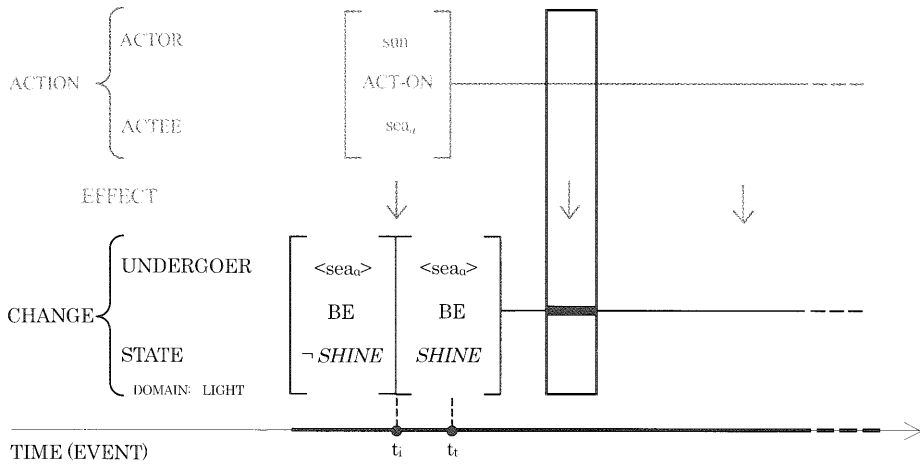
一方、(84) の「水滴」のように格成分が移動結果の段階を語彙的に指しにくいケースでは——例えば水滴が水たまりに落ちたらもはや「水滴」とは呼べないので——<変移相>志向になり、それに「雨樋から」・「ポタポタ (と)」・「滴る」のように始動相や移動の様態を表す副詞 (句)・動詞が付けばさらに強く移動過程の側面に焦点が当たる (「ポタポタ(と)」の場合はそれに加えてマクロレベルの反復性にも焦点が当たる)。

- (84) a. 水滴が (雨樋から地面の水たまりに) 落ちている。 <変化進行>  
 (cf. 財布が落ちている。)  
 b. 水滴が雨樋からポタポタ (と) 滴り落ちている。

では次に<4D> (変化/完結維持) タイプに移ろう。「光っている」のようなく4D>タイプの動詞+テイル形は、(77) に示した<2D>タイプとほぼ同じ構造を持っているが、行為性が低いので<行為層>は背景化し、焦点が変化層のみに当たっていると考えられる。従って、行為主が直接的スコープから外れ、変化主の状態の維持が前景化された<結果維持>の解釈になる。

(85) < 4D > (変化／完結維持) 動詞+テイル：「(日の光で) 海が輝いている」

<結果維持>



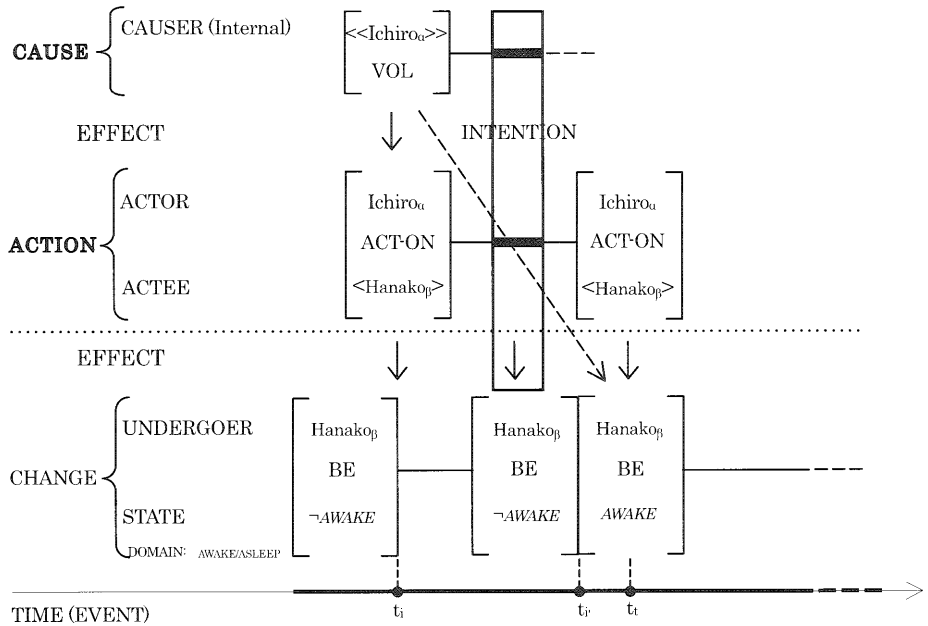
このタイプは注 30 で述べたように< 2D >タイプとの線引きが難しいが、(33) に挙げた他の< 4D >動詞のテイル形（例えば「水が光っている」・「炎が燃えている」・「町が霞んでいる」・「月が陰っている」等々）もほぼ同じように解釈される。

このように、本稿は先行研究と違って動詞+テイル形が (i) <変化進行>になるケース（例えば (78) 「水が流れている」）、(ii) <結果残存>の解釈になるケース（例えば (79) 「花瓶が割れている」）、(iii) その両方になり得るケース（例えば (80) 「タオルが（少しずつ）乾いている」）、そして (iv) <結果維持>になるケース（例えば (85) 「海が輝いている」）をすべて明示的に記述し分けることができるので、2 節で指摘した三つ目の問題—— (6), (8), (9) の違いに関する問題——も生じない。その上、先行研究ではほとんどふれられていなかった相レベルの焦点シフトに関する観察 ((81) ~ (84)) も併せて捉えることができるという利点もある。

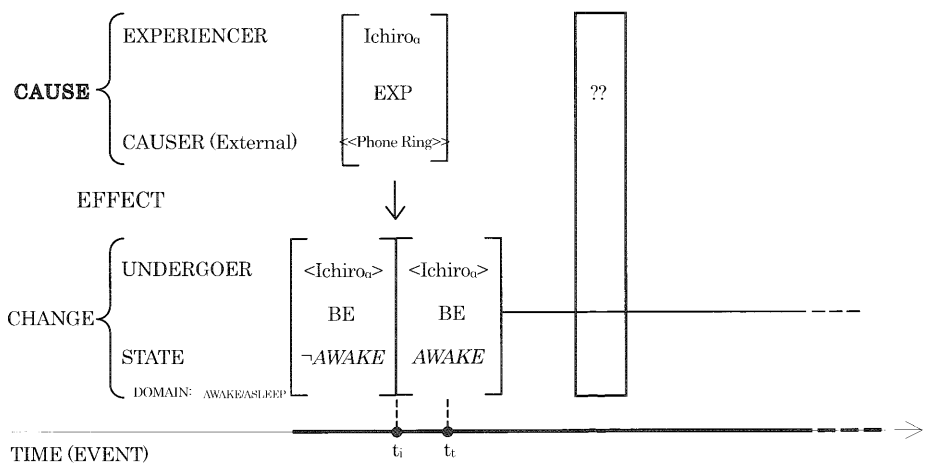
例文 (10) で指摘した先行研究の四つ目の問題—— (10a) 「一郎が花子を起こしている」と (10b) 「?? 電話のベルが花子を起こしている」の違いに関する問題——も本稿では解消する。具体的には、(10a) は本稿の分析では (68) とほぼ同じ< 1B >タイプとなるので< 行為(・変化)進行>と解釈されると正しく予測される（厳密には、(68) の「靴を磨く」という行為によって引き起こされる変化は漸次的だが人が起きるのはたいてい瞬時的なので、「起こす」の場合は< 行為層>の始動点と< 変化層>の始動点異なる可能性があることを考慮し、下に挙げる構造は (68) より少し複雑になっている）。それに対して、(10b) は< 6C >タイプとなり、それはいわゆる「オンセット使役」であるため< 原因層>には時間的幅がない上に、< 行為層>はそもそも初めから構造に含まれていないので、テイルによって前景化される層／局面がないことになる（ちなみに使役事象で焦点が当たって

るのは<原因層>と考えられるので、<変化層>の時間的幅は関係ない上に、そもそもその<変移相>にも上記の理由で幅はない。だからこそテイルの付いていない文(10)「一郎が花子を起こした」は悪くないのにもかかわらずテイルが付くと容認度が下がるのである。そして本稿はそれらを次のように構造表示することによって両者の違いを明示的に示すことができる。

(86) < 1B > (行為/完結意図) 動詞+テイル:「一郎が花子を起こしている」  
 < 行為(・変化)進行 >

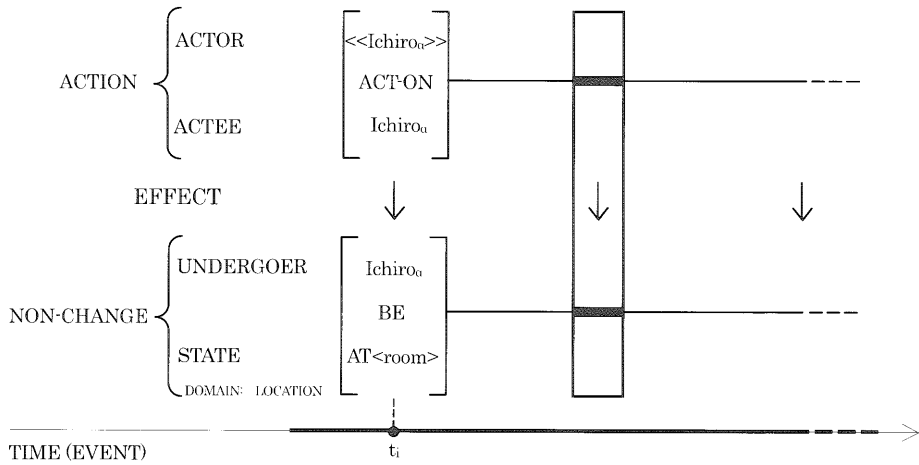


(87) < 6C > (原因/完結) 動詞+テイル:「電話のベルが一郎を起こしている」  
 < 解釈: ?? >

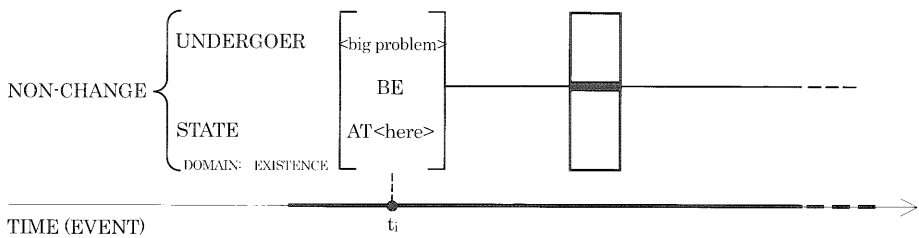


ここまで動態動詞+テイル形を見てきたが、前節で提案した事象構造を適用すれば<3>(行為・状態)タイプや<5>(状態)タイプのテイル文も明示的に記述できる。例えば(53)・(54)で提示した<3A>・<5A>タイプ((行為・)状態/非完結)のテイル文はそれぞれ次のような構造を持ち、<(行為・)状態進行>と解釈される——<状態進行>は「主体/客体の状態(または位置/姿勢など)が初期相のまま変化せずに経過している最中である」と言い換えられるかどうかでチェックできる。

(88) <3A>(行為・状態/非完結)動詞+テイル:「一郎が部屋でじっとしている」  
 <行為・状態進行>



(89) <5A>(状態/非完結)動詞+テイル:「ここに大きな問題が存在している」  
 <状態進行>

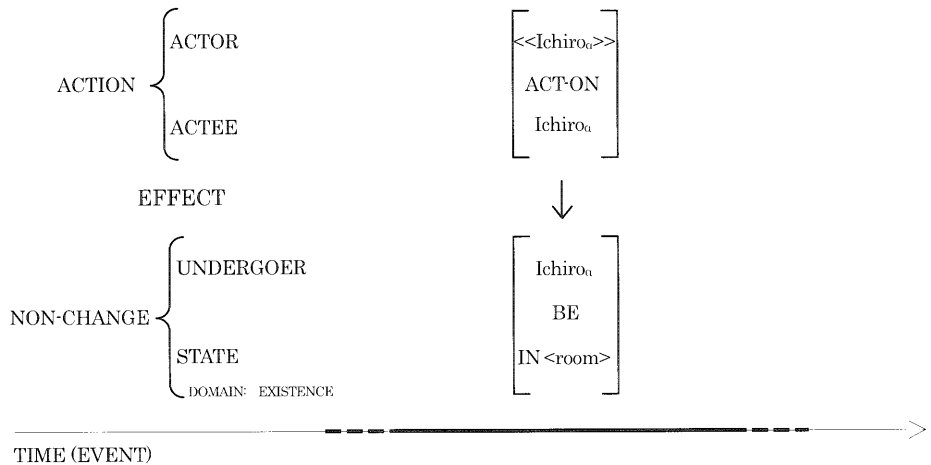


(29) と (34) に挙げた他の<3A>・<5A>タイプの動詞+テイル形の多く(例えば「保っている」・「守っている」・「意味している」・「異なっている」等々)も同じように振舞う。また、「ある状態が変化せず際限なしに続いている」という状況はモノの属性であることが多いので、このグループに属する動詞のテイル形は<属性所有>を表すためによく用いられ、中には金田一(1950/1976)の第四種動詞(例えば「優

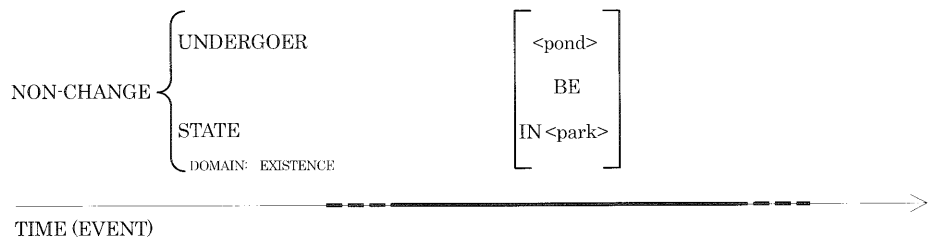
れる』)のように常にテイル形で属性叙述のためだけに使われる(3.3節で述べた意味での)形容動詞もある。

これに対して[-限界]タイプ<3E>・<5E>になると、(55)・(56)——下にそれぞれ(90)・(91)として再録——に示したように、定義上局面を分割する境界がないため成立点とみなすことができる時点もないことになり、(65)の規定によりその種の事象を表す動詞にはテイルを付けることができないと正しく予測される。

(90) <3E> (行為・状態/非限界) 動詞+テイル:「\*一郎が部屋にいてる」



(91) <5E> (状態/非限界) 動詞+テイル:「\*公園に池があつてる」



このように、本稿の分析では静態動詞をテイルが付けられるタイプ(例えば「じっとする」や「存在する」と付けられないタイプ(「ある」や「いる」)に正しく下位分類することができるので、2節で指摘した五つ目の問題も生じない。

ここで、(1e)「この道は市役所前で左に曲がっている」のようないわゆる“単なる状態”用法は今見た<状態進行>や<属性所有>用法と全く同じではないことに注意されたい。(1e)のような文は確かにモノの恒常的状态を描写しており、その点では「花子はおっとりしている」のような文と似ているが、「曲がる」は明らかに変化を表す<4>タイ



プの動詞であり、<5>タイプの状態動詞と同列に扱われるべきではない。(1e) のような用法はむしろ Langacker (1987)・Talmy (1996)・Matsumoto (1996) 等が指摘している「主観的／虚構移動 (subjective/fictive motion)」を通じた状態／属性叙述の一例とみなすべきである。その証拠に、道が曲がっている方向を「左／右」のような相対的方向指示語を使って修飾する際には、必ず話者が想定している移動経路から見た方向になる——例えば「左に曲がっている」道は逆の方向から見れば「右に曲がっている」とも言えるが、どちらの表現を使うかは話者の主観的視点次第である。

最後に、(1d)「二郎は一度イギリスに留学している」のようないわゆる<経験／パーフェクト>用法について考えてみよう。本稿はここまで単一の事象の内部を細かく縦横(層と相)に分割し、テイルの意味・機能を (<(長期的)反復／習慣>のケースを除いて) その中の一局面に関係づけてきたが、(1d) のようないわゆる<経験／パーフェクト>用法でテイルが前景化しているのは事象内部の一局面というよりはむしろ、事象全体の後に続く局面と言える。その局面を前景化することによって、その出来事を経験することによってもたらされる (と一般に考えられている) 効果を通して主体を特徴づけることができる。例えば (1d) のような文は、通常主体を「留学」という経験がもたらす (と一般に考えられている) 効果——例えば「語学力が向上する」や「国際感覚が身に付く」等——を通して特徴づける時に用いられるし、そのような意味に解釈される。「この車は一度事故っている」や「三郎は二度も離婚している」のような文も同様に、動詞が表す出来事の経験を通して主体を特徴づけている。つまり、この種のテイル文が叙述しているのは経験そのものというよりはむしろ、その経験が主体にとって一種の属性となっているということである。だからこそ、この種の文の主語は、属性叙述文の主語が一般にそうであるように、たいてい主題マーカーの「は」でマークされるのである。以上の理由で、(1d) タイプのテイル文は<経験／パーフェクト>という独立した用法とみなすよりはむしろ、すぐ上で見た<属性所有>用法の一種とみなすべきであると思われる。ただし、より広い意味の<経験／パーフェクト>を表すテイル形がすべて<属性所有>用法とみなせるわけではない。例えば、「花子が家に電話した時、一郎はすでに帰宅していた」のようなテイル文は、単に主文が表す事象(一郎の帰宅)が基準時(花子が家に電話した時)よりも前に完了していたことを表しているだけで、主文の主体(一郎)の属性を表しているわけではない。<sup>44</sup>従って、用法としては<経験／パーフェクト>と<属性所有>の両方を認める必要がある。それら二つと<(長期的)反復／習慣>の三つの用法は、いずれも「成立点突破後の一局面」という概念を通常一つの事象とみなされる範囲を超えた局面にまで拡張して適用すれば(65)の規定と整合していると言えるが、それらはほとんど動詞の内在的意味と関係がない(または関係があっても属性叙述をする形容詞に近い)ので、論文の冒頭に述べたように本稿の射程からは外れる。

以上、本節では3節で提案したきめ細かい動詞分類と並行事象構造に基づき、ベースとなる動詞に(65)で提案したテイルの意味を重ね合わせると、2節で指摘した先行研究の問題点をすべて解決しながらテイル文の振る舞いを明示的に記述・説明できることを実証した。

## 5. おわりに：まとめと今後の研究の方向性

本稿で詳しく記述・説明したテイル文の用法と動詞のタイプは次のようにまとめられる。

| (92) テイル文の用法      | 動詞のタイプ      | 具体例                |
|-------------------|-------------|--------------------|
| a. 行為進行           | < 1A >      | (66) 踊っている         |
| i. 行為主焦点          | < 1A(能動態) > | (75a) 褒めている        |
| ii. 被行為主焦点        | < 1A(受動態) > | (75b) 褒められている      |
| b. (短期的) 反復       | < 1A >      | (67) 太鼓を叩いている      |
| c. 行為(・変化)進行      | < 1A >      | (69) 岸へ泳いでいる       |
|                   | < 1B >      | (68) 靴を磨いている       |
| d. 行為・変化進行        |             |                    |
| i. 行為／主体変化        | < 2A >      | (70) 山を登っている       |
| ii. 行為／客体変化       | < 2A >      | (71) 水を流している       |
| iii. 行為／客体変化      | < 2C >      | (73) 窓を閉めている       |
| iv. 行為／客体変化(変化焦点) | < 2C(受動態) > | (74a) 窓が閉められている    |
| v. 行為／主体変化(再帰)    | < 2C >      | (76a) スーツを着ている     |
| e. 行為進行／結果維持      | < 2D >      | (77) 腕を掴んでいる       |
| f. 結果維持           | < 4D >      | (85) 海が輝いている       |
| g. 変化進行           | < 4A >      | (78) 水が流れている       |
|                   | < 4C >      | (80b) タオルが徐々に乾いている |
| h. 結果残存           |             |                    |
| i. 主体変化(再帰)       | < 2C >      | (76b) スーツを着ている     |
| ii. 客体変化          | < 2C(受動態) > | (74b) 窓が閉められている    |
| iii. 主体変化         | < 4C >      | (80a) タオルが乾いている    |
| i. 行為／状態進行        | < 3A >      | (88) じっとしている       |
| j. 状態進行           | < 5A >      | (89) 問題が存在している     |

これら十種類の用法に、上記の理由で本稿では詳しく論じなかったが、(k) <(長期的)

反復／習慣> (例えば「毎朝公園を走っている」)、(l) <経験／パーフェクト> (例えば「すでに帰宅している」)、(m) <属性所有> (例えば「花子はおっとりしている」)の三用法が加わる。これらの用法は一見多様だが、全く異質のものがただ寄せ集められているわけではない。それらの間には一貫した共通点があり、それがまさに(65)に示したテイル自体の基本的意味・機能である。一方、多様性の部分は主にテイルが付いている動詞の側から生み出されており、それを細かく明示的に記述し分けるには3節で提案したきめ細かい動詞分類と新しい事象構造が必要となる。本稿ではテイル文という個別言語の個別現象(の一部の用法)の記述に最低限必要な側面に焦点を当てたが、今後それ以外の側面も考慮に入れながら動詞分類と事象構造をさらに精密化することによって、様々な言語現象の記述・説明が可能になる見込みがある。その可能性を示すために、最後にその方向の研究の一例を簡単に紹介しておこう。

本稿はテイル文に焦点を当て、その意味を詳しく記述してきたが、そのカギとなる要素「テイル」が前景化するのは事象の成立点後の局面であるために、本稿の議論はほとんどその部分に集中してきた。しかし、多くの動詞が語彙的にカバーしている意味範囲は成立点前の局面にも及んでおり、3節で仄めかされたように実はその局面の語彙的指定が興味深い経験的帰結をもたらすこともある。そしてさらに面白いことに、日本語にはその局面を前景化するアスペクト表現があり、それはちょうどテイルと鏡像関係になっている。しかもその関係は成立点が行為層と変化層で異なるタイプの動詞文でも同じように見られる。

そのアスペクト表現とは「かけ(の)」であり、それは次のように使われる。

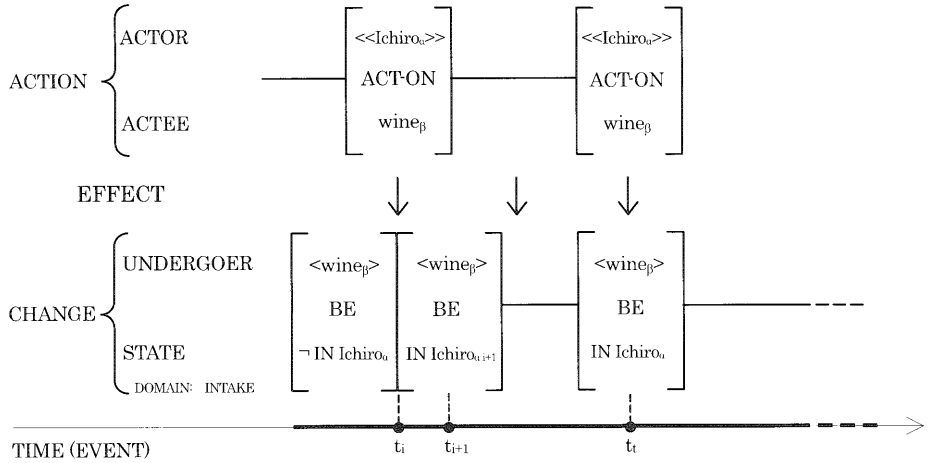
- (93) a. 一郎がワインを飲みかけた。  
b. 飲みかけのワイン

「かけ」が(a)タイプの形式で用いられると、たいてい動詞が表す変化が全く達成されなかったと解釈される。(93a)の文も普通「一郎がワインを飲みかけたが——例えばグラスを取って口元まで持っていったが——飲まなかった」と解釈される。一方、(b)タイプの形式で用いられると、たいてい動詞が表す変化がある程度達成されたという意味に解釈される。例えば(93b)はグラス(またはボトル)のワインがすでにある程度飲まれ、一部だけ残っている状態を指すのに使われる。「かけ」構文に関してはいくつかの先行研究があるが(例えばKishimoto 1996, Toratani 1998, Tsujimura and Iida 1999, 岸本 2000, 三原 2004)、(93a/b)の解釈の違いを説明できるような分析はまだ提案されていない。しかし本稿の動詞分類と事象構造を適用すればその違いをうまく捉えられる見込みがある。

まず、本稿の分類では「飲む」のような飲食動詞は単独ではなく2Aタイプに属す

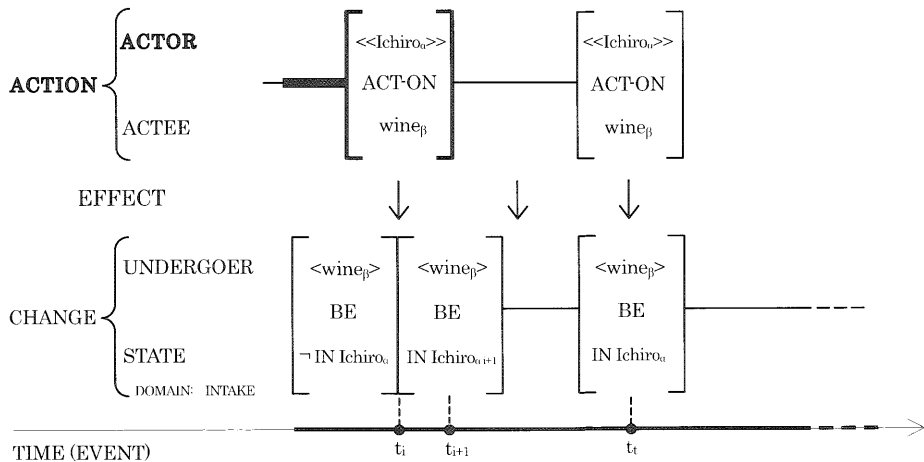
るが、説明の便宜上ここでは飲むモノを<グラス一杯のワイン>と限定して考えると、「一郎がワインを飲む」は次のような二層構造となる。

(94) 「一郎がワインを飲む」



これに「かけ」が付くと成立点前の局面が前景化される。以下その局面を金田一(1955/1976)の用語を借りて「将然相」と呼ぼう。<sup>45</sup>そして、4節で述べたようにこの種の能動態他動詞文が表す事象の意味的焦点は行為(主)層で、成立点は行為の始動点(厳密には始動点直後の時点)となる。従って、「一郎がワインを飲みかける」の構造は次のようになり、行為層の始動点前の局面が「かけ」によって前景化されることになる(そこでは前景化された将然相が太線で表されている)。

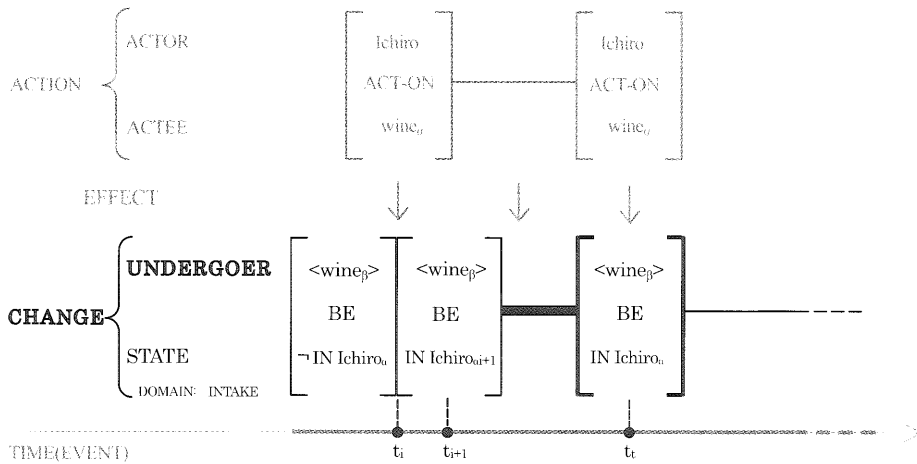
(95) 「一郎がワインを飲みかける」



こうして (93a) タイプの文は「飲む直前までの行為をした」という解釈になると考えられる。

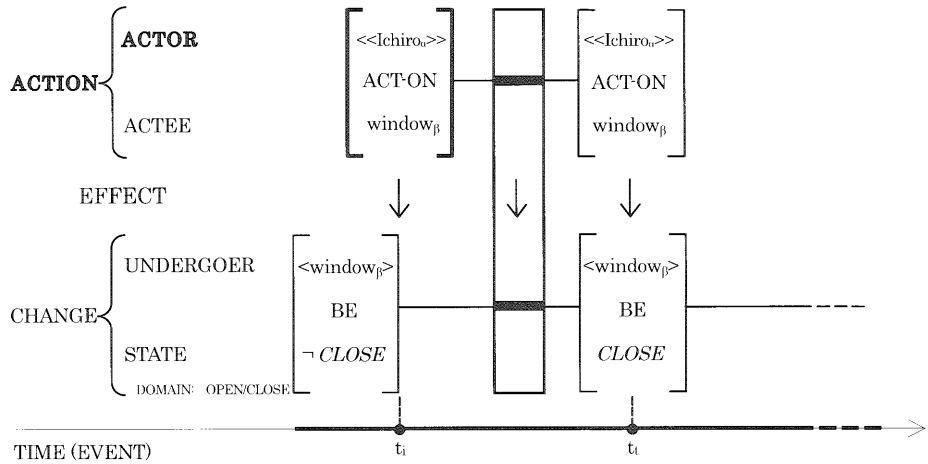
一方、(93b) タイプの表現は行為主の行為ではなくむしろ変化主<ワイン>の変化に焦点を当てているので、成立点はワインが消費された時点——最も明確なのはグラスが完全に空になった時点——となる。従って、それに「かけの」が付くと (96) に (ポイントだけを) 示したようにその前の局面が将然相となり、そこが前景化されるので、グラスのワインが途中まで飲まれた段階と解釈される (ここでのポイントは行為・変化事象のどの局面がアスペクト表現「かけ (の)」によって前景化されるかであるためそれ以外の部分は単に背景化しているが、厳密にはもちろん時制文の述部と連体修飾成分の違いも明示的に表示されていなければならない)。

(96) 「飲みかけのワイン」

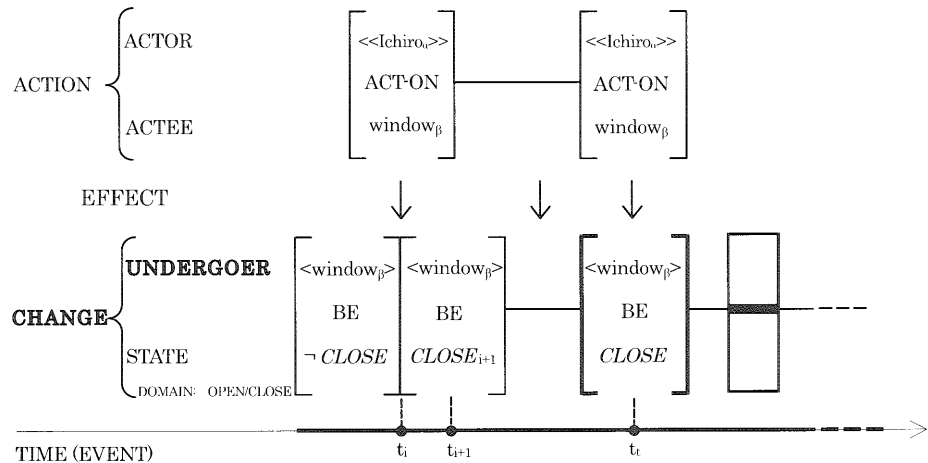


ここで、(93a/b) の意味を表している二つの構造 ((95)・(96)) において「かけ」が前景化している局面が、焦点位置も含めて同じタイプの事象構造 ((73)・(74b) ——下に (97)・(98) として再録——) においてテイルが前景化している局面と、成立点を境にしてちょうど鏡像関係になっている点に注目されたい。つまり、(73/97) と (95) はどちらも行為(主)層に焦点があり、始動点が成立点となっている。そしてテイルはその成立点後の局面 (活動相/変移相) を前景化しているのに対して、「かけ」はその前の局面 (将然相) を前景化している。同様に、(74b/98) と (96) はどちらも変化(主)層に焦点があり、完結点が成立点となっている。そしてテイルはその成立点後の局面 (結果相) を前景化しているのに対して、「かけ」はその前の局面 (将然相 = 変移相) を前景化している。

(97) < 2C > (行為・変化/完結) 動詞+テイル:「一郎が窓を閉めている」  
 < 行為・変化進行 >



(98) < 2C > (行為・変化/完結) 動詞 (受動態) + テイル:「窓が閉められている」  
 < 結果残存 > (≡ 「窓が閉まった状態である」)



この分析は次のような例によっても支持される。

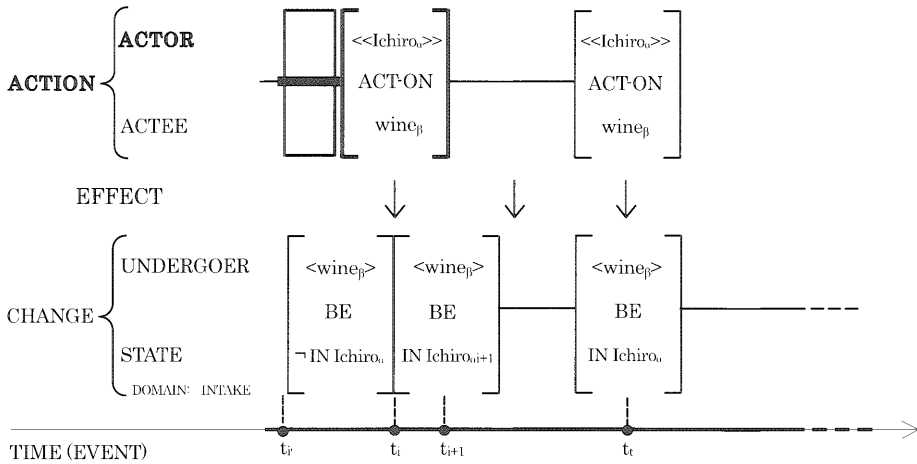
(99) 一郎がワインを一本まるまる飲みかけた。

この文は (93a) と同じ能動態の他動詞文だが、「一本まるまる」という副詞的修飾成分 (または同様の意味の数量表現) が付くことによって焦点が変化(主)層に移り、それに伴って成立点が完結点にシフトすると考えられる。つまり構造的には (95) より

もむしろ (96) に近くなり、「かけ」によって前景化される局面は変移相になる。従って (93a) とは違って「途中まで飲んだ」と解釈されると予測され、それは事実と一致する。

ここで、「かけ」とテイルが鏡像関係になっているという分析は、「ワインを飲みかけている」のようにそれらが共起できるという事実と矛盾するとの指摘があるかもしれないが、それは全く矛盾しない。なぜなら、「かけ」とテイルはアスペクトのレベルが異なるからである。「飲みかけている」のように両者が共起する場合は、必ず「かけ」が先に動詞と結合し、その複合体にテイルが付く。そして、動詞に「かけ」が付いた段階——「飲む」から「飲みかける」になった段階——で事象全体の始動点が将然相の左にずれ、テイルはその新しい始動点を成立点としてその後の局面を前景化する。従って、結果として両者は同じ局面を前景化する補助動詞として共起でき、「飲みかけている」は「飲む直前までの行為をしている最中である」という解釈になるのである。それを構造的に示したのが (100) である（ここでは「かけ」の付加によって生まれた新しい始動点を  $t_i$  と表示している）。

(100)「一郎がワインを飲みかけている」



論旨をまとめると、(93) のような「かけ」構文の解釈は事象内の二つの局面——始動点の前局面と完結点の前局面——のうちどちらを将然相とみなすかによって決まり、さらにそれはどの時点を事象の成立点とみなすかによって決まる。そして、事象の成立点はテイルの場合と同様に並行事象構造のどの層に意味的焦点が当たっているかで決まる。テイルと「かけ(の)」の違いは、テイルが成立点後の局面を前景化するのに対して「かけ(の)」はその前の局面を前景化する点にある。その意味でそれらはちょうど鏡像関係にあると言える。ただし、それらはアスペクトのレベルが異な

るので (100) のように共起でき、その際はそれらが前景化する局面が一致する。

このように、3節で提案された動詞の動力学／アスペクト分類と並行事象構造を応用することによってテイル文以外のアスペクト現象もうまく記述・説明できる見込みがあり、それは逆にそうした経験的現象の分析を可能にしている理論的仮説・道具立ての必要性と重要性を実証することになる。また、それらは様態副詞や結果副詞／二次述語のような副詞的修飾成分の分析にも適用できる見込みも十分あり、それがさらにそれらの汎用性を示すことになる（その方向の研究は宮腰（近刊）を参照）。従って本稿は、テイル文という個別言語の個別現象の意味的分析を通して、動詞分類と事象構造の精密化という一般文法理論の課題の克服へ向けて踏み出した一つのステップと位置付けることができる。

### 註

<sup>1</sup> ここに挙げたのは本稿で言及される先行研究の一部であり、言うまでもなくテイル文に関する研究の包括的な文献リストではない。戦前から金田一（編）（1976）までの研究史は高橋（1976）を、それ以降最近までの研究に関しては須田（2003, 2007）・副島（2007）等を参照。

<sup>2</sup> 副島（2007）では言及されていないが、仁田（1982:38）もほぼ同じような主張をしている。そして、仁田（1982）は〈動作進行〉と〈結果残存〉に加え、(1d) のような〈経験〉用法にもこの分析を適用しているので、その点に関しては副島（2007）より一歩進んでいると言える。

<sup>3</sup> ただし、このタイプの動詞は「割れる」や「壊れる」のような典型的限界／完結動詞ではないため、アスペクトに関していくつか特異な振る舞いを見せる。この点に関しては3.2節と4節で詳しく論じる。

<sup>4</sup> 工藤（1995:73-78）の動詞分類リストには「じっとする」は入っていないが、おそらく「非限界主体動作動詞」か「静態存在動詞」のどちらかに属すると思われる。しかし、前者とみなせば「いる」との意味的共通点（主体の自己駆動的行為による静的状態の持続）が捉えられないし、後者とみなせば「いる」との相違点（テイル形の可否）が捉えられなくなる。ちなみに、藤井（1966/1976:101-02, 110-11）は「今じっとしている」のような用法を〈持続〉と呼んで「今読んでいる」のような〈動作の進行〉用法と区別しながら同時に両者の類似点も指摘しているし、森山（1983:4-11）も〈過程持続〉と〈維持持続〉という概念で同様の区別をしているので、この点では工藤（1995）（や副島（2007）を含めた他の先行研究）よりも一歩先に進んでいると言えるが、上で述べた「いる」との共通点と相違点を説明できるほど細かい動詞分類までには至っていない。

<sup>5</sup> 事象の〔±行為〕の線引きは、言語とは独立の一般的な認知／神経科学的テストによってできれば理想的なのだが、残念ながら（筆者の知る限り）まだその種のテストは発見・開発されていない。個別言語の統語的テストも上述のようにまだ確定的な結論を出せる段階には至っておらず、今後さらに詳しい調査・研究が必要である。この点については次に取り上げる〔±変化〕と〔±原因〕——さらに言えば変化の〈領域〉の線引き（注6と3.3節を参照）——に関しても同様である。

<sup>6</sup> ちなみに、(i)–(iii) のように「一度～すると元には戻らない」と言えるかどうかで結果を伴う変化があるかどうかをテストしている先行研究もある。

(i) # 一度 {走る／歩く／笑う／泳ぐ} と元には戻らない。

(ii) 一度 {溶ける／腐る／壊れる／沈む} と元には戻らない。

(iii) # 一度 {困る／あきれる／喜ぶ／苦しむ／イライラする} と元には戻らない。



(吉永 2008: 127; 例文の順序と表記法を一部改変)

このテストを採用すれば (iii) の「困る」や「あきれる」のような心理動詞が表す事象は (i) の行為事象と同様に [-変化] となるが、このテストは<変化性/結果性>というよりむしろ変化結果の<永続性>のテストと言えるので、本稿は本文で導入したテスト「…したが<領域>は全く変わらなかった」を採用する。こちらのテストでは、次に示すように変化をキャンセルすると矛盾するので (iii) タイプの心理動詞が表す事象は [+変化] と分類されることになる (この点は後ほど再びふれる)。

(iii) # 花子はその知らせを聞いて |困った/あきれた/喜んだ/苦しんだ/イライラした|  
が気持ちは全く変わらなかった。

ただし、我々言語話者が語彙的要素の篩分けに利用している<領域>は、特に形容詞の類型論の分野で少し研究が進んでいるが (例えば Dixon 1977/1982, Dixon and Aikhenvald 2004, 八亀 2008 等を参照)、動詞の分野では (筆者の知る限り) まだほとんど解明されていない。本稿では後ほど暫定的にいくつかの領域に言及して事象/動詞の分類をするが、(i) そもそもどの領域が当該言語 (あるいはヒトの言語一般) にとって有意義な領域なのか、(ii) それがかどのように決まるのか ((a) 生得的に決まっているのか、(b) 子供が資料から習得するのか、(c) そうであればどのように習得するのか)、いずれにしろ、(iii) そもそもある領域が有意義であるという判断を我々言語学者はどのような証拠を基に下せるのか、等の問題も今後の重要な研究課題である。

<sup>7</sup> 影山 (1996: 4 章) が鋭く指摘しているように「木が植わる」や「大金が儲かる」のようなタイプでは行為主が必ず想定されるが、背景であることには変わりがない。また、上で指摘したように「自動ドア」のような場合は自己駆動力があるので (典型的ではないが) [+行為] となる。

<sup>8</sup> 厳密に言えば、(後ほどふれる例外的ケースを除けば) たいてい [+意志的] 原因主と行為主は同一なので、実質的にこれらのテストは純粋な<意志性>というよりはむしろ複合的特性<意志性+行為性>のテストとなる。

<sup>9</sup> それらに変化がある言語もあり (例えばラサチベット語 (Delancey 1985) やドラヴィダ語族のカナダ語 (Bhat 1991) など)、そうした言語の動詞文を分析するには明らかに [+原因/意志] を弁別的な素性/値とみなす必要がある。また、周知の通り日本語 (や他の多くの言語) でも埋め込み文内では (例えば「一郎が二郎|を/に|走らせた」のように) 意志性の有無が格体制に影響を及ぼすことがあり、その種の現象を扱う際にはもちろん [+原因/意志] に言及する必要がある。ちなみに、<意志性>の有無によってある種の構文の文法的振る舞いや意味解釈が変わると述べている先行研究がいくつかあるが、後ほど示されるようにそれらに直接影響を与えるのはたいてい<意志性>というよりはむしろ<行為性>の有無や層レベルの焦点の位置——特に<行為層>と<変化層>のどちらに意味的焦点が当たっているか——である。

<sup>10</sup> [+自己駆動] のモノが自分で行為を遂行せず、単に変化の外的原因となっている事象もあり得る——介在文が表す事象はまさにそのタイプである——ので、厳密に言えば主語を [+自己駆動] の名詞句に換えたからと言って必ずその文が表す事象が [+行為] となるわけではない。例えば、「二郎が一郎を驚かせた」という文は「二郎が直接一郎に働きかけて、その結果一郎が驚いた」という事象の他に、「二郎は一郎に対して何もしなかったが、たまたま二郎がきっかけで一郎が驚いた」という事象に対しても使うことができる。

<sup>11</sup> 文末の表現が「である」ではなく「であり得る」となっているのは、腕を掴んだ後にその状態を維持できるというだけで維持しなければならないわけではないからである (例えば一瞬だけ掴んですぐ離しても「掴んだ」と言える)。後ほど指摘されるように、このような随意的持続性はほとんどの変化動詞が表す事象にはなく、それがいくつかの経験的帰結をもたらすことになるので、この一見些細な特徴も正しく表し分ける必要がある。

<sup>12</sup> 厳密に言えば、それ以外のタイプがわずかに入っているが、次に述べる問題が残るとい

点は変わらない。

<sup>13</sup> 影山 (1996 : 68-69) は<行為>を表す関数 (ACT (ON)) について論じる際に「継続活動というアスペクト特性を重視している (p.68)」と述べてはいるが、そこで挙げられている例には継続的行為 (例えばwork, quarrel, talk) と瞬間的行為 (hit, slap, kick) が混在——さらに言えば上で挙げた完結点前が瞬間的で完結点以降が継続的であり得るタイプ (touch, seize, kiss) も混在——しており、<行為>レベルの持続性が正しく捉えられているようには見えない。

<sup>14</sup> 上述のように、アスペクトとは出来事の時間的展開そのものではなく、その把握の仕方 (を表す文法範疇) なので、<限界性>に関しても問題なのは「我々がその出来事をどう把握するか」という概念化のレベルの区別であって、外界の出来事そのものの区別と (相関関係はあるが) 全く同じではないことに注意。例えば、すぐ次に述べるように本稿では「踊る」や「泳ぐ」を (特に修飾語句による時間・空間の限定がない限り) 終止点の側で限界づけられてないタイプの事象とみなすが、現実にはそれらの行為が終わりなくなされるわけではもちろんない。

<sup>15</sup> ここでは括弧を使った簡略表示で済ませるが、3.4 節で<意図(あるいは目的)>も事象構造の中で構造的に表示される。

<sup>16</sup> 二つの下位素性 (<完結意図性>と<完結維持性>) は値が有標 (プラス) の場合だけ明記し、無標の場合は文字通り標記しない。

<sup>17</sup> 厳密に言えば、局面レベルの持続性は程度問題であり、プラス/マイナスの判断が難しいケースも少なくないし、同じ出来事でも視点の取り方によって変わることもある。また、結果相のレベルは特に複雑なので、その内部局面をさらに細かく分割する必要もある。さらに、ある種のアスペクト表現の記述・説明には初期相に関する語彙的指定も必要になる。これらの問題はすべて後ほど取り上げられるが、ここでは除外しておく。

<sup>18</sup> 「基本的には」という限定副詞が付けてあるのは、後ほど示されるように「叩く」タイプの瞬時的打撃行為でも実はミクロ/マクロのレベル区分が必要であり、レベルによって持続性が変わり得る上に、レベル区分をしなくても瞬時的行為が [+持続] と解釈し得る非典型的状況——例えば叩く行為を撮影したビデオをスローモーションで見ている状況——があるからである (この点に関しては金水 2000 : 23 や Langacker 2008 : 156 を参照)。

<sup>19</sup> ここで問題の特性を直接的に「アスペクト特性」と呼ばないのは、動詞の表す行為や変化の持続性などはそう言っても差支えないが、例えば名詞の表すモノのサイズなどは間接的に持続性の決定に影響を与えてはいるがそれ自体がアスペクト特性であるとは (少なくとも上で規定した定義では) 言えないからである。

<sup>20</sup> この持続性の決定過程に関する問題は、事象とそれを構成している要素とのアスペクトに関わるある種の相同性という点で、Verkuyl (1972) 以降数多くの研究者によって議論されてきた完結性の決定過程の問題と同類なので、それに関する先行研究 (中でも特に、後ほど 3.4 節で取り上げる Jackendoff (1991, 1996) の構造保持束縛理論 (structure-preserving binding theory)) の洞察に解決へのカギがあるように思われる。

<sup>21</sup> ただし、これ以外の点 (<他動性>・<変化性>・<完結性>など) はすべて「窓を閉める」との共通点の方が多く上に、すぐ後で述べるミクロレベルの行為の<離散性/独立性>もそれほど高いわけではないので、「納屋を壊す」は「拍手する」ほど典型的な瞬時的行為の離散的な反復事象ではない。

<sup>22</sup> どの点を完結点とみなすかはスケール上の目盛りの取り方による。上の例で言えば、1円ごとに目盛りを取れば1リッター100円から103円への上昇には三つの完結点が含まれるので変化が三回達成されたことになるが、1銭ごとに目盛りを取ればそれが百倍になる。しかし、この違いがここで論旨に影響を及ぼすことはない。

<sup>23</sup> この種の現象は、英語ではDowty (1979) の観察 (the soup cooled [in/for] 10 minutes)

以来多くの研究がなされているが、特に最近はこのような振る舞いを見せる動詞が段階的形容詞由来である点に着目したスケール構造理論の研究が興味深い展開を見せている (Kennedy and McNally 2005, Kennedy and Levin 2008, Piñón 2008 等を参照)。この点については日英語でいくつか違いがあるので本稿では踏み込まないが (例えば上の例文は対応する日本語文では容認度が異なる「スープが |10分で / ??10分間| 冷めた」)、この方向での研究には一般文法理論のレベルで変化達成の<段階性>の問題を検討する際に参考になるとと思われる洞察が散見される。

<sup>24</sup> 厳密に言えば、この判断を客観的にするには各動詞の使用頻度を用法別に調べる必要があるが、どのみち以下の動詞リストは包括的なものではないので、ここでは単に筆者にとって「代表的」と思われる用法のものだけを挙げておく。

<sup>25</sup> ただし、類型論的に言えば、日本語ではこのタイプの包入は主要な語彙化のパターンではない (この点に関しては Talmy (1985b)・松本 (1997) 等を参照)。

<sup>26</sup> つまり、行為主のコントロール下にある状態を活動中とみなしている。この仮定と4節で提示されるテイルの意味を合わせてはじめてこの種の動詞のテイル形 (例えば「お湯を沸かしている」) が<行為・変化進行>と解釈されるという事実が説明できる (詳しい議論は4節を参照)。

<sup>27</sup> 意図された変化が達成されるかどうかについても判断が異なることもある。例えば「紙を燃やしたが燃えなかった」のようなキャンセル文を容認する人もいればしない人もいる (宮島 1985: 348-353 を参照)。前者の心的辞書には「燃やす」は<1B>タイプの事象を表す動詞として登録されており、後者の脳には<2C>タイプとして貯蔵されていると考えられる。筆者は前者のグループに属するので本稿では<1B>タイプとみなしておく。

<sup>28</sup> ここで、この線引きはあくまで典型的な状況における用法に基づいたものであり、状況によって線の位置が変わり得るという点を再度強調しておく。例えば、<2C>タイプの一例として (27) で「開ける」を挙げたが、(新幹線の通路のドアのように) 開けた後に自動で閉まるドアを手で押さえて (あるいは足で端をふんで) しばらく開いた状態を維持しておくといった状況では、「開ける」は<2D>タイプとなる。

<sup>29</sup> ここで、「驚く」タイプでも文脈を整えれば「敢えて」と共に、または命令形で使えるという反論があるかもしれない。例えば、サプライズパーティーなどで驚かそうとしても驚きを見せない人に対して、「もっと驚け」とは問題なく言える。しかし、それは<命令>というよりむしろ<願望>に近いし、そう言われてできるのはそういう感情を外面的に示す表情・振る舞いをする事——つまり<行為>——であって、本当にその感情を心の内面に発生させる事——つまり<変化>——までは通常できない点に注意。本文で「命令形」の前に (真の) という限定句を付けてあるのはそのためである。

<sup>30</sup> これらと<2D>タイプとの線引きは難しい。例えば、海は自らの力で輝いているわけではないので「海が輝く」なら問題なく<4D>タイプと言えるが、「太陽が輝く」はどうだろうか。太陽は物理的には自らのエネルギーで輝いているが、それを人間・動物が自力で何かをする行為と全く同じタイプの事象と言語話者がみなすかどうかは自明ではない。3.1節で導入したテストを適用しても、判断は一致しない (「(?) 太陽が自ら / 自力で輝く」)。少なくとも [+行為] の事象がたいいて伴っている主体の<意志性>は含まれていないので、典型的な行為事象とは言えない。本稿では暫定的に<4D>タイプとみなしておく。

<sup>31</sup> ここで「あり始める」だけでなく「存在し始める」も容認しない話者がいるかもしれないが、「存在し始める」には下に挙げたような実例が少なからずあるのに対して「あり始める」は (筆者の調べた限りでは) 全くない上に、容認度の判断にも明らかに差があるのでやはり両者の間には線引きが必要である。

- (i) a. 文脈主義が、単なる項と項の間の関係にとどまらず、一つの実体として存在し始める時、そこに何者かの気配が立ち現れはじめる。(kenmogi.cocolog-nifty.com/

qualia/2004/09/post\_2.html)

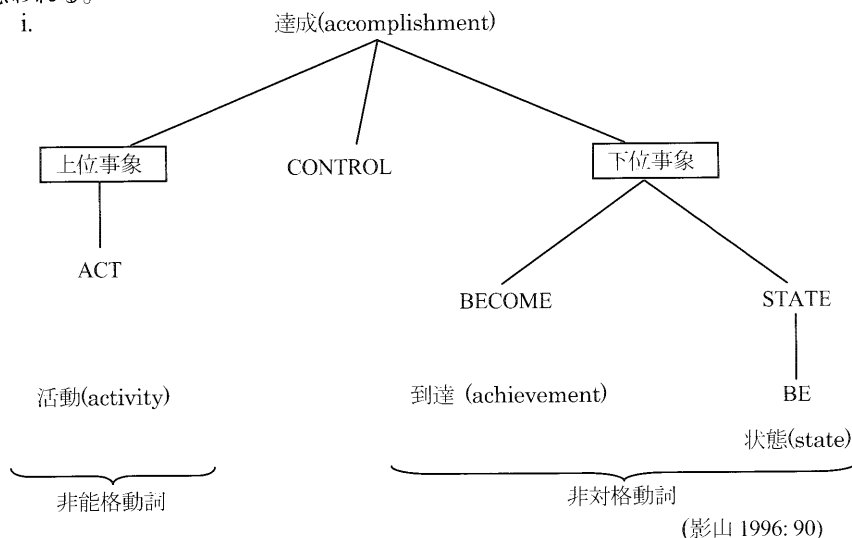
- b. けど東京に来て、高校の時に1歩引込む自分が存在し始めるようになってから、表と裏の自分がいるような気がしますね。(news.livedoor.com/article/detail/3047821)
- c. 作家は作品のあとにはじめて存在し始めるのである。  
(planet.wp.luac.net/feed/atom/user/36/tag/)
- (ii) a. \* 文脈主義があり始める時…  
b. \* 一歩引込む自分が「あり始める／い始める」ようになってから…  
c. \* 作家は作品のあとにはじめて「あり始める／い始める」のである。

しかし、(34)に挙げたすべての動詞がこの補助動詞と共起できるわけではない。例えば「(性格が)おっとりする」や「(目が)クリっとする」は共起できない(「??(性格が)おっとりし始める」・「\*(目が)クリっとし始める」)。従って、ここでの線引きにはまだ課題が残っている。ただし、それらはいたい属性叙述をする(上記の意味での)「形容動詞」なので、事象叙述をする典型的な動詞と同列に論じるべきではないであろう。

<sup>32</sup> 意味役割や文法関係の内部階層や両者を結ぶ連結規則などを十分に精緻化すればこのように個々の語彙／文ごとに外項・内項の指定をする必要はなくなるが、本稿では暫定的に個別に指定しておく。

<sup>33</sup> ここで問題にしているのは(a)～(d)で挙げた特定のアスペクト情報であって、以下で組上に載せる(いずれも記述範囲が広く示唆に富んだ)先行研究がアスペクトを全く無視しているわけではもちろんない。

<sup>34</sup> 議論の公正さのために付記しておくが、影山(2001a)は単に説明の便宜上(43c)のような行為連鎖を提示しているだけで、本来はそれをさらに精緻化した次のような構造を仮定していると思われる。



ここで影山(1996)は「この構造で、使役事象が左側、結果事象が右側に並べられていることに注意したい。これは上位事象と下位事象との時間的流れを捉えている。」(p.90)と述べているが、この構造にしても本文で挙げた(a)～(d)のアスペクト情報はほとんど捉えられていないという点は変わらない。

<sup>35</sup> 厳密に言えば、(46ci)のbuildは主体の行為と産物が完成するまでの変化は時間的に並行して進むので、オンセット使役の例としては不適當である。

<sup>36</sup> これはあくまで上で挙げた七つの動力学・アスペクト情報の記述にとって十分であるというだけで、後ほど示されるようにそれ以外の情報を記述するにはさらなる精緻化が必要になる。

<sup>37</sup> <意志>が始動点後どこまで継続して<行為・変化>に効力を及ぼしているかはそれを示す形式的証拠がないのではっきりとはわからないが、少なくとも活動中はその力の影響があると推測されるので、<原因層>にも「+持続」を示す線が付けてある。

<sup>38</sup> このような層レベルの焦点の指定は、次節で示されるようにそうする必要のある現象が他にもいくつかあるので、この特定の現象のためにアド・ホックに仮定されたものではない。

<sup>39</sup> 厳密に言えば、介在文の説明にはこれらの条件に加えて原因主と行為主の関係や行為主の内在的性質などにさらに細かい意味的指定がいくつか必要だが（佐藤 2005：4 章を参照）、それによってここでの論旨が変わることはない。

<sup>40</sup> 認知文法の枠組みでのアスペクト分析はLangacker (1982；1987：§ 7.2；2008：§ 5.2) を、その日本語への応用例は野村 (2007) を参照。ただし、Langacker は<perfective/imperfective>——本稿の用語では<完結/非完結>——以外には事象/動詞のアスペクトに関する細かい区別をしていない上に、日英語の動詞・アスペクト表現には大きな違いがいくつかあるので、厳密に言えばLangacker が提案している英語アスペクトの分析をそのまま日本語に適用してもうまくいかない点が多い。具体的には、「非有界的に前景化する」という部分はLangacker の洞察を取り入れるが、それ以外は3節で提案した事象/動詞分類に基づく新たな分析をしないと日本語のアスペクト現象はうまく記述・説明できない。

<sup>41</sup> この種の解釈を指す用語としてより広く確立している「動作進行」という呼び名を使用しないのは、「動作主」という用語を使用しないのと同じ理由からである。

<sup>42</sup> ちなみに、事象反復の時間的幅には原理的な制限はないので、上記の例のような日常生活レベルの反復事象だけでなく、「ハレー彗星は約76年周期で地球に接近している」のような数百年レベルの反復事象でさえ同じ形式（動詞+テイル形）で表すことができるという点にも注意。

<sup>43</sup> 厳密に言えば、(79) は単に変化の部分だけが概念化された場合の構造である。それを引き起こした行為の部分まで背景化した形で含めて概念化されれば、(45) をベースにした構造になるであろう。

<sup>44</sup> 工藤 (1995) が詳しく論じているように、<パーフェクト>は<テンス・ムード>等と複合的に絡み合っているので、テイル形の<パーフェクト>用法を正確に記述・説明するにはそれらを考慮に入れた体系的な分析をする必要がある。その方向での詳細で精緻な分析は工藤 (1995：96ff) を参照。

<sup>45</sup> 厳密に言えば、金田一 (1955/1976) は「将然」という用語を上で定義した局面（成立点前の局面）をピンポイントで指して使っているわけではなく、テイル文の一用法——具体的には2節で挙げた「本を読もうとしている」のような用法——を指すのに用いている。ちなみにその表現を将然相志向にしているのはテイルの部分ではなく「しようとする」の部分なので、その例をテイルの分類に使い、それを「将然」と呼ぶのはむしろ不適當であるように思われる。

## 参考文献

- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, and Martin Everaert (2004) *The Unaccusativity Puzzle: Explorations of the Syntax-Lexicon Interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Bhat, D.N.S. (1991) *Grammatical Relations*. London: Routledge.
- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive*

- Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Delancey, Scott (1985) Agentivity and Syntax. *Papers from the 21<sup>st</sup> Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society: Parasession on Causatives and Agentivity*, 1-12.
- Dixon, D.M.W. (1977) Where have all the adjectives gone? *Studies in Language* 1, 19-80; Revised version published in Dixon, D.M.W. (1982) *Where have all the adjectives gone? and other Essays in Semantics and Syntax*, 1-62. Berlin: Mouton.
- Dixon, D.M.W., and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) (2004) *Adjective Classes: A Cross-linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press.
- Dowty, David R. (1977) Toward a Semantic Analysis of Verb Aspect and the English 'Imperfective' Progressive. *Linguistics and Philosophy* 1, 45-77.
- Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar: The Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: Kluwer.
- 江連和章 (2008) 「Event Cancellation ——使役連鎖からの考察——」上智言語学会第23回大会口頭発表ハンドアウト.
- 藤井正 (1966) 「『動詞 + ている』の意味」『国語研究室』5, 東京大学、金田一春彦 (編) (1976), 97-116 に再録.
- Harasawa, Itsuo (1994) A Pragmatic View of V-te-iru and V-te-aru. *Journal of Pragmatics* 22, 169-197.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」——主文末の「…タ」の意味について——」つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』, 97-163. ひつじ書房.
- 岩本遠億 (2002) 「日本語空間表現のAspectについて」*Scientific Approaches to Language* 1, 77-107. 神田外語大学言語科学研究センター.
- 岩本遠億 (2006) 「事象の限界性の決定要因について——事象投射理論による試み——」『言語科学研究』12, 27-72. 神田外語大学言語科学研究センター.
- 岩本遠億・上原由美子 (2003) 「結果の「ている」の概念的意味」*Scientific Approaches to Language* 2, 135-169. 神田外語大学言語科学研究センター.
- Jacobsen, Wesley M. (1979) Transitive Verbs, Dynamic Verbs, and Aspect in Japanese. *Proceedings of the 15<sup>th</sup> Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 160-170.
- Jacobsen, Wesley M. (1982) Vendler's Verb Classes and the Aspectual Character of the Japanese *te iru*. *Proceedings of the 8<sup>th</sup> Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 373-383.
- Jacobsen, Wesley M. (1992) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kurosio.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1991) Parts and Boundaries. *Cognition* 41, 9-45.

- Jackendoff, Ray (1996) The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps even Quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論——言語と認知の接点——』 くろしお出版.
- 影山太郎 (2001a) 「序 動詞研究の現在」 影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』, 3-10. 大修館.
- 影山太郎 (2001b) 「自動詞と他動詞の交替」 影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』, 12-39. 大修館.
- Kennedy, Christopher, and Louise McNally (2005) Scale Structure and the Semantic Typology of Gradable Predicates. *Language* 81, 345-381.
- Kennedy, Christopher, and Beth Levin (2008) Measure of Change: The Adjectival Core of Degree Achievements. In Louise McNally and Christopher Kennedy (eds.) *Adjectives and Adverbs: Syntax, Semantics, and Discourse*, 156-182. Oxford: Oxford University Press.
- Kishimoto, Hideki (1996) Split Intransitivity in Japanese and the Unaccusativity Hypothesis. *Language* 72, 248-286.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2000) 「非対格性再考」 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』, 71-110. ひつじ書房.
- 金水敏 (2000) 「時の表現」 金水敏・工藤真由美・沼田善子 『日本語の文法 2 時・否定ととりたて』, 1-92. 岩波書店.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」 『言語研究』 15. 金田一春彦 (編) (1976), 5-26 に再録.
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」 『名古屋大学文学部研究論集』 X. 金田一春彦 (編) (1976), 27-61 に再録.
- 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房.
- 国立国語研究所 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版.
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」 『武蔵大学人文学会雑誌』 13(4), 51-88.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』 ひつじ書房.
- 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」 『言語研究』 88, 1-19.
- 黒田亘 (1975) 『経験と言語』 東京大学出版.
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1982) Remarks on English Aspect. Paul J. Hopper (ed.) *Tense-Aspect: Between Semantics and Pragmatics*, 265-304. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford, CA: Stanford University Press.

- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II: Descriptive Application*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lyons, John (1977) *Semantics, Volume 2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミ——語彙的使役動詞の語彙概念構造——』松柏社.
- Matsumoto, Yo (1996) Subjective Motion and English and Japanese Verbs. *Cognitive Linguistics* 7,183-226.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』, 125-230. 研究社.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院、くろしお出版復刊 (1972).
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原健一『ヴォイスとアスペクト』, 107-196. 研究社.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
- 宮腰幸一 (近刊) 「日英語の周辺の結果構文——類型論的含意」小野尚之 (編) 『結果構文のタイプロジー』ひつじ書房.
- 森山卓郎 (1983) 「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢』17, 1-22.
- 森山卓郎 (1984) 「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』3(12), 70-84.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 中村英子 (1997) 「動作動詞テイル形の「反復」について——「反復」の解釈が生まれる諸条件——」『日本語教育』93, 73-84.
- Nara, Hiroshi (1999) Strength of Evidence and the Semantics of the Japanese-*te iru* Aspect Affix. *Language Sciences* 21, 423-447.
- 西村義樹 (1998) 「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』, 107-203. 研究社.
- 仁田義雄 (1982) 「動詞の意味と構文——テンス・アスペクトをめぐる——」『日本語学』1 (11), 33-42.
- 野村益寛 (2007) 「認知言語学から見た日本語アスペクト」『日本語学』26(3), 6-12.
- Ogihara, Toshiyuki (1998) The Ambiguity of the *-te iru* Form in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 7, 87-120.
- 奥田靖雄 (布村政雄) (1977) 「アスペクトの研究をめぐる——金田一的段階——」『宮城教育大学国語国文』8, 51-63.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐる (上) (下)」『教育国語』53, 33-44; 54, 14-27.



- 奥田靖雄 (1988) 「時間の表現 (1) (2)」『教育国語』94, 2-17; 95, 28-41.
- 尾上圭介 (1982) 「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1(12), 17-29.
- Perlmutter, David M. (1978) Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. *Proceedings of the 4<sup>th</sup> Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 157-189.
- Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Piñón, Christopher (2008) Aspectual Composition with Degrees. In Louise McNally and Christopher Kennedy (eds.) *Adjectives and Adverbs: Syntax, Semantics, and Discourse*, 183-219. Oxford: Oxford University Press.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*. London: Macmillan.
- 佐藤琢三 (1999) 「ナツテイルによる単純状態の叙述」『言語研究』116, 1-21.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院.
- Shirai, Yasuhiro (1998) Where the Progressive and the Resultative Meet: Imperfective Aspect in Japanese, Chinese, Korean and English. *Studies in Language* 22(3), 661-692.
- Shirai, Yasuhiro (2000) The Semantics of the Japanese Imperfective-*te iru*: An Integrative Approach. *Journal of Pragmatics* 32, 327-361.
- 城田俊 (1998) 『日本語形態論』ひつじ書房.
- Smith, Carlota S. (1997) *The Parameter of Aspect* (Second Edition). Dordrecht: Kluwer.
- 副島健作 (2007) 『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房.
- 須田義治 (2003) 『現代日本語のアスペクト論』海山研究所.
- 須田義治 (2007) 「現代日本語のアスペクト研究」『日本語学』26(3), 13-21.
- 鈴木重幸 (1957) 「日本語の動詞のすがた (アスペクト) について——～スルの形と～シテイルの形——」言語学研究会報告、金田一春彦 (編) (1976), 63-81 に再録.
- 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」教育科学研究会文法講座テキスト、金田一春彦 (編) (1976), 117-153 に再録.
- 高橋太郎 (1976) 「解説 日本語動詞のアスペクト研究小史」金田一春彦 (編) (1976), 329-360.
- 高橋太郎 (2003) 『動詞9章』ひつじ書房.
- 竹沢幸一 (1991) 「受動文、能格文、分離不可能所有文と『ている』の解釈」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』, 59-81. くろしお出版.
- Talmy, Leonard (1985a) Force Dynamics in Language and Thought. *Papers from the 21<sup>st</sup> Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society: Parasession on Causatives and Agentivity*, 293-337.
- Talmy, Leonard (1985b) Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms. In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description: Volume 3:*

- Grammatical Categories and the Lexicon*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1996) Fictive Motion in Language and “Ception”. Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel, and Merrill F. Garrett (eds.) *Language and Space*, 211-276. Cambridge, MA: MIT Press.
- Toratani, Kiyoko (1998) Lexical Aspect and Split Intransitivity in Japanese. *Papers from the 34<sup>st</sup> Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society: The Main Session*, 377-391.
- Tsujimura, Natsuko, and Masayo Iida (1999) Deverbal Nominals and Telicity in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8, 107-130
- Tsujimura, Natsuko (2003) Event Cancellation and Telicity. *Japanese/Korean Linguistics* 12, 388-399.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.
- Verkuyl, Henk (1972) *On the Compositional Nature of the Aspect*. Dordrecht: Reidel.
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究：類型論的視点から』 明治書院.
- 矢澤真人 (1983) 「情態修飾成分の整理——被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察——」  
『日本語と日本文学』 3, 30-39.
- 矢澤真人 (1985) 「情態修飾成分と <シテイル> の意味」『日本語学』 4(2), 63-80.
- 矢澤真人 (2007) 「日本語情態修飾関係の研究」 博士論文、筑波大学.
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」 *Linguistic Communications*, Monash University、金田一春彦 (編) (1976), 155-327 に再録.
- 吉川千鶴子 (1995) 『動詞の文法——発想の違いから見た日本語と英語の構造——』 くろしお出版.
- 吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 和泉書院.